

執筆者 渡辺勇助

明治學院八十年史

明治學院蔵版



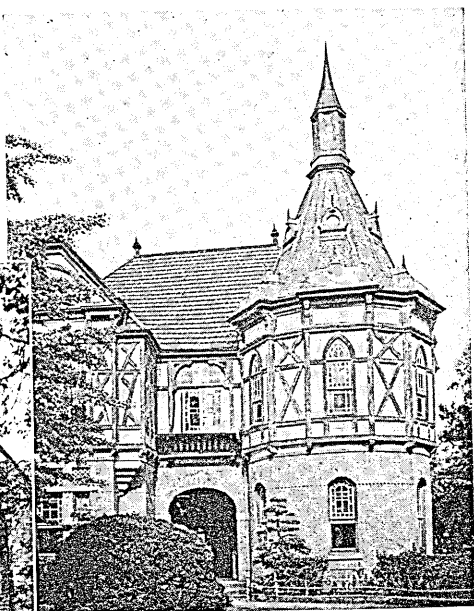
田川大吉郎氏



多田 素氏



礼拜堂の一角

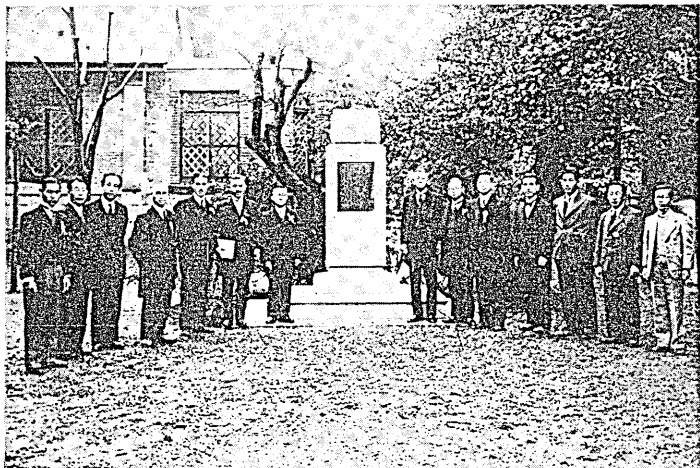


同窓会館〈旧図書館〉

矢野 貫城氏



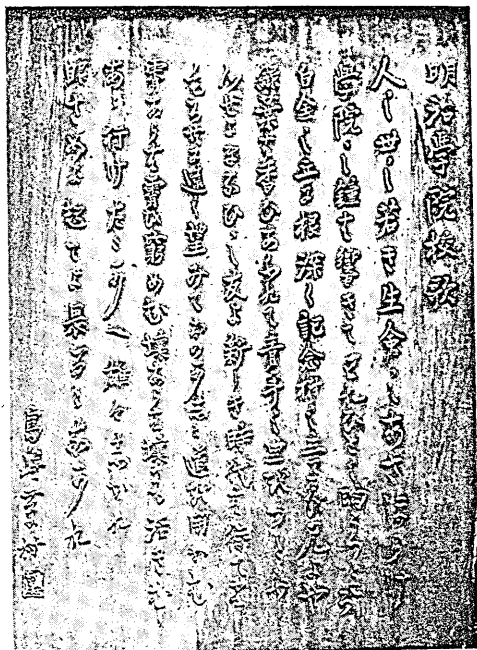
ホキエ博士



校歌碑建設記念 〈左より五人目中山昌樹氏〉



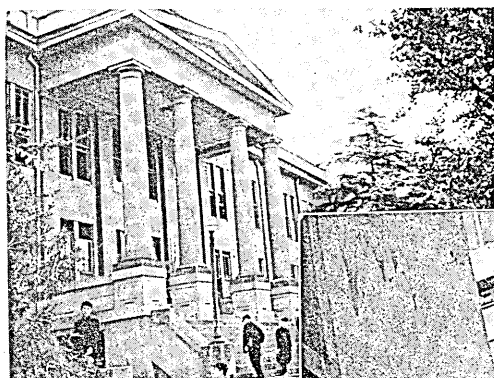
富田 満氏



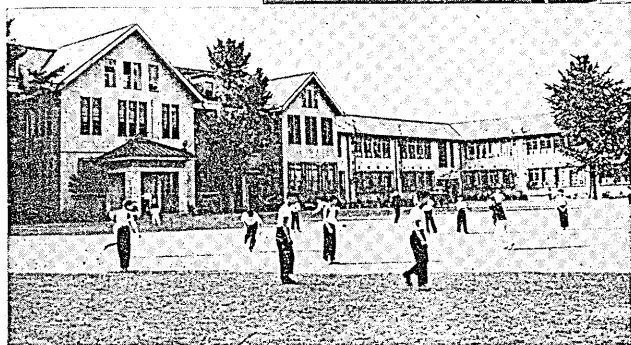
都留 仙次氏



村田 四郎氏



高等学校の玄関



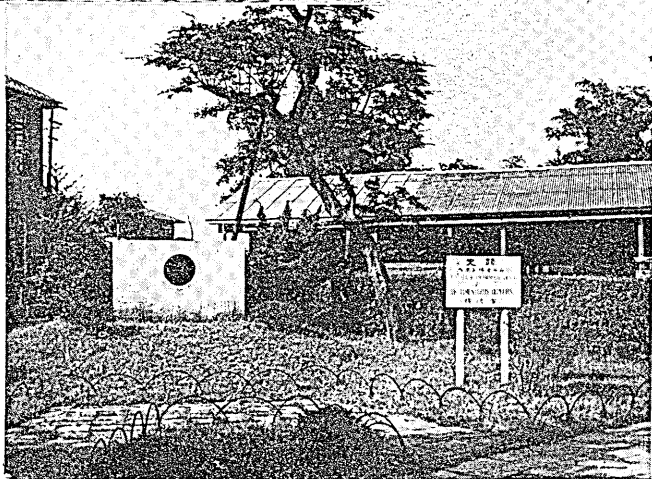
大学の一隅

グラウンドから中学校をのぞむ

ヘボン博士とその夫人



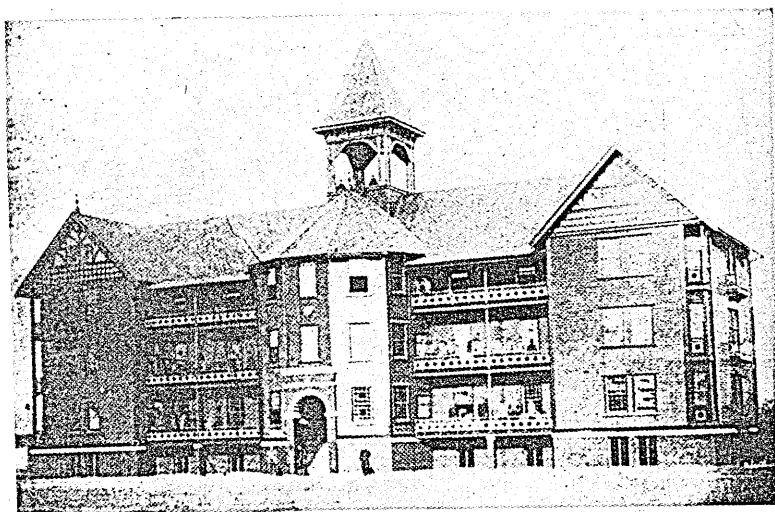
横浜谷戸橋・ヘボン塾のあと



ヴァベック博士



ブラウン博士

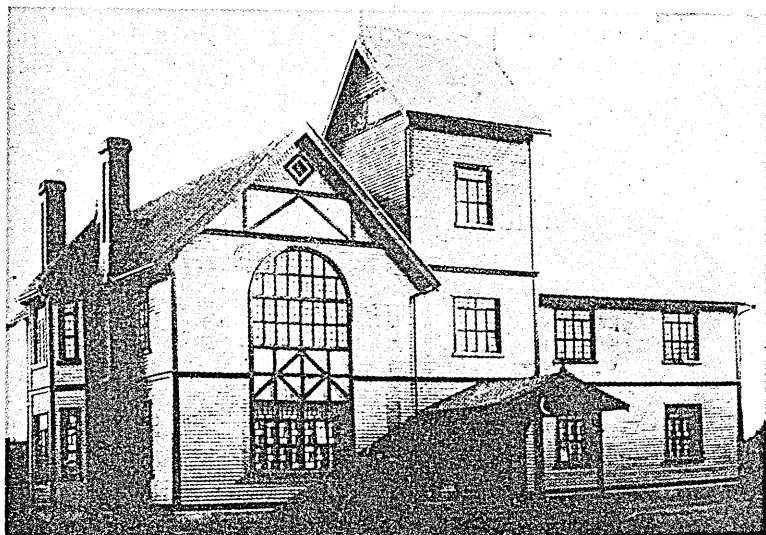
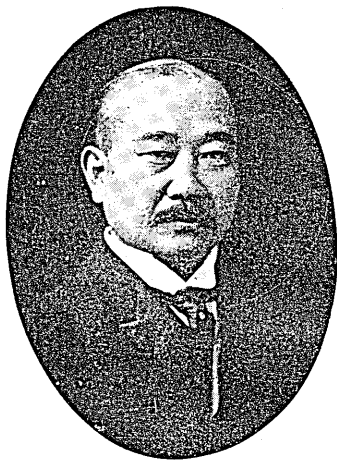


旧ヘボン館

熊野 雄七氏



井深樗之助氏



サングダム館のおもかげ



オルトマンス博士



白金村玉縄台の頃



文学会の講演会
 〈前列右より二人目は学生賀川豊彦氏〉



島崎春樹(藤村)と学友 〈左端が藤村〉

明治学院八十年史

序

わが明治学院は明治十年、即ち一八七七年の創立であつて、今年正に、その八十周年に当るのである。われわれはこの久しきに亘る年月、学院を守り育てた神の恩寵を深く感謝すると共に、その創立の精神を確かと汲み取り、その歩んで来た路を点検し、進んでその尊い伝統を現実の社会に生かす任務を遂行しなければならぬと思ふ者である。

学院はこの記念すべき年の記念事業として明治学院八十年史を出版し、一つには、この貴重な記録を親しい同学の士達に頒つて、喜を共にし、また一つには将来への大切な資料として後世に遺す事とした。

歴史は生命の流れの記録である。それは客観的事実の集録であると共に、学院の生態の投映であり、学院の性格の露呈、生命的躍動の表現である。

この歴史の編纂事業には数名の委員及び顧問たちの賛助を煩らわしたが、これが取り纏

め、整理、執筆の衝には渡辺勇助氏に当つて貰うことにした。

この明治学院八十年史は、生育の途上にある学院の一時期を物語る記録である。過去八十年の歩みに於て、学院が偉大なる成長を遂げたことに就ては、之を否む者はないであろう。

しかし学院が今現に向上発展しつつある事實は、さらに顕著な事である。そしてまた、将来に於て格段の驚くべき進歩充実を達成すべき約束のもとにあることは、われわれの衷心からの希願であり、また信念である。

この明治学院八十年史は上記のような、学院の生命的脈動を如実に伝えるものである。

昭和三十二年九月

明治学院にて

都 留 仙 次

目次

明治学院沿革

第一章 創始者の倂 一七

一、ヘボン、ブラウン、ヴァベック三博士の渡来 一七

二、神奈川に於けるヘボン氏の事業 二〇

三、横浜のヘボン治療所とヘボン塾 二三

四、ブラウン氏と井深氏 二三

五、長崎に於けるヴァベック氏 二六

六、聖書の翻譯 二七

七、ブラウン氏の略歴 三〇

八、ヘボン氏の略歴 三三

九、ヴァベック氏の略歴 三九

十、ワイコフ氏の略歴 四一

第二章 揺籃期 五四

目 一、築地と白金 三三

二、東京一致神学校	四〇
三、東京一致英和学校及び神田予備校	四八

第三章 明治学院の創立と最初の順調期	五三
--------------------	----

一、三校合併問題	五二
二、建築と移転	五四
三、順調期（明治二十年—二十六年）	五五
四、明治学院の憲法及職制の制定	五七
五、「藤村学びし頃」より	五九
六、植村正久氏と神学部	六六

第四章 憂難期及び其後	六九
-------------	----

一、憂難期	六九
二、興隆期	七三
三、変易期	七五

第五章 膨脹期	八二
---------	----

一、創立四十週年記念式	八二
二、功勞ある二氏の永眠	八三
三、中学部の膨脹	八四

四、関東大震災	八八
五、井深総理の辞任	八九
六、ランデス教授の永眠	九一
七、高等学部 of 拡張	九三
八、学院創立五十年記念式	九六
九、高等学部の進展	九八
十、田川総理（学院長）の退陣	一〇一
第六章 戦時下の学院	一〇三
一、六十年記念式	一〇三
二、時局への協力	一〇五
三、憲法及職制の改正	一〇六
四、基督教諸学校の戦時色	一〇八
五、戦況の推移	一一四
六、学院の勤労働員	一二六
七、今次戦争の応召者戦死者其他	一三〇
八、学院功労者の永眠（事变以降）	一三三
第七章 戦後の躍進	一三八
一、戦後十二年間の変遷概観	一三八

二、戦後の学院の変遷と矢野氏の辞任	二〇〇
三、創立七十周年記念式	二〇三
四、六・三・三制の発足	二〇四
五、新制大学発足	二〇四
六、大学其後の発展	二〇七
七、同窓会	二一五
八、校地の変遷について	二一四
九、学院の建築計画	二一七
十、募金活動	二八二
十一、八十周年記念式典計画	二八五

第八章 将来の学院

一、学院の自由教育	二八八
二、思想あり信仰ある学府	二八九
三、大学南校と学院の成立	二九三
四、礼拝の問題	二九五
五、理想教育	二九七
六、自由と敬虔が永遠に	二九八
七、明治学院大学の特色	三〇〇
八、学院を恩寵の家に	三〇三

明治学院沿革

明治学院の歴史は、公けには明治十年九月S・R・ブラウン博士の「ブラウン塾」から一致教会教育機関として発展した「東京一致神学校」に始まる。しかしその淵源は更に遠く文久三年（一八六三年）横浜に開設されたJ・C・ヘボン博士の英学塾に遡ることができる。この時からすれば、実に九四年の歴史を有し、わが国において最も古い歴史を誇る学府の一つである。ここに学院の公けの歴史を略述すれば次の通りである。

一八七七年（明治十年）九月、一致教会の教育機関として、東京築地明石町に東京築地一致神学校設立さる。

一八八〇年（明治十三年）九月 横浜のヘボン塾、東京築地明石町に移され、築地大学校と改称す。

一八八一年（明治十四年）十月 横浜に先志学校設立さる。

一八八三年（明治十六年）九月 築地大学校横浜先志学校の二校を合併して、東京一致英和学校と改称す。

一八八四年 (明治十七年) 九月 東京一致英和学校の予科として、神田淡路町に、東京英和予備校設立さる。

一八八六年 (明治十九年) 四月 明治学院創立案制定のため、第一回理事会開催さる。

九月 東京一致神学校、東京一致英和学校および神田英和予備学校の三校を合併して、明治学院と称す。十月現在地(当時白金村)に校地を求む。

一八八七年 (明治二十年) 一月 私立明治学院設立認可さる。修業年限は、普通部予科二年、本科四年、専門学部(神学)三年と定めらる。

九月 普通学部を新校地に移転す。

一八八九年 (明治二十二年) 十月 医学博士・法学博士J・C・ヘボン初代総理に、井深梶之助副総理に就任す。

一八九〇年 (明治二十三年) 九月 専門学部を神学部と改称し新校地に移転す。

一八九一年 (明治二十四年) 十月 総理J・C・ヘボン、その職を辞し、副総理井深梶之助第二代総理に就任す。十二月 明治学院憲法および職制制定さる。

一八九四年 (明治二十七年) 一月 普通学部の本科予科制を改めて、高等学部(二年)および(普通学部)五年とす

一八九八年（明治三十一年）六月 普通学部は中等学校令による尋常中学校の資を受

け、明治学院尋常中学部と改称す。

一九〇〇年（明治三十三年）三月 尋常中学部を改めて普通学部とす。

七月 普通学部は専門学校入学者検定規定指定に関する規則により中学校と同等以上と指定さる。

一九〇二年（明治三十五年）四月 高等学部の修業年限を三年に改む。長崎東山学院神学部を明治学院神学部へ合併し、その生徒を受入れる。

一九〇三年（明治三十六年）十一月 高等学部および神学部、専門学校令により許可さる。

十二月 日本基督教会の信仰箇条を明治学院の教義の標準とす。

一九〇五年（明治三十八年）三月 財団法人明治学院認可さる。

一九一一年（明治四十四年）四月 文部省令により普通学部は各高等学校に優等卒業生無試験入学の特典を得る。

一九一四年（大正三年）十二月 普通学部は文官任用令の規定による認可を受く（ただし効力は明治三十三年七月に遡る）

一九一五年 (大正四年) 二月 普通学部を中学部と改称す。

一九一七年 (大正六年) 七月 高等学部を分科制(文芸科・英語師範科・商業科)とし修業年限を四年に改む。(翌七年発足)

一九二〇年 (大正九年) 七月 高等学部文芸科および商業科の修業年限を三年に改む。

一九二一年 (大正十年) 三月 総理井深梶之助辞任し、神学博士アルバート・オルトマンス総理事務取扱に就任す。四月 神学部を東京淀橋に移転す。

一九二五年 (十正十四年) 一月 総理事務取扱アルバート・オルトマンス辞任し、田川大吉郎第三代総理に就任す。四月 高等学部商業科卒業生に対し、商業および簿記の二科目につき、中等教員無試験検定の取扱を受く。

八月 高等学部は文部省令、高等試験令により、高等学校高等科もしくは大学予科と同等以上と認定さる。十月 高等学部のうち、文芸科、英語師範科の二科を合併して英文科と称し修業年限を四年とす。

一九二七年 (昭和二年) 九月 高等学部商業科は計理士法により大正十二年以後の卒業生につき無試験計理士登録の資格を認めらる。

一九二八年 (昭和三年) 四月 高等学部のうち商業科を独立せしめ高等商業部と改称

す。高等学部社会科学を置く。

一九三〇年（昭和五年）三月 神学部は日本神学校の設立に伴い本学院より分離す。四

月 高等学部英文科卒業生に対し、英語科中等教員無試験検定の取扱を受く。

一九三一年（昭和六年）四月 高等学部および高等商業部に研究科を置く。

一九三四年（昭和九年）四月 高等学部の社会科学を社会事業科と改称す。

一九三五年（昭和十年）四月 高等商業部に第二部（夜間）を置く。

七月 総理の名称を学院長と改む。十二月 学院長田川大吉郎辞任し、神学

博士ウィリス・G・ホキエ学院長事務取扱に就任す。

一九三九年（昭和十四年）九月 矢野貫城第四代学院長に就任す。

一九四〇年（昭和十五年）四月 明治学院憲法および職制を改正し、新たに明治学院学

制を定む。高等学部東亜科を置く。

一九四二年（昭和十七年）三月 高等学部社会事業科を厚生科と改む。

一九四四年（昭和十九年） 高等商業部は青山学院文学部同高等商業部および関東学院

高等商業部を統合し、明治学院専門学校と改称し新たに経済科、経営科、東

亜科（大陸分科および南方分科）および経済科第二部を置く。

高等学部は専門学校に統合さる。

一九四五年

(昭和二十年) 十二月 経済科卒業者に対し、中学校ならびに高等女学校実業科のうち商業、東亜科南方分科(英語を第一外国語とするもの)卒業者に対し同外国語のうち英語科教員無試験検定取扱継続の件承認さる。

一九四六年

(昭和二十一年) 四月 東亜科を文科と改称して南方分科を英文科、大陸分科を華文科とし、経営科を社会科、経済科第二部を商経科と改称し、新たに夜間に英語科を置く。英文科は英語につき無試験検定の取扱を継承す。五月華文科(旧東亜科大陸分科)に対し、外国語科のうち支那語につき昭和二十年九月以降の卒業者に限り中学校、高等女学校教員検定規定第七条第二号の取扱を為すの件許可さる。六月英語学校を設く。

一九四七年

(昭和二十二年) 四月 新学制により中学部は明治学院中学校とする。八月学院長矢野貫城辞任す。

一九四八年

(昭和二十三年) 四月 村田四郎学院長に就任す。新制高等学校設置さる。

一九四九年

(昭和二十四年) 四月 新制大学設立認可され文経学部第一部(英文学科、社会学科、経済学科)および第二部(夜間同前)開設され、神学博士村田四

郎学長に就任す。

一九五〇年（昭和二十五年）三月 専門学校社会科は国民科のうち修身、英語科は外国語科のうち英語につき教員無試験検定の取扱を受く。六月 日本商科大学を併合す。

一九五一年（昭和二十六年）四月 学校法人明治学院に組織変更さる。

一九五二年（昭和二十七年）四月 文経学部第一部および第二部の名称を変更して文学部（英文学科、社会学科）および第二部（同前）とし、別に経済学科を独立して、経済学部および同第二部とし、経済学科のほか新たに商学科を開設、文学部長事務取扱に神学博士村田四郎、経済学部長事務取扱に経済学博士服部文四郎就任す。

一九五四年（昭和二十九年）四月 明治学院大学学長に神学博士村田四郎再任、文学部長に文学博士高橋源次、経済学部長に経済学博士服部文四郎就任す。明治学院大学第一部および第二部の教育職員免許課程についてそれぞれ中学校教諭一級普通免許ならびに高等学校教諭二級普通免許授与の認定を受く。

一九五五年（昭和三十年）二月 経済学部長服部文四郎死去す。学長村田四郎経済学部

長事務取扱に就任す。四月 明治学院大学大学院文学研究科英文学専攻（修士課程）を設置す。

一九五六年（昭和三十一年）四月 文学部長に若林竜夫経済学部長に斎藤茂夫就任す。

明治学院大学大学院の教育職員免許課程について高等学校教諭一級（英語）普通免許授与の認定を受く。

一九五七年（昭和三十二年）三月 学院長兼学長村田四郎辞任す。

四月 神学博士都留仙次学院長に就任す。

緒言

学院創立八十周年に当り「明治学院八十年史」編纂執筆の任に當るようとの命を受けたが自信がないため大に迷つていた、しかし数名の方々の激励により決心して筆才をも顧みずお引受けしたのであつた。昭和二年学院五十周年に当り鷺山第三郎氏が五十年史を編纂されたが其後に於ける三十年間の日本の歩みを振り返つて見ると、その大部分が戦争の歴史で、結局日本は太平洋戦争の失敗により未だ曾て経験したことのない敗戦の苦杯を嘗め、国民全体が言語に絶する惨禍に遇つたのである。学院自体もこの間にあつて戦争の嵐に巻き込まれ長い苦悩の年月を過したが、平和回復と共に学院本来の姿を取り戻し、漸く輝かしい発展の新時代を迎えた。

言
とはいうものの、学院の将来に平々坦々たる大道が開かれているという訳では決してない。その過去に於いて絶えざる辛苦があつた如く、今後といえども尙棘の道は続くものと思わなければならない。

緒
科学の進歩の目覚ましい時代は信仰に立つ者にとつて悩み多き時であるが現代はまさに

其の時である。原子力は恐るべき兵器であると共に人類に幸福をもたらす第二の火となつた。死者を甦らせ或は生命を人工的に創り出す研究が進められている。多年懸案の人工衛星は遂に打上げに成功した。やがて月或は遊星への旅行が実現されようと云われている。かかる時代にあつては科学の力が如何にも大きく感ぜられ、宗教は太陽の前の朝霧の如く雲散霧消するのではないかとさえ疑われる。

しかし此のような経験を人間は過去に於て幾度かくり返した。進化論が唱道され始めた時がそうであり聖書に對する高等批評の盛んなりし時代がそうであつた。しかしその亢奮が過ぎ去つた後に聖書の權威と価値は嚴然としてゆるがなかつた。

もし学院が現代の物質力と世俗主義セキユラリズムの嵐に目がくらみ、世の光、地の塩たるの味を失うならば後は用なし人に踏まるのみであらう。

如何なる困難の時にも神は必ず荒野をさまようイスラエルの民を助けた如く雲の柱、火の柱を以つて我学院を導き給うことを信じて疑わない。

昭和三十二年十月

執筆者 渡 辺 勇 助

第一章 創始者の倂

一 ヘボン、ブラウン、ヴァベック三博士の渡来

第一章 創始者の倂

西暦一八五九年（安政六年）北米ニューヨークのダッチ・リフォームド・ミッシヨンは、在米オランダ人と協力して日本への宣教師派遣を企てた。オウバン町の南、オワスコ湖畔のアウトレット町にあるサンドビーチ教会の徳望高き牧師、サムエル・ロビン・ブラウン氏はミッシヨンの求めに応じ、オランダ生れの青年学徒、ギドウ・エフ・ヴァベック氏及び有能の医師シモンズ氏と共に各々其妻を伴つて同年五月七日、サープライズ号という小船でニューヨークの埠頭を出帆した。この三夫妻は皆其の残る生涯の凡てを日本の為に捧げようとの決心を以つて、基督教禁制下、攘夷論沸騰する黎明期の日本を望んで鵬程万里の壮途に上つたのである。この時ブラウン氏は四十九歳、ヴァベック氏は二十九歳でブラウン氏の教会に於ける外国伝道志望の三婦人の一人マリヤ・マンヨンと結婚したばかり

りであつた。埠頭には大勢の親戚友人が涙にくれて、この再会を期し難い別れを惜しんだが、その中の一人で後にブラウン氏の跡をしたつて来日し、最初の日本基督公会を創設し、日本基督教会の基をなす重要な人物の一人となつたジエームス・バラ氏は

「一八五九年の五月にニューヨークの埠頭から、記念すべき船サープライズ号が船出した事は到底忘れない。埠頭には国旗がひるがえり、陸には殷々たる砲声が轟いて居た。それは従来ジパングと称ばれて居た国に、恩寵の使節なる三名の男子と其の妻達を送るべく放たれた砲声であつた。」と語つてゐる。

しかし日本の情勢があまりに險惡であつた為三人は途中上海に妻をのこし、オランダ人であるヴァベック氏は長崎へ上陸する方が得策と考えられたので、僚友に別れ單身長崎へ向つた。同年十一月一日、半歳に亘る長い航海を経てこの偉大なる我国文化の開拓者ブラウン氏は、江戸湾内なる神奈川に上陸した。浜辺にはブラウン氏より約半月程前の十月十八日に、プロテスタント宣教師としての最初の足跡を我国に印したプレスビテリアン・ミッション派遣の「第一日本宣教師」ジエームス・カーテス・ヘボン氏が夫人と共に出迎えていた。ヘボン氏とブラウン氏は嘗て中国伝道の折、シンガポールで相知り親交を結んだ間柄であつたが、此の異国の涯なる神奈川の邂逅が、どれ程彼等感激せしめたかは想像

に余りがある。シモンズ氏は別れて宗興寺に落ち着き、ブラウン氏はヘボン氏の仮寓する成仏寺に居を定め、ヘボン氏は本堂に、ブラウン氏は庫裡にあつて互に廊下伝いに往き来して旧交を温め、日本語の研究、聖書の翻譯、伝道に関する将来の方針等に協力する事となつた。當時は未だキリシタン禁制の高札が辻々に掲げられ、基督教の伝道は固く禁ぜられて居たが外人の礼拝は許されていたので、ブラウン氏の渡来と共にヘボン氏は長老として、ブラウン氏は牧師として日曜礼拝及び其他の集会を行い、米領事館員を始め各教派の外人が来り会した。

ブラウン氏は又可成の危険を冒して長崎、神戸、大阪等を踏査して、将来に於ける日本全土の伝道の劃策をしたが氏は米國ミッシェンに対して次のような意見書を送つてゐる。

「苟くも宣教師として日本に派遣さるべきものは信仰に於いても學識に於いても第一流の人物たる者、特に度量が大きく快活、温和、平等觀念の強い者でなければならぬ。何となれば日本人は礼節を重んじ、喜怒哀樂を面に表わさず、仇敵に対しても微笑を以つて語ると言う國民である。一方他人の威嚇や、圧迫には決して甘んじて居ない云々」

初代の宣教師達が日本の至る所で尊敬の的となつたのは一つにはこのブラウン氏の意見にミッシェンが聴従したからではあるまいか。

二 神奈川に於けるヘボン氏の事業

当時我国に於ける庶民の生活状態は甚しく非衛生的且つ非文明的であつたが、ヘボン氏はシモンズ氏が横浜へ移つたあと、宗興寺を借りて治療所に充て治療を行つた。鍼医の葛根湯も服用し兼ねる貧しい人々が、西洋の名医ヘボン先生の治療を受けたのであるから其の効果はすばらしく、忽ち門前市をなす有様となり、平癒した人々は泣いてヘボン氏の恩を謝した。しかし当時の役人には、無料で治療を施し而も乞食非人に至るまで何等差別することなく親切を尽すヘボン氏の真意は了解出来ず、徒らに日本人に好意を寄せて人々を惹き着けようとする怪しい人物としか受け取れなかつたらしい。

神奈川奉行は治療所の閉鎖を命じ浪士の危害から護ると云う口実の下に寺の門に両刀を帯びた四人の見張りをつけ「キリシタンの邪宗が日本人に伝染する」のを防ごうとした。

ヘボン氏は止むなく寺に閉じこもりブラウン氏と共に日本語の研究を進め、世にヘボン辞書と称ばれる「和英語林集成」の編纂に没頭した。しかし求むる者があれば貧富の別なく治療を施し患者の中には中老、大名、役人、浪士等もあつた。

この間幕府から遣わされた日本語教師が探偵であつたり、下僕として住み込んだ男が刺

客であつたり、まるで捕虜のような不自由な生活をしたが此の様な中でも両氏の海の如く広い心は之等の人々をよく感化し、刺客定治郎は罪を謝して暇を取り、日本語教師の一人矢野隆山氏は後元治元年に至り死の床でヘボン氏立合の下にバラ氏から洗礼を受けプロテストント信徒の初穂となつた。矢野氏は元幕府からブラウン氏の日本語教師として遣わされ、後にバラ氏の教師となつた人である。

しかし幕府や奉行の警戒は頗る嚴重で、一日ヘボン氏を訪問した奉行に十字架上の基督の聖画を発見された。ヘボン氏はこの時役人の質問に答えて十字架の意味を説き、彼等に基督を紹介する機会を得たのであつたが事面倒になるを恐れた米公使ハリスはヘボン、ブラウン両氏を、夫々米公使館附の医師及び牧師なりとして僅に事無きを得た。

一八六一年（文久元年）米本国に於ては南北戦争が勃発して容易ならぬ事態となり、日本では生麦事件を始め外人殺傷の不祥事が各所に頻発して物情騒然、両氏の前途は暗雲に閉されるの思いがあつた。

この様な苦難の重なつて居る時前記ジェームスバラ氏夫妻が文久元年十一月ブラウン氏を慕つて神奈川に來り成仏寺に同居してヘボン、ブラウン両氏に協力する事となつたが、この篤信熱誠、稀に見る傑出した青年伝道者の参加は、両氏に取つてまさにこの暗雲を破

つて差し込んだ光明の様な善きおとずれであつた。

三 横浜のヘボン治療所とヘボン塾

文久二年十二月末ヘボン氏は神奈川を去つて横浜居留地三十九番地谷戸橋畔の新居に移り開業したが患者は又もや氏の門に殺到した。名医平文先生の名は江戸其の他の地方へも響き渡り浪士、俠客の患者も多かつたが、日本武士の長所をよく理解し敬愛の念を以つて接するヘボン氏の玉の如き温容に接しては、流石頑固な攘夷論の浪士達も心から敬服して後には氏を称ぶに聖人君子を以つてする者もあるに至つた。

文久元年夏頃から米国に帰つて居た夫人が文久三年三月再び横浜に帰り、治療所の一部に男女共学の英学塾と安息日学校を開き、青少年の教育に着手した。明治三年に至り女生徒はミス・キダー（後述——一五頁参照）に託されて後のフェリス女学校の基をなしヘボン塾は男子のみとなつた。

明治十三年築地大学校として東京に移転するまで十七年の長きに亘りヘボン塾は宗教界、学界、政界、官界、実業界に多くの人材を送り出した。

この様にわが明治学院はその源を遠く文久三年の昔にまで遡り得るもので實際は九十数

年の歴史を持つて居るわけである。

ヘボン塾で教鞭を執つたのはクララ夫人の他にルミス、グリーン、ジョン・バラ（ジエームス・バラ氏の令弟）ノックスの諸氏、又此処に学んだ主な人々は左の諸氏である。

林董、高橋是清、沼間守一、服部綾雄、石本三十郎、松村介石（森本）、原猪作、山口準之助、篠原銀三、太田留助、角屋省吾、石原保太郎、長田時行、原地政敏、村田峯次郎、折田兼至、根本正、神崎直之、成毛金次郎、又成仏寺時代の教え子に大村益次郎があると云われる。

四 ブラウン塾と井深氏

文久三年、ブラウン、ジェームス・バラの両氏はヘボン氏に少し後れて横浜へ移つたが、成仏寺附近の漁夫や百姓達はヘボン氏に続いて今また此の親切な異人に別れる事となり、涙を流して名残りを惜んだと云う事である。

ブラウン氏は横浜山の手に新居をかまえ、集い寄る向学の青年達に英学を教授しながら新約聖書の和訳に勤しんで居たが、慶応三年氏の居宅は不幸にも火事に逢い幾多貴重な品を失つて了つた。

既に老境にあつた氏にとつて此の打撃は容易ならぬものがあり、為に暫く帰米して静養する事となつた。オアスコ・アウトレットの小羊達は懐しき牧者を欣び迎えて引き止めようとしたが、氏の日本伝道の志は止みがたく明治二年日本政府の招聘を受けると、大いなる感謝と喜びを以つて六十才の老齡にも拘らず再び日本に渡來したのであつた。天下の情勢は一変し日本は長い封建の夢から醒めて世界の文明思潮に棹すべき機運を迎えていた。

氏は新潟の英学校に校長として一年間勤め、翌三年には又も横浜へ歸り、神奈川県立修文館の英語教師となり、勤務の余暇を新約聖書の和訳に捧げた。

翌明治四年学院の第二代総理井深梶之助氏（当時十七才）は、学僕として同校に採用され十九才の時抜擢されて會計をつとめる事になつたが、ブラウン氏が井深氏の才能を認め井深氏がブラウン氏の基督教的人格に傾倒する様になつたのは此の頃の事である。

井深氏は会津の藩士で、家老の分家なる井深宅右衛門氏の長男として安政元年若松に生れた。明治元年の会津戦争には十五才に数カ月足らぬ故を以つて白虎隊に加わるを許されず、学問、武芸に優れて居た為小姓に取り立てられて藩主のお側に仕えていた。

敗戦の後一時捕虜となつたが間も無く許され、上京して芝山内なる藩の洋学所に学んでいたが自活の必要が生じた為、横浜に來り修文館の学僕となつたものである。

氏は最初主家の仇敵薩長に復讐せんがため勉学大成せんと志していたが、福沢諭吉氏の「世界国づくし」、や「西洋事情」中村敬宇氏の「擬泰西人建白書」等に啓発され、次第に之まで学んだ五倫の道以外に更に広く大きい真理と道徳のある事を覺るに至り、求道の志を抱いてジェームスバラ氏の許へ通うようになった。

或る日ウィルソンリーダーの一の巻を開いた所、イエスが小児を祝福している絵があつた。ブラウン氏の時間にその絵の意味を尋ねると、ブラウン氏はじつと井深氏の顔を見つめて居たが「その事が知りたいなら日曜の朝へボン氏の治療所へお出でなさい」と云つた。その後毎日曜へボン邸の一室で行われる聖書の講義をきく事になり、同時に「天道溯源」「真理易知」等の漢書によつて基督教真理の偉大さを知つた。

井深氏がヘボン氏の治療所でブラウン氏から洗礼を受けたのは明治六年一月の第一日曜であつた。この年ブラウン氏は期満ちて修文館を去つたが、氏を慕う学生等の熱望と井深氏の斡旋により同年秋から氏の自宅に私塾を開き、修文館の学生の一部が此処へ移つた。

又之を機としてジェームス・バラ氏は自分の教会で指導して居た青年達、即ち植村正久押川方義、熊野雄七、吉田信好等の諸氏をブラウン塾に託したので、ブラウン塾は英語教授の外に更に一步進んで神学塾の容相を備えるに至つた。

明治十年東京一致神学校が築地に設立せられるに及びブラウン塾生は其処に移された。

五 長崎に於けるヴァベック氏

安政六年、ブラウン氏と共に日本へ向う途中から別行動を取つたヴァベック氏は、同年十一月七日長崎に上陸し、出島に安住すべき資格があつたにも拘らず民家の間に居を定め上海に残した夫人を呼び寄せて意義深い新年を迎えた。

氏は英語教授と共に間接ながら伝導に腐心して居たが、之より先、主命により沿岸警備中、波間から拾い上げた聖書に興味を感じその研究に熱意を持っていた肥前鍋島藩の家老村田若狹が実弟及び家臣の一人と共に、慶応二年五月熱心に望んで氏から洗礼を受けた。

キリシタン禁制の高札は、前記矢野隆山氏洗礼式のあつた日に行われたヘボン氏の発言に端を発し、各国公使の長年に亘る運動により明治六年二月漸く撤去されて基督教は黙認の形となり、明治二十二年の憲法発布によつて公認せられたのであるが、高札撤去以前の受洗は死の覚悟を要する大事であつたので、ヴァベック氏はこの三氏と固く他言無用を誓い合つた。然しその後数年ならずして氏の学識才能が九州全土はもとより中央にまで知れ渡つたのは村田若狹の陰の力による所が多かつたものと察せられる。

長崎で氏の教えを受けた人々は後藤象次郎、大隈重信、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通等、後に維新政府の要路に立つた人が多かつたので、遂に明治二年に至り氏は太政官三条実美の正式の招聘を受け上京することになった。

上京後は毎日衆議院に列席し、最高諮問機関たるの地位を占め、平民の苗字使用、乗馬の許可、断髮廃刀令から廢藩置縣の大事業に至るまで逐一相談に興つた。又政府の洋学所を新政府の直轄する大学南校とし、後に帝国大学に進展すべき計画をも定めた。

明治四年、行政上の組織が大体終了した後は専ら大学南校の教頭として育英に當つた。

明治七年七月一日、氏は約束を果して辞表を提出したが、政府の懇請により止むなく元老院の顧問と華族学校の講師と云う名を残すのみとして野に下り、漸く念願の伝道に打ち込む事が出来る様になつた。時に氏は四十五才、日本政府から勲三等旭日章を贈られた。明治十年には基督公会と日本基督長老教会の合同に尽力し東京一致神学校設立の後には自らその講師となつた。

六 聖書の翻訳

新約聖書の翻訳 明治五年九月、横浜に於て始めて在日各派宣教師協議会が開催された

時、聖書翻譯の必要が唱えられ、その決議によつてブラウン博士が委員長に、ヘボン、グリーン、二博士が委員として挙げられ、松山高吉、奥野昌綱、高橋五郎の三氏が補佐として選ばれた。此の翻譯はギリシヤ語の原文を基礎とし、傍ら各国語の聖書を参照して成つたものでその苦勞一方ならず、委員等が鳩首協議して僅に一日一二行を進むのみの事も度々であつた。文體についても種々議論があり、日本人は威嚴ある漢文調を望んだが、聖書は万人の読み得るものでなければならぬとするブラウン氏の主張が容れられて、平易な文體が採用されたのは卓見であつた。しかし平易な中にも独特な風格を具えた床しい深みのある文體であつた事は人のよく知る所である。

之が完成したのは一八七九年（明治十二年）十一月三日で着手後五年と六ヶ月費した。

旧約聖書の翻譯 横浜委員会の手によつて進められた新約聖書の翻譯は明治十一年にはほぼ一通りの仕事が生じたので委員長たるブラウン氏は先に不成功に終つた第一次東京聖書翻譯委員会に代つて第二次旧約聖書翻譯委員会を組織した。数人の委員によつて四年の後、即ち明治十五年には略々翻譯が終了したので、中央に三人の委員を挙げる事になり、ヘボン、ファイソン、ヴァベックの三氏が選ばれ委員長ヘボン氏の家に一週四五回会合して組織的に之が編纂に當つた。この間実に七年の長い年月を費し、その為に捧げられた努

力は並々ならぬものであつた。ヴァベック氏は主に詩篇を担当したがその清新流麗な文章は植村正久氏の補佐により完璧のものとなつた。我々が永年親しんだあの格調高き詩篇独特の文体は、全くヴァベック氏の翻譯文に基いて居るのである。

兩巻が完成して記念すべき明治二十一年五月二十一日、築地の新栄教会で盛大厳肅な捧献式が催された時七十歳を越えたヘボン氏は感謝と喜びに面を輝かせて教壇に立ち、横浜委員会の手に成つた新約聖書を左手に、東京委員会の手に成つた旧約聖書を右手にして、暗示深く兩巻を全会衆の前で重ね合せ乍ら清らかな声で次の如く語つた。

「基督教の兄弟よ、今や私の勤むべき唯一の事が残つて居る。それは常任委員の訳せる旧約全書と、横浜委員の訳せる新約全書をば、茲に日本に於けるプロテスタントの宣教師全体の名に於て——或は私は云わん、米国と英国にある基督の全教会の名に於て——一卷のバイブルとなすべく兩書を一つに合わせる事である。而してそれを日本国民への親愛を表わすの贈物となす事である。西洋の基督教国民はこの国民に与うるに如何に貴重なる物品よりも、金銀珠玉の山嶽よりも、この聖書を措て他に如何なる物を贈る事が出来るか。願わくば聖書をして、かの予言者エゼキエルが見し、神の御位より流れ出ずる河水が、到る所に生命と癒しとをもたらしし如くあらん事を、而して私共は神にして父なる御方が、人の子

に賜りしその驚くべき賜ものに向つて又其の賜ものをこの国民に賜わりし事に向つて満腔の熱誠をささげて感謝すべきではあるまいか」

常に寡黙なヘボン氏のこの言葉程、並居る人々に深い感銘を与えたものは絶えて無かつたと言う事である。

新約についてはブラウン氏に大半の、又旧約についてはヴァベック氏に一半の功を帰せねばならぬが、この日本文化に至上の貢献をなした聖書翻譯の事業に、前後十六年の長年月を終始一貫精励克苦したのはヘボン氏一人で、神はこの大事業の為に特にこのヘボン博士を他の二、三の共労者と共に日本へ送られたと云つても過言ではあるまい。この三博士を創始者として持つ事は聖書を基礎として立つ我が学院の大きな誇である。

七 神学博士ブラウン氏ノ略歴

ブラウン氏はニュースイングランドの田舎イーストウインザーに、貧しい機械工の長男として一八一〇年（文化七年）六月十六日に生れ、母によつて、誕生の床の上から神に捧げられたものとしてサムエルと名づけられた。母は讚美歌二九七番

わすらわしき世をしばしのがれ

たそがれしずかにひとり祈らん

の作者として知られる敬虔篤信の婦人である。

一八三四年エール大学を、又一八三八年ユニオン神学校を卒業、後十年を中国の伝道に捧げ、帰米後オワスコ・アウトレットの牧師となり、大いに成果をあげ外国伝道志望の三婦人をその教会から出した。その中の一人は不幸中国で客死したが他の一人はヴァベック氏夫人となつたマリヤ・マンヨン今一人は後にミラー夫人となつたミス・ギターで、明治三年ブラウン氏再渡米の折同行し、ヘボン塾の女生徒を託されフェリス女学校を創立した。

「自分は極めて幼少の頃から外国宣教師になろうと固い決心をしていたが、それは母の乳房から吸い込んだものらしい」と自ら語つて居るがブラウン氏はその生涯の殆んど全部を外国伝道に捧げ尽した。

十年に亘る中国の伝道は結実を見るに到らなかつたが、それにも拘らず氏は志を挫げず遂に日本に於てその所を得た。而して二十数年の長きに亘る奉仕の生活を終え、明治十三年夏老夫人と共に感謝の中に日本を去つた。

明治十四年四月十九日、新約聖書刊行の記念祝賀会が築地新栄教会で開かれ、ヴァベック氏司会の下にヘボン奥野両氏の講演があつたが、此の知らせに接してブラウン氏は嬉し

涙にくれたと云う事である。

その年の夏氏は病を養つて居たオルバニーを去り、母校の一つであるエール大学の同期生の会合に出席するためニューヘブロン町に赴き、夫人と共に馬車を雇つて友人知己を訪問したがその殆んどが既に世を去つていた。氏はその足で両親の墓所に詣で、その夜は常の如く寝に就いたが夜半夫人が氏の呼吸の異状に氣附いて目を醒した時、氏は既に永遠の眠りに就いて居られた。齡七十であつた。

葬儀は極めて簡素厳肅に行われたが博士の死はその地方の小新聞に簡単に報ぜられたのみで都会の新聞は何等注意を払わなかつた。しかし博士が二十数年に亘つて我国文化のために尽した功績は決して小さいものではない。

ヘボン、ヴァベック両氏と共に偉大なる新日本開拓者の一人であり我が学院にとつては最も功勞ある創始者の一人である。

八 医学博士、法学博士ヘボン博士の略歴

ペンシルバニア州のミルトンと云う小都會に法律家を父とし、外国伝道に深い關心を持つ篤信の婦人を母として、ジェームスカーティスヘボン氏は一八一五年（文化十二年）三

月十三日孤々の声をあげた。

プリストン大学に法律の勉強中回心して伝道に志したが、物理化学に興味があつたのの一つには訥弁であつた所から在学一年にしてペンシルバニアの医科大学に移り、二十一才の時卒業しドクトル・オブ・メディシンの称号を受けた。

間もなく名門出の教育家と結婚したがこの婦人こそ其の後六十数年、印度、中国、日本に於て凡ゆる苦難と戦ひ氏を援けてその偉業を成就せしめた、敬虔剛毅のクララ夫人であつたのである。

医大を卒業後六年間は医者としてアメリカに暮しその後の五年間は中国に伝道したが、種々の不幸に逢い成果を見るに至らずして帰米し、ニューヨークで医院を開いた。

偶々同市に猛烈なアジャコレラが流行したため、南清で腕を鍛えた氏は忽ち名医と謳われるに至り、短日月の中にニューヨーク有数の名士となり、病院を経営する他三ヶ所の邸宅と別荘を構え十三年間を大成功者としてはなやかに過した。

しかし此の様な豪華な生活の中にも、ヘボン氏の念頭には絶えず外国伝道の希望が往来して彼を此の世の幸福に安住せしめなかつた。遂に氏の起つ時機が到来し、一八五九年四月二十九日彼が四十四才の時氏夫妻はニューヨーク埠頭からサンチヨ・バンサ号で日本に

向つた。その動機は三人の愛児を次々に襲うと云う人生の一大不幸であつたが、夫妻は涙の中にも、神の人を用い給う摂理に感謝してすべての財産を処分し、プレスビテリアン・ミッシヨンから「日本第一宣教師」の辞令を受け、自費を以つて日本宣教に向つたのである。

氏が神奈川に上陸した安政六年から明治二十五年帰米に至るまでの三十三年間になしとげた数々の事績は、新日本の方向を決定する指針の一つとなつたものであつた。

茲で氏の功績を振り返つて見ると、先ず第一に西洋医術の実施と伝達がある。次に英語を学ぶ日本人、日本語を学ぶ外国人に、最大の手引となつた「和英語林集成」の出版がある。之は安政六年から五年の歳月を費して元治元年完成、日本に未だ印刷の設備がなかつた為、岸田氏を伴つてはるばる上海まで出かけ、日本の仮名文字を特に作らせるなど苦心して慶応三年出版した。この辞書に附随して氏はヘボン式ローマ字を考案したが今尙社会を益して居るものである。

次に特筆すべきは聖書翻譯の事業である。（一一頁参照）

其の他成仏寺時代からヘボン塾、明治学院を通じて尽した教育事業、又古くはヘボン治療所を、後には横浜指路教会を中心に行われた伝道事業等、数え来れば氏の日本に残した

功績は限りがない。しかし如何なる功績にもまして特筆せらるべきは、深い信仰に根ざす氏の比類なき隣人愛である。氏の凡ての事業はこの心情の発露であつたと見るべきである。又その感化力も、当時の何れ劣らぬ優秀な宣教師の中にあつて群を抜いて居たように思われる。

八ツ山下の非人小屋をひそかに訪れて病人を介抱した話、治療室のアルコールを飲んで病氣になつた酒好きの雇人をいたわつた話など語り伝えたい佳話、逸話は尽きない。

文武両道に優れ百般の趣味に通じ乍ら、酒のために身を修めかねてヘボン氏の日本語教師にやとわれ、始めの中はヘボン邸で大酒を飲んで居たと云われる奥野昌綱氏が、後には基督教界の大先輩と仰がれるに至つた話等も面白い一例である。

氏は宣教医師であつて教職者ではなかつたので自ら洗礼を授ける事は無かつたが、ブラウン氏、ジエームス・バラ氏、ルーミス氏等から受洗した人の多くは、ヘボン氏のくんとうによつて求道した人々であつた。恐らく初期の基督教徒で、多かれ少なかれ氏の影響を受けたい者はなかつたと云つても過言ではあるまい。

明治二十五年十月十五日、指路教会に於ける送別会に氏は愛情あふれる告別の辞を残したがその中に次のような言葉がある。

「今は昔、六十年前、己の心をキリストに捧げました時、外国に行つて働くはよいと思ひました。私は元來医者です。医学を卒業しました後六年間はアメリカにて善い所を尋ねて此処彼処に住みました。併し乍ら苟かに安心せぬ所がありました。何故安心致しませんでしたか。素よりアメリカを好んで居りましたけれども、医者が多くありまして余計過ぎて居りました。私がアメリカに留まれば唯多くの医者達と競うて他人の害となると思ひました。それ故に私は神を知らぬ国、医者のない国へ往くがよいと心の中に思うて親の国を去つて支那へ行きました」

「私は支那に居る時も度々日本の事を思ひました。また予て日本の評判を聞きましたがキリスト教を嫌ひイエスの信者を殺すとの事でございました。けれども私は此の日本から医者或はイエス、キリストを愛する所の信者の出来る事を願ひましたから此の国へ来る約束を致しました」

聖書に書いてある通り『われは旅人我親達の如く宿れる者なり』私はただ旅人、斯れ人の生涯、あなた方も皆旅人でございます。この世に永く住む事は出来ませぬ。神に依る旅人——神は我父が、父による旅人——誠に面白い言葉でございます。その旅路に在る間は短かく或は永く、私の旅路はちつと永くなりました。七十八年の間旅をして我が父の国へ

赴くのでございます。あなた方も私共と共に我が父の家に集つて誠に相互に喜びましょう。私は数日にしてお別れ致します。私は此の三十三年間此の国に在つて、日本の人を助けるに力を尽しました事を神に感謝します。嗚呼今私は本国へ帰ります。私の仕事は終了しました。本国にて少しの間休みまして、後天にある親達の国へ参ります。」

氏は富裕の身を以つて日本に渡り携えて来た巨額の財を伝道、教育、社会事業等のために惜しみなく投じ、今は貧しい一老人となつて、しかし心は主にありて最も富める者となつて永遠に日本の地を去つた。ニューヨーク市外の今は亡き三児の墓所に近いイーストオレンジに隠棲した後も、常に日本を忘れず迷える羊のために祈つて居られた。

明治三十三年フィラデルフィヤで開催された万国宣教師大会に、一日博士が出席すると幾百の代表が一斉に起立して敬意を表し、其のさま恰も凱旋將軍を迎うるが如くであつたと云われる。氏の感慨は如何ばかりであつたろうか。又明治三十八年三月十五日、それは氏が九十歳の誕生日を迎えた直後であつたが、明治天皇は氏の功を賞して三等旭日章を贈られた。その後問もなく夫人は世を去り、氏の身辺はいよいよ寂寥の度を加えたが、此の間に井深氏が博士を訪問して日本の思い出話を交し、懇ろな日本の友人への伝言を託されて居る。

一九一一年（明治四十四年）九月二十一日午前五時、我等の恩師、吾日本の恩師ヘボン博士は、九十六歳の天寿を全うしてその光榮ある生涯を安らかに閉じた。

同日、しかも日本時間の同時刻、氏の形見であるヘボン館が原因不明の出火によつてその雄大な姿を此の世から消して了つた。余燼未ださめやらぬうちに氏の訃報がもたらされ人々はその奇しき暗合に胸を打たれた。葬儀は二十三日イーストオレンヂのブリック長老教会で盛大に執り行われ、日本大使館から贈られた美しい花輪が氏の偉勲を語るが如く靈柩の上に飾られた。

氏逝いて幾十年、氏が日本に残した数々の由緒ある建物は、或は出火に或は震災に依つて灰燼に歸し国も人も氏の名を忘れ去つたかの如く思われたがやがて氏の功績の顕彰される時がめぐつて来た。昭和二十四年十月、日本基督教団及びM・C・Cの主催で日本プロテスタント渡来九十年式典が東京で華々しく開催され、横浜ではヘボン博士顕彰会的主催で山下町三十九番地へボン邸跡に記念碑を建てる計画が企てられていたが愈々十月十八日博士上陸の記念の日を卜し、横浜市・明治学院・指路教会の三団体が主となり日本基督教団、聖書協会、市内基督教学校各団体が参加して盛大な除幕式が舉行された。現在同記念碑は横浜市の史蹟として市の管理下に常に清浄に保たれてる。

学院講堂の南側外壁に掲げられた博士のレリーフは記念碑の其れと同じ物である。

日本の鎖国の戸を開いたのは提督ペルリであるが日本人のグリフエス心の戸を開いたのは医学博士ヘボンである。
(グリフィス)

九 神学博士ヴァベック氏の略歴

ヴァベック一家はオランダのザイスト町のコッペル丘で世にも美しい邸にモラビヤン宗の信徒として高潔な生活をして居た。資産家で子供の教育に熱心な善い父に守られ、イタリヤ系で元は女流教育家の母から美しい感情と音楽の才能を享け一八三〇年(天保元年)一月二十三日に孤々の声を挙げて以来、恵まれた環境の中で少年時代を過した。彼はユトレヒトの工業学校で機械工業の一端を修得したが、この時一家は非境に陥つていたため氏は北米に移住して土木技師となつた。

しかし間もなく病に倒れ、病床に呻吟し乍らもし健康が今一度恢復されるならば一切を捧げて神と人とに仕えようと決心した。幸にして病が愈えると氏はニューヨークのオーバノン神学校に入学し卒業後は選ばれて同校に集まるドイツ系の人々に独逸語の説教をする任

に當つたがその聴衆の中にマリヤ、マンヨンがまじつて居た。

一八五九年氏はオーバン神学校の校長から推薦されブラウン氏シモンズ氏と共に日本宣教のため渡来した。長崎及び東京に於ける氏の活躍は前述の通り目覚ましいものであるが、聖書と訳完了の後は既に白金に設立されて居たわが学院の神学教授及び理事として経営に参与し、且つ昵懇のジェームスバラ氏と共に宣教に従事した。

一九〇七年（明治四十年）三月十日、赤坂区葵町の自宅で六十八歳を一期に急逝されたがその一と月前の二月六日には横浜に出かけてバラ氏と伝道旅行の打合せをしたと云う事である。

葬儀は三日の後日本基督教会でいとも莊嚴に行われ諸方よりの花輪を以つて飾られた柩は近衛の儀仗兵に護られて青山の墓地へ送られた。同日の各新聞は長文の哀悼の辞を掲載したが「国民の友」巻頭には次の文が掲げられた。

「フルベッキ博士の永眠に依り、我日本は尊き一人の庇護者、教師、友人を失えり、彼はオランダに生れ、アメリカに学び、日本に教う、我が今日の文化は彼に依る所多し、現代知名の政治家、学者中、彼の指導に依りて学びし者幾何なるを知らず、氏は吾国在住四十年審さに我国文化の発芽と盛花と果実とを目撃せり。以つて彼の慰めなりしなるべし。

されど我等は、彼が最後の呼吸に至るまで我日本の幸福と安寧とを祈り続けしを忘るべからず。」と。其後暫くにして大隅公等が旧師を思うの切なるより、資を集めて代理石の墓碑を青山に建て、今に氏の功績をつたえている。

十 理学博士ワイコフ氏の略歴

氏は一八五〇年（嘉永三年）北米ニュージャージー州ミドルプシ町の農家に生れ、少年の頃から信仰篤く牧師たらんと志していたが二十二歳でラトガルス・カレッジを卒業すると其の翌日にはもう日本に向けて出発して居た。

何故かと云うと同校の先輩グリフィス氏（「皇国」Mikado's Empireの著者）の後任として越前福井藩の学校に赴任すべく同校教授会の推薦を受けて居たからであつた。特に校長は彼を信頼して「私は彼の人物を知つて居る、決して心配は無い」と云つて彼の余りに若年なのを氣遣う人々の異議を抑えたのであつた。

明治五年七月横浜に着き福井に二年、更に明治政府の懇請により新潟で一年東京で一年教鞭をとり一旦帰国、母校で物理学の講師を一年つとめた後、同校の要請でサン・マルピルに大学予備校を興し校長として三年間勤めた。

明治十四年リフォームドミッションが横浜に英語学校を設立せんと計畫を立て、氏はその招聘に応じて再び米朝し先志学校を創立したのである。氏の望みはひたすら主の聖旨に従順に神国建設の為に異教の国で育英事業に当らうと云う事であつた。二十七歳にして母校の要請で大学予備校の校長になつたと云う一事だけを見ても氏の人物、頭腦、手腕の程が推し計られるが、子弟に対する愛情の深さは其等にも優る氏の尊い宝であつた。

明治十年東京一致神学校の経営に於て協力の実を挙げたミッションは、普通教育に於ても同じ方針を取る事になり、明治十六年ダッチリフォームド・ミッションの経営する横浜先志学校はプレスビテリアン、ミッション経営の築地大学校に合流して、東京一致英和学校と改称することに決定した。校長ワイコフ氏は、その年の夏一家を挙げて築地へ移つて来た。この時氏は三十二歳、六尺豊かの堂々たる体軀、美しく輝く柔和な瞳、広い額に房々と波打つ暗黄色の毛髪、健康其の物のような清らかな血色、よく響く男性的な太い声、誠に白人の中でも稀に見る秀麗な風貌の持主であつた。しかし氏の裡なる魂の尊さはこの外貌の美しさも遙かに及ばぬものであつた。

明治十九年明治学院が創立されると氏は白金に移り物理学の教授として又理事をもち、後には英文学、英語学を教えて二十四年一日の如く精勵きたれ。

一九一一年（明治四十四年）一月二十七日午前七時氏は心臓に故障をおぼえ早朝にはタイプライターを打つて居られたと云うのにわずか二時間後の九時五分、その清純な魂は生けるが如き骸を残して天界にとび去つた。一月三十一日学院講堂で氏の葬儀がしめやかにいとなまれ、満堂氏を慕う教師、学生の嗚咽の声にみたまされた。

式了えて後氏の遺骸は大勢の僚友や学生に護られて瑞聖寺のミッション共同墓地に運ばれたがこの時肉身の老父に別れたような悲しみを味わない者は一人もなかつた。

一週二十五時限も受けもち、老の至るも知らざる如く諄々として教えて倦まずしかも突如としての我等の前からその美しい姿を消して了つた先生、教室で生徒のさわぐ折、鉛等を以つて書物の表紙をコツコツと叩き乍ら鎮まるのを待つて居られた温良な姿、時々美髯を指先で下から強く押しあげる先生の癖、そんなことまでが今更のように新しく懐かしまれるのであつた。

遺骸は限りなく別れを惜しむ共労者や門下の深い悲しみのうちに、瑞聖寺内ミッション共同墓地に葬られた。享年六十一歳

第二章 搖籃期

一 築地と白金

城南芝白金の丘の一角、緑の樹々に囲まれた清々しいチャペルの尖塔を中心に、我が明治学院の校舎が巍々として立ち並んでいる。

本邦に於ける英学の先驅であり、基督教主義教育の学府である我が学院と、下町情緒床しい築地明石町とは感じのそぐわぬ為か距離の遠い為か、両者の関係は年と共に忘れ去られ行く憾みがあるが、この築地明石町こそ我が学院搖籃の地であつて、八十年の長い歴史は先づこの両者の関係から語られねばならぬ。

明治の初年学院の前身三校の内「東京一致神学校」は築地明石町十七番地に、「築地大学校」即ち後の「東京一致英和学校」は同七番地に設立された。他の一校、「神田英和予備

校」は学院の創立には独立の学校として取扱われているが、実際は「一致英和学校」の予科で、両者は一つのものであるから、結局学院の故里は築地であると云つて差支えないものと思われる。これら三校の合併が企てられ、明治学院創立案が制定されたのは明治十九年四月であつたが、全部の白金移転が完了したのは明治二十三年九月のことである。而して学院の歴史は、東京一致神学校が築地に設立された明治十年十一月を以つて基点とすることになつている。

吾々は以下の一事実を永遠に記録して築地明石町の名を新らたに思い起し度い。即ちこの東京一致神学校及び築地大学校と言う小やかな校舎をめぐつて、その信仰から言つても学識から言つても、決して人後に落ちない少壮有為の立派な学徒、否信仰の闘士が、基督教の伝道と教育の使命を帯びて此処に住んでいたと言う事実である。

後日の為明治十三年当時のそれら諸教授の住所と年齢を記して置こう。

ジェームス・エル・アメルマン氏（三十六歳）築地居留地十九番地

ウィリアム・インブリー氏（三十四歳）十六番地

ジョン・シー・バラ氏（三十八歳）六番地

ジェームス・エム・マコーレー氏（三十一歳）六番地

エム・エヌ・ワイコフ氏（二十九歳）十八番地（明治十六年九月以後）

ハワルド・ハリス氏（三十歳）十八番地

ジョージ・ウイリアム・ノックス氏（二十六歳）二十七番地

ジー・エフ・ヴァベック氏（四十九歳）京橋区入舟町七丁目一番地

ヒュー・ワデル氏（三十九歳）麻布区市兵衛町二丁目二十五番地

そのころ我が学院の第二代総理井深梶之助氏は二十七歳で、同校に於いて外人教授の補佐として通訳に當つていた。又服部綾雄氏は十六歳、石本三十郎氏は十七歳で、共に築地高等学校の最上級に学びながら学校の事務にも當つていた。これら学院の恩師太先輩達は、今は皆此世の務を忠実に果して、或は東京に、或は京城に、或は北米に永遠の安き眠に就いている。

「欧米の諸大学と比肩して盛大を競うに至るの日」を夢みた雄心鬱勃たる創業時代、秋風落莫、孤城落月の憂難期、外患あり内憂あり、辿つて来た路は嶮しかつたが、行手を示す雲の柱を学院は決して見失はなかつた。幾多の厳しい試煉を経て今や創業当始からの宿願なる大学設立の夢は実現し、校庭の北辺に隣接した新しい敷地、即ち明治大正の昔から其の買収が縣案となつていた海軍墓地に今建設の槌音高く大学の近代的校舎が次々と完成さ

れつつある。其の目覚しい姿を目の当り見る時、これら恩師先輩達のありし昔の労苦と祈が思い起されて、転た今昔の感に堪えぬものがある。

二 東京一致神学校

築地明石町十七番、フランス瓦で屋根を葺いた赤煉瓦造の小ぢんまりとした建物、この校舎は米国ダッチ・リフォームド・ミッション、同プレスビテリアン・ミッション、スコットランドの一致プレスビテリアン・ミッションの三布教団体の協力に依つて明治十年に設立された東京一致神学校である。

これより先、日本国内には外国ミッションの拘束を受けず、自由な立場から日本の基督教会を設立せんとする運動があり、ジェームス・バラ、ブラウン、トムソンの諸氏がこれを支持し、一方に米国ゼネラル・アッセンブリーに直属する教会を日本に設立せんとするカラゾルス氏一派が対立していた。前者は日本基督公会を、後者は日本基督長老教会を設立していたがこの両派がタムソン、ヘボン、ヴァベック、インブリー諸氏の斡施で明治十年日本基督一致教会（後の日本基督教会）と言う名称の下に合同することとなり、その結果、是等のミッションが一致して東京一致神学校を設立し、それまで宣教師達が個々に教

育てていた神学生を糾合して組織的に教職者の養成を計ることとなつたものである。ここに合同したものはブラウン塾に属するもの、カラゾルス氏の英学塾に属するもの、タムゾン家塾のもの、スコットランド・ミッションに属するもの、長崎に於けるリフオームド・ミッションに属するものの五団体、総数二十四名であつた。教授は後援のミッションからそれぞれ一名、他に二名の講師が選定された。

三 東京一致英和学校

明治十三年、横浜へボン塾は将来の発展を期して築地明石町六番地に校舎を新築移転した。

二階建間口十間の一寸人目を惹く美しい建物で、中央玄関の鴨居の上に「築地大学校」と言う横書きの看板が掲げられた。へボン塾から引續いてジョン・バラ氏（ジェームス・バラ氏の令弟）が校長として経営に当りバラ学校とも言われた。当時我国青少年の海外文化に対する渴望憧憬は非常なもので築地大学校はこれら青少年の集る所となり、へボン塾から移つた服部綾雄、石本三十郎の二氏を加えて開校早々四十七名の多きに達した。明治十五年六月、服部、石本両氏は第一回生として同校を卒業し、十七歳の服部氏は森本（松

村)介石氏の後を受けて幹事となつた。石本氏は訳読を受持つたが、若冠十八歳にして既に日本英語界の重鎮として、自他共に許していた。明治十六年に至り、前記三ミッシェンの協力に起因し、エム・エヌ・ワイコフ氏の経営する横浜先志学校と合体し、「東京一致英和学校」と改称、校長を廃してバラ、ワイコフ両氏が同格の平教授となり、学校の管理は凡て合議制とした。一致神学校にも校長はなく、明治学院創立の当初に於いても、総理も院長もなかつたことは、学院の発達史に面白い特色である。

神田予備校 明治十七年一致英和学校の在校生は、本科百三十名を越し、予科五、六十名を数えた。間口十間の校舎ではもはや限度に達したので、予科生を他に移す必要を感じ同年の春神田淡路町二丁目四番地に「英和予備校」を興すに至つた。これは服部綾雄氏の企画と言われ二十二歳の同氏が此処に校長として、又教授として才腕を振つた。校舎は粗末でも教授は一致英和学校の白人達、邦人も服部氏の外に石本三十郎氏、杉森此馬氏等一騎当千の少壮英学者であつたから、都下書生の注目を惹きなかなかの盛況であつた。しかし間もなく明治学院が創設され二十年九月には、白金に移された。予備校の修業年限は二ケ年、一致英和学校は四ケ年で外人は凡て英語で授業を行つて居た。この学校で学んだ人々に桐島像一、多田素、水蘆幾次郎、宮地謙吉等、学院に関係の深い諸氏がある。

各 学 部 長(校長)表

高等学部長	高等商業部長 (後に専門学校長)	中学部長 普通学部長 新制中学校長 新制高等学校長
大正元年十一月熊野中学部長が兼任 二年三月ライク氏就任 六年二月ライシヤワー氏就任		大正元年十一月熊野氏就任
大正八年十一月水芦氏就任 十年四月都留氏就任 十四年三月田川学院長兼任 昭和二年四月笹尾氏就任		大正八年四月ホフサンマー氏部長心得に就任 八年九月村田氏就任 九年五月水芦氏部長心得となり 十年三月部長に就任 十五年六月田川氏学院長が兼任 昭和二年三月衛藤幹太郎氏就任
昭和九年十月笹尾氏辞任	昭和三年高等学部商業科は独立して高等商業部となり主任の石橋近三氏が部長となる	昭和五年四月都留氏就任
昭和十五年九月中山氏再任 昭和十九年四月専門学校に統合 十九年四月中山氏永眠	昭和十四年九月石橋氏就任 矢野学院長兼任 昭和十九年四月他校を統合して専門学校と改称矢野氏が兼任	昭和十四年九月都留氏辞任其の後教務委員会代行す 十六年七月添山氏就任 二十年六月高橋氏就任
昭和二十四年大学設立認可文経学部第一及び第二を設置す 会長村田四郎氏。二十七年文学部と経済学部に分離し文学部長に村田氏経済学部長事務取扱に服部文四郎氏就任、二十九年文学部長に高橋源次氏、経済学部長に服部氏就任、三十一年文学部長に若林竜夫氏、経済学部長に斎藤茂雄氏就任		昭和二十三年新制中学学発足 二十五年大川氏中学校長に就任 高等学校長は村田学院長が兼任 昭和二十七年四月中高が分離し日下氏が高等学校長に就任

歴 代 理 事 長 総 理(学院長)

理 事 長 (理事員会議長)		総 理 (学院長)	神 学 部 長
明治 19年ノックス氏 20年井深氏 21年ヴァベック氏 22年アメルマン氏	明治19年 〃 30年	明治23年 ヘボン氏就任 〃 24年 井深氏就任	
アメルマン氏	明治31年 〃 40年	井深氏	
オルトマンズ氏	明治41年 大正6年	井深氏	従来の幹事制を廃し 三学部部長をおく 事になり 大正元年 十一月井深氏就任
田川大吉郎氏	大正7年 昭和2年	大正十年三月井深氏 辞任 オルトマンズ 氏事務取扱に就任 大正十四年二月田川 氏就任	大正十三年三月井深 氏辞任 都留高等学 部部長事務取扱を兼任 昭和二年三月都留 氏辞任同 五月村田 氏常務委員長となる
多田素氏	昭和8年 昭和12年	昭和十年十二月田川 氏辞任 ホキエ氏事 務取扱いに就任	昭和五年日本神学校 設立に伴い神学部は 明治学院から分離し た。
昭和十六年五月富 田満氏就任	昭和13年 〃 22年	昭和十四年九月矢野 氏就任 二十二年矢 野氏辞任	
富田満氏	昭和23年 〃 32年	昭和二十三年四月村 田氏就任 三十二年 村田氏辞任 三十二 年都留氏就任	昭和三十年文学研 究科英文学専攻 (修士課程)を設置 す主任高橋源次氏

第三章 明治学院創立

一 三校合併問題

東京一致神学校、東京一致英和学校、神田英和予備校の三校は夫々順調な歩みを続けてはいたが、何れも敷地、校舎共に狹隘で之以上發展する余地が無かつた。三校を合併して東京市内、或は其の近郊に基督教カレッジとして将来日本に雄飛するに足る学府を設置しようとの議が、関係者の間に起つたのは自然の成行きであつた。そこで明治十九年に至り三ミッションから七人の代員を選び、之に同数の日本人を加えて其の經營の局に當るべき一つの理事員会を組織し、従来漫然と協力していた三校を一つの規約の下に置いて經營して行こうという事になつた。

外人理事員は、日本基督一致教会に關係ある外国ミッションの總會で選舉された者、又日本人理事員は、凡て一致教会に屬する基督教信徒で、邦人と外人は人数も権限も同じで

あつた。明治十九年四月二十九日、一致神学校に於て記念すべき第一回理事員会が開かれ、新設学府の一切の基礎となるべき明治学院創立案が制定された。(五頁に至る長いものでここに掲載する事は難しいが、骨子は 頁の明治学院憲法と大同小異である。)

この創立案によつて三校の合併が宣言されると、一致神学校は新学府の邦語神学部、(三カ年)一致英和学校は普通学部本科(四カ年)、神田英和予備校は普通学部(二カ年)予科と改称され、六月二十一日の理事員会で「明治学院」と云う名が決定された。

敷地と定められた荏原郡白金村玉縄台は当時の芝区の西方に隣接し、人煙稀な寂寥の地で、沼あり密林ありで人家は殆んど無く、只瑞聖寺の高い屋根が今日のままであつて樹間に梵鐘を響かせ夜は狐狸の鳴声が四辺の静寂を破るのみであつた。

約一万坪の購入金一万円近い金は、プレスビテリアン・ミッションが築地居留地六番地(ジョンバラ氏の居た所)と七番地(一致英和学校)の地上権を売却して得たものであつたが、当時は財団法人の制度がなく、外人の土地所有権もみとめられていなかったもので、その年の九月にノックス氏の後を受けて理事員会議長となつて居た井深氏が、一私有財産の形式で所有することになつた。

「私立学院設置願」は服部、井深、石本、ヴァベック、インブリ、ワイコフの諸氏が鳩

首協議して制作し、この願書に詳細を極めた学課配当表、教科書表、機械器具目録表、予算表が添附され、翌明治二十年一月十日、時の東京府知事高崎五六氏に提出された。

設置の目的の所に「普通学部を本科予科に分ち英語を以て博く普通の学課を授け」とあるが、之は当時の文部省の「外国語にて教授する中学規則」に準じたもので、中学校と高等学校を合せたものに相当する、程度の高いものである。

同月二十二日附で、「書面学校設置ノ儀認可候事、開校ノ期日ハ前以テ届出ズベシ」という書面が達し、茲に白金台は明治学院の永遠の基礎の置かるべき所と定つたのである。

二 建築と移転

学院設置の許可が下りて最初に建てられたのは、サンダム館とヘボン館であつた。サンダム館は、米国富豪サンダム氏の未亡人が、亡夫の記念のため全額を提供したもので、工費七千円、総坪数二百四十七坪、堅牢な三階建て普通学部の校舎に充てられた。ヘボン館は、海軍墓地の側に建てられ、当時東京随一と言われた木造大建築で、その建築費一万円は、ヘボン氏が和英語林集成の版權を丸善商社に移譲して得た金を寄附したものであつた。総坪数四百四十七坪、地階と屋上の櫓を入れて五層楼と云われた立派なもので、普通

学部への寄宿舎に充てられ、櫓からは西に富士、東に東京灣の眺望をほしきままにすることが出来た。

この二館が完成した明治二十年の九月、一致英和学校（普通学部本科）と英和予備校（普通学部予科）が白金に移つた。普通部の筆頭教授はヘボン氏で、バラ、ワイコフ、マコウレイ、ハリス、マクネヤ、石本、服部の諸氏が正教授となつた。明治二十一年四月フィラデルフィア州のハリスと言う、プレスビテリアン系の信徒から、金三千弗の寄附申込みがあり、学院ではこれを以て築地七番地の元築地大学校々舎を白金に改築移転してハリス館と称し、築地に残留していた神学部学生を二十二年にここへ移し、三校全部の移転を終了した。学生及び生徒の数は、普通学部本科七十六名、予科百七十八名、神学部学生三十名（邦語科二十七名、英語科三名）合計二百八十四名であつた。神学部教授はアメルマン、ノックス、ワデル、インブリー、井深の諸氏、講師はミラー、大儀見、ヴァベック、植村石本の諸氏であつた。

三 順調期（明治二十年—二十六年）

明治二十三年理事会はハリス館移転費の残額に両ミッションの寄附金其の他を合して、

神学部校舎の建築に取りかかった。六月二十四日献堂式を挙行、神学部は此処に移され、ハリス館は神学部の寄宿舎となつた。この校舎の半ばは立派な図書館になつて居り、普通学部の生徒も自由に出入して閲覧の便が得られた。この図書館にはマクラレン氏寄贈の多数の神学書や、築地時代に買入れた貴重な古典が数多く納められていた。大正三年サンダム館焼失の折と、十二年の大震災にかなりの損傷を受け、当初の姿を余程失つたが、学院初期の倂を忍ぶ唯一の建物として、大切に修理保存されて居る。(現在の同窓会本部)

明治二十一年十二月、ミラー氏は築地明石町の私宅を土地と共に講堂建設の費用として、寄附者の名を附けない事を条件にして学院に寄贈した。

次にこの期間に於ける人事を概観しよう。初代理事長ノックス氏は明治二十年帰国し、井深氏がその後を受けた。翌二十一年にはヴァベック氏が議長に選挙され、二十三年アメリカマン氏がこれに代り、以後氏は長くその位地にあつた。

又築地大学校以来幹事として縦横の活躍を続けた服部氏は、二十三年三月アメリカに留学し、杉森此馬氏が後任となつた。

明治二十二年十月、理事会は対外的代表者の必要を感じ、徳望高きヘボン氏を総理に推した。ヘボン氏老体のため井深副総理が実務に当つたが、翌二十三年には井深氏がユニオ

ン神学校に留学し、留守中は杉森氏が代つて一切の事務を取扱つた。二十四年九月井深氏が帰朝すると、ヘボン氏はこれを待ちかねたように辞表を提出し、井深氏が総理に就任した。

四 明治学院憲法及び職制の制定

明治二十四年十二月十七日、井深総理の就任後一カ月、学院では一切の条規の基準となるべき憲法と職制が理事員会で制定發表された。憲法の方は明治十九年三校合併の機会に起草された明治学院創立案と大同小異である。職制の方は大正元年幹事制が廃されるまでのかなり長い間踏襲されていた。現在の憲法及び職制とは可成異つていることは勿論である。

憲 法 (抜萃)

一、明治学院ハ北米合衆国プレスビテリアン教会及ビアメリカ・リフォームド教会の両ミッショナリガスコットランド一致プレスビテリアン教会ノミッショント合議ノ結果建設シタル一学府ナリ。

二、本学府ノ目的ハ完全ナル基督教教育ヲ授ケ特ニ青年ヲシテ基督教教師教職者トシテ訓育スルニアリ。協力ミツシヨシ並ビニ其ノ他ノ財源ヨリ得ル一切ノ資金ハ神聖受托金トシテ此ノ目的ノタメニノミ用ヒラル。

三、本学府ノ総攬並ビニ経営ハ理事員会ニ因ツテ定メラル。

四、理事員ハ七名ノ外人、七名ノ日本人ヨリ成ル。外人理事員ハ協力ミツシヨシヨリ選舉サレ、日本人理事員ハ日本基督教教会ノ健全ナル信徒タルヲ要シ、理事員会ニテ選舉サル。任期ハ二年ト定ム。

五、本学院ノ役員トハ、総理、會計、幹事ノ三名トシ、其ノ職分ハ理事員会ニヨリテ決定サル。

六、本学院ハ普通学部神学部ノ二学部ヲ含ム。各学部ノ教授会ハ理事員会ノ指揮ヲ待チテ当該学部ヲ管理ス。

七、学院ノ資産ハ理事員会ニテ選バレタル四人ノ法定財産管理人ガ理事員会ヲ代表シテ所有スルモノトス。

八、理事員会ノ合法的決議ヲ有効ナラシムルタメ法定財産管理人ノ批准ヲ要スル場合ハ猶予ナク其レヲ受ケウベキモノトス。

五 「藤村氏学びし頃」より

「藤村学びし頃」は五十年史の中で九頁に亘つて非常に興味深く書かれているが、此処にはその一部分を僅かに伝えるのみである。

藤村氏が三田の英語学校から白金へ移つたのは、明治二十年十六才の時であつた。氏は明治五年二月十七日長野県西筑摩郡神坂村に生れ、父は正樹といつてもと平田篤胤の門人、非常に子供の教育に熱心な人であつた。藤村氏の好著「桜の実の熟する頃」にその頃の学院生活が細やかに描かれている。以下はそこから再録したものである。

百日紅「界隈の寺院では勤行の鐘が鳴り始めた。それを聞くと夕飯の時刻が近づいたことを思わせる。捨吉は学校の広い敷地について、亜米利加風な講堂の裏手のところへ出た。樹木の多い小高い崖にのぞんで百日紅の枝などが垂れ下つて居る。その暗い葉蔭に立つて独りで手真似をしながらしきりに英語演説の暗誦を試みている青年がある。捨吉よりはずつと年上の上級生であつた。」

「捨吉は寄宿舎の方へ帰つた。同室の学生は散歩にでも出かけたかして、部屋には見えない。窓のところへ行つて見ると、食事をすませた人々が思い思いの方角をさして広

い運動場を過ぎつつある。英語の讚美歌の節をうたいながら、庭を急ぐものがある。張り裂けるような大きな声を出して暗い木蔭で叫ぶものがある。向うの講堂の前から敷地つづきの庭へかけて三棟並んだ西洋館はいづれも捨吉が教えをうける亜米利加人の教授達の住居だ。白いスカートを涼しい風に吹かせながら庭を歩いている先生方の奥さんも見える。」

寄宿舎「安息のない、悩ましい、沈んだ心地で、捨吉は寄宿舎の部屋の方へ引返した。各々の部屋は自習室と寝室との二つに分かれている。寝室の壁によせて畳の敷いた寝台が作りつけてある。そこへ彼は身を投げるようにして、寝台へ顔を押しあてて祈つた。」

郊外「捨吉は講堂の前から緩慢な岡に沿うて学校の表門の方へ出、門番の家のそばを曲り、桜の木の蔭から学校の敷地に沿うて裏手の谷間の方へ坂道を降りて行つた。一面の鋳で樹木の間から朽ちかかった家の屋根が見える。勝手を知つた捨吉は更に深い鋳について分れた細道を降りて行つた。竹鋳のつきたところで坂も尽きている。彼はよくその辺を歩きまわり、林の間に囀る小鳥を聞き、奥底の知れない方へ流れ落ちて行く谷川の幽かなささやきに耳を澄ましたりして、時には御殿山の裏手の方へ、またずつと遠く

目黒の方まで独りで歩きに出掛けたこともあつた。四辺には人も見えなかつた。誰に遠慮もないこの谷間で彼は堪らなく圧迫されるような切ない心を紛らそうとした。沈黙し鬱屈した胸の苦痛をそこへ洩らしに來た。張りさけるような大きな声を出して叫ぶとそれが淋しい谷間の空氣へ響き渡つて行つた。一羽の鳥が薄明るく日光の射し入つた方から舞い出した。彼はそこに小高く持上つた岡の裾のような地勢を見つけた。その小山へも馳登つて、青草を踏みちらしながらまたそこで力一ぱい大きな声を出して怒鳴つた。」

「残る二学期の終には、いよいよ四年生一同で卒業の論文を作つた。捨吉もそれを英文で書いた。学校の先生方は一同をチャペルに集めて、これから社会の方へ出て行くとする青年等のために前途の祝福を祈つてくれた。聖書の朗読があり、讚美歌の合唱があり、別離の祈禱があつた。受持受持の学科のもとに先生方が各々署名して花のような大きな学校の判を押したのが卒業の証書であつた。やがて一同は講堂を出てその横手にある草地の一角に集つた。皆でよつてたかつてそこに新しい記念樹を植えた。樹の下に一つの石を建てた。最後に捨吉は菅や足立と一緒にその石に刻んだ文字の前に立つた。『明治二十四年——卒業生』

(因にこの中にある百日紅は校庭の号令台の處に移し植えられていたが現在は講堂北側藤

村歌碑の側にある)

「学園の『葦草』」最近学院出身の中島久万吉氏が「政界財界五十年」なる一書を出版されたが、その中の『学園の葦草』は此の時代の興味深い一面を伝えている。左にその一部を借用再録させて戴く。

学園の「葦草」

島崎藤村——和田英作——戸川秋骨——馬場孤蝶

当時明治学院の同学中、後には我が文芸界に赫々の名を成すに至つた島崎藤村、和田英作、戸川秋骨、馬場孤蝶などの秀才が在つた。藤村子は凡そ一切の学科を通じ往くとして可ならざるもの無く、学績遠く儕輩を凌いで卓然たるものが有つた。例えば数学でも英語でも、吾等同級の者がトント行き詰つて答案に窮してしまふと、米人の教師は必ず藤村に向つて Now, Mr. Shimazaki, you try とやる。すると藤村君は、直にボードに進んでさらさらと数学の難題を解いてしまふ。席上から極めて明快に英文の義釈をやつて除ける。真に快刀乱麻を断つのが慨だ。定期試験の平均点が九五、六点という優良の成績だから驚く。和田君はキリスト教会の牧師を父とし、普通定部卒業の後は進ん

で神学校に学ぶ志であつたらしい。馬場君は自由党の領袖として、はたまた大雄弁家として令聞の有つた馬場辰猪氏の弟で、一種の風格を具え、自から慷慨の氣を帯びて居つた。戸川君は、英学の研究に熱心な一学生と知るだけで、寧ろ異彩の無い存在であつた。

私は徳富蘇峰先生の甥に当る河田謙雄という人と協力して「葦草」という雑誌を發刊した。雑誌と言うは言うものの、原稿から筆耕を儲つて之を罫紙に淨書し、其の二冊を学院の図書室に置いて校生の縦覧に供すと謂うのである。

或る時藤村子は私に向つて「最近僕に斯ういうものが出来たが、試みに之を『葦草』に載せて見ては呉れまいか」と言う。見ると、これが後に新体詩といわるるに至つたものの夫れだ。七五調で極めて流麗に郊外晩秋の景物を詠じてある。委細承知で早速次号に載せると、校内噴々の好評だ。藤村子スッカリ得意に成り、それから毎号長篇を寄稿し来ることに成つたは好いが、同時に学科の方が卒かにお留守に成り、最早先生の代稽古は勤めず、先生から例の如くに Now, Mr. Shingzaki, you try と命ぜられても、I don't know と応えて、先生を驚かすこと屢次、到頭先生から Mr. I don't know の称号をさずかるに至つた。想えば人間の運命というものは不可思議不可称量のもの

で、真個一弾指の間に一転する。島崎君は斯の時正に自家の天才に接着したのだ。仮りに此の「葦草」の因縁が無くて、かのままに明治学院の学程を卒つたとしたなら、恐らく更に帝国大学に進み、後は一個大学教授の平凡な生活に終つたかも知れない。然るに同君は一超直入、自家天才の導くままに導かれ行いて、竟に自から一文豪を打成し了つた。

神学専攻の志であつたかと思う和田君は自から進んで「葦草」の表紙絵を担当した。君にも亦、時勢相応の慷慨癖は有つたが、其の天性は寧ろ一種超俗の芸術肌で、曾つて面白かつたは、君が表紙絵に裸体の美人が葦花の叢中から半身を露わしたものを描いたを、学生係が看とがめて、かかる鄙猥極まるものは図書室に入れることを許し難いとして没収された。和田君は大に憤慨して、苟も米人経営の外国学校当局が、洋画の特色たる美の真髓を解し得ないようなことで、何として泰西の文化を導入することが出来るかと敦囲き、到頭無事に取り下げを得たことなどが有つた。こんなことから、和田君も亦藤村子同然、端無くも一転自家天才の發展に邁進するの機縁を得、斯の如くにして時代は遂に一流洋画家の一人を産むに至つた。

戸川君は「葦草」に毎号ワシントン・アルヴィングの「スケッチ・ブック」の反訳文

を出して呉れた。学院の某英語教授が之を卒読して後、私に向い、此の訳文は何れから獲たと尋ねるので、これは戸川の手に成つたものだと言つて、これは到底学生などに依つて出来る芸じやないと言ふから、それならば直接本人に就てお試めしありて然るべしと言ふ訳で、其の某教授躬らが戸川君を試験して意外の余り、同君を督励してアルヴイングから更にエマソンと前進せしめ、遂に我が英文文学界に向つて一秋骨先生を送り出すに至つた。

馬場君が其の生涯を文芸を以て終始すべしとは、尠くとも私に於いては全く思いも寄らなかつた所で、君は幾篇の小品を「葦草」の為に書いて呉れた。私は馬場君としては当時不遇の裏に米國に客死した家兄辰猪氏の志を襲いで我が政界に人と為るべきが、其の必然の運命であるなどと考えたりした。然るに後、小説家という名の下に世に識らるるに至つて、甚だ之を意外とした。果して「葦草」が其の因縁を作したものか何うかとはまでは詮議が許さない。(以下略)

順調期間に於ける学制の変遷 白金移転後明治二十三年までは予科二年、本科三年の課程であつたが、二十三年九月から本科に五年級を附して選科とした。ついで二十七年、從來の本科予科を改めて高等科二年、普通科五年とした。

六 植村正久氏と神学部

植村正久氏は井深氏と共にブラウン塾の双壁であつたが、三校合併後は学院理事及び講師として挙げられ、明治二十二年九月には神学部正教授に就任、系統神学、聖書神学、宗教哲学を講ずることになった。氏は明治維新と共に逼塞した徳川旗本の子息であるが、一致神学校の第一回卒業生で、牧会の傍、翻譯や著述に筆を染め文筆を以つて思想界に進出した。明治二十三年日本評論を創刊し、厳正なる基督教主義の評論を以つて當時の昏迷せる国民の思想を指導し、同時に福音週報（後の福音新報）を發刊して基督教界の進歩發展に寄与した。また氏は説教家として日本に於ける不世出の天才であつた。其の幽嚴なる信仰と、稀に見る高い教養と、比類無き人生に対する洞觀とは渾然として氏独特の思想を織りなし、この深遠なる思想が咄々としてその重い唇を洩れる森嚴な礼拝の一と時は、聴衆の心に深い感銘を与えずにはおかなかつた。神学者としても評論家としても一家をなしていたのは勿論であるが、鬱勃たるその愛の故に氏は教壇の人となつて迷える多くの魂を導いた。氏を学院が神学部を迎えたのは、たしかに白金台に一異彩を添えたものであつた。

神学部の確立 明治二十三年、従来の邦語神学部と英語学部が合体して明治学院神学部

なるものの確立を見た。

内容に变りはなかつたが入学資格に於いて、前者は適当な推薦があれば入学が許されたが、後者は学院普通部若しくはこれと同等の課程を具備する学校の出身者に限られる事になり、制度も改められて其の後年毎に一致神学校以来の不規則が整頓される端緒となつた。又前記図書館を兼ねた神学部校舎は此の年に建てられたもので、学院神学部は内容外観の整備、共に見るべきものがあつた。この二十三年は神学部の歴史に於いて最も多数の卒業生を出した年で十九名の多きに上つている。

翌明治二十四年には更に神学部の整頓が講ぜられ、修業年限が三カ年から四カ年に延長された。別に短期間に伝道者を養成する目的で、二カ年の東京伝道学校が一致神学校の空校舎に設けられたが、二十六年閉鎖され同時にその後身と見るべき修業年限二カ年の別科が白金に置かれる事になり神学部の方は予科一年、本科三年と改められた。

この年の九月から植村氏の推薦で柏井國氏が米国留学中なる石本三十郎氏の後をうけて神学部に講師として迎えられた。明治二十八年は所謂反動期で別記の通り普通学部は甚しい衰潮を来したが、神学部はこれに反し本科、予科、別科、合計三十七名で仲々隆盛であつた。

石本三十郎氏の永眠

しかしこの年の十一月、一つの悲報がもたらされた。それはプリ
ンストン神学校に留学中の石本三十郎氏の永眠であつた。氏は英学者として又通訳として
当時の第一人者であつたが、勉学の志止み難く、且つは学院神学部のために更に貢献する所
あらんとして遠く米國に赴いたのであるが、学業半にして三十三才の若さを以て異郷に逝か
れた。氏は熊野雄七氏の同郷で長崎県大村の人、熊野氏が横浜へ移転の折勉学のため伴つ
て来た天才少年であつた。十一月三日学院では天長節祝賀の運動会が校庭に催され、石本
夫人は二人の子供を伴つて見物し心から楽しそうに一日を送つたが、その前日に石本水は
既に北米ピリンストンで永眠して居られたのを誰一人知る者は無かつたのである。夫人は
服部綾雄氏の令妹、二人の遺児は後夫々立派に成人し、長男音彦氏は帝大英文学部卒業後
学院に四年間奉職され女静子氏は後に学院の同窓里見純吉氏夫人となつた。

第四章 憂難期及びその後

一 憂 難 期

国粹論の再興 維新の大業成つて攘夷思想は影を潜め明治九、十年の頃は所謂鹿鳴館時代で欧化主義の全盛期であつたが、やがてその反動が現われ十五、六年頃から保守思想の反欧化主義が擡頭し、欧化主義者との間に激烈な確執論争が展開され、国民は去就に迷う有様となつた。

明治二十二年憲法の発布があり、二十三年には教育に関する勅語が煥発せられ、国民はその向うべき所を示されたが、勅語の義解はおのずから国体論を誘起し、その勃興を見るに至つた。然るに唯一の神以外には何物にも最高の權威を認めぬ基督教徒は、御真影に対する宗教的礼拝を拒み、又侵略主義教育に対して反抗の態度を取る者も少なくなかつた。明治二十五年、井上哲次郎氏は基督教が勅語及び国体に背戾すると云う意見を發表し、続

いて「教育と宗教との衝突」なる一文を「教育時論」外二十数種の雑誌に掲載し、更に之を小冊子として公にした。井上氏对基督教徒の論争は一世に波及し、学者教育家、宗教家、操觚者を尽く其の渦中に巻き込んだ。明治二十七、八年日清戦役の勝利は国民的自覚を促し、国家的信念を昂揚し、この時天下の輿論となりつつあつた反基督教思想はこの新しい情勢と結合して、基督教の伝道と教育に殆んど致命的な打撃を与えた。

学院の苦闘 かかる中にあつて基督教主義の我が学院が如何なる方策を取つたにせよ、衰微の一途を辿る外すべのなかつた事は、止むを得ぬ事であつた。一方両ミッションに対する基金募集の依頼も期待に反し、明治三十一年井深・熊野両氏の懸命の努力による尋常中学校としての資格獲得も一時的の效果に終つた。明治三十二年八月三日、文部省訓令第 十二号「法令の規定ある学校に於て自今宗教教育を施し又宗教の儀式を行うを得ず」の発せらるるに及び八月四日の学院理事員会は遂に左の三項を議決するの止むなきに致つた。

一、明治学院尋常中学部はその尋常中学校たる特権を即時返納すること。

二、普通学部 of 名称の下に学生の訓育を続け、従来の聖書教授及び礼拝は之を執行すること。

三、我國の将来に設立さるべき基督教学校のため、且つ現存の同種の学校のため、友校

と協力して文部当局の反省を促し、特権の回収に努むること。

かくて時を移さず八月五日には熊野幹事が東京府に出頭して資格返納の手續きをなし、井深総理と共に、仮令学生は減少して一名に至るとも尙聖書の教授と礼拝は学院の本領として遂行するの決意を新たにした。之と同時に他の基督教諸学校と提携して対策を講じたが当局の態度は仲々頑強で訓令の施行を迫つて譲らず、遂に我が学院のみならず同志社、青山学院、東北学院も夫々資格を返納して了つた。八方奔走して漸く得た尋常中学校の資格を僅か満一カ年で抛棄した学院は、再び学生の減少を来たしたが、其の後頻りに文部当局と交渉を重ねた結果、三十三年七月には徴兵猶予の特典を、三十六年五月には「普通学部卒業生は各官立高等学校及び専門学校に入学試験を受くる資格を有す」との通牒に接した。かくて学院は完全に聖書教育の自由を確立するに至り前後八年に至る苦闘は遂に有利な解決を見、学院普通部の前途には漸く輝やかしい光明が見え始めた。この受難の日に、落莫の白金台に立て籠つて苦闘する指導者を信頼し、その学節を全うした数少ない卒業生諸氏を、我々は永く記憶しなければならない。石川林四郎、南廉平、森田金之助、田島進尾島喜久恵、里見純吉、鮭延信道、原順次郎、今野茂、鈴木春、横田貞治、匹田順、石原義雄、富尾留雄、其他の諸氏である。

有利な結末 明治三十五年一月理事会は両伝道局へ次のような手紙を送っている。

学院は過去二年間非常なる危機に遭遇せるも茲に前途何となく光明ありと思はしむる兆二、三あり。ただに政府は前途の譲歩を為せるのみならず、私立学校に対する無関心或いは半對抗的態度を捨てて、適當の施設ある限りこの条件のもとに宗教学校に幾分の好意を示しそめたり。之と共に同一の方面に於て或る更新の形勢明らかなるものあり。その結果として基督教諸学校は繁栄の新機運に向ひつつあるを覚え、各々奮励しつたり。学生数の實際的增加もまた一種の喜悅を与うるものなり。二年以前に於て全学院の学生九十なりしもの、当今は百六十名を数え、内百五十一名の出席者あり。

明治学院理事員会

井 深 梶 之 助

エム・エヌ・ワイコフ

ウィリアム・インブリー

又熊野氏は当時の模様を次の如く語っている。

「其の当時我が日本は欧化主義反動の時代とも云うべき時で、明治十六年から二十年頃に亘つて西洋のものなら靴底の釘でも有難がつた時代のあとに、其のおそろしい反動が

来て井上哲次郎博士其他有力なる人々は極力外人の設立にかかる学校は國家に害ありとも益なしと云う様な意見を發表せられた所が、不思議にも其の意見が社會に多大の注意を惹起することになった。そして社會の注意が其方に向けば向く程本學院の生徒は日毎に減少するばかりとなつた。ある時の如きは生徒が唯四十三人だけのこともあつた。今とは違つて物価の極めて安価な時ではあつたが、毎月の月謝の總收入が五十圓に足らなかつた位で、一人の教師の俸給にも足りない程であつた。

二 興 隆 期

再興の機運 徴兵猶予と高等専門學校入学の資格を得てから學院の庭は漸く賑い初め、当局者は前途の發展に備えて外部の拡張と内容の充實を図るに忙しかつた。明治三十五年二月前記ミラー氏寄附の邸宅が一万五千圓で処分されたので、翌三十六年二月から之を以てドイツ人ゼール氏の設計で校地の東南隅に礼拝堂が建てられた。之により毎日の礼拝は天井の高いゴシック風の窓の色鮮やかなステンドグラスを洩れる床しい光の下で行われ皆の喜びは一通りではなかつた。

學院の飛躍 三十六年十一月神学部及び高等学部は専門學校令により認可された。思う

に之は我が学院の一大飛躍であつた。四十年の昔横浜へボン治療所に創設された小やかなへボン塾、三十年の昔同じく横浜山手のブラウン家塾より起つた一神学塾は幾山河を越え來つて茲に文部省の認むる専門学校の姿を取るに至り、其の卒業生は今や専門学校の卒業者として社会に遇せらるる事となつた。

基金募集の成功と財団法人認可 明治三十八年、井深氏は日本の青年会を代表してパリーの世界基督教青年会同盟及びオランダ、ザイストの万国学生会同盟に出席し、その帰途米國を訪問したが、恰も日露戦争の末期に当り、米國朝野が挙げて日本に好意をよせていた際であつたので、かねてインブリー氏からプレスビテリアン・ミッションへ依頼していた学院の基金募集が滑らかに運び、井深氏は二万五千ドルの基金を得て翌年二月無事帰朝した。

三十八年三月五日、予て出願中の明治学院財団法人の件が文部大臣より認可された。

四教授勸読二十五年祝賀会 明治四十年三月二日神田青年会館で同窓生及び基督教界、教育界の知名の士を招いて盛大な祝賀会が催された。それは井深・ワイコフ、インブリー、ジョン・バラ四氏の勸読二十五年以上を祝う会であつたが、式後其の時分新たに制定された藤村作の校歌を合唱した。

二教授の永眠 明治四十年三月十日、日本の恩師ヴァベック氏、四十四年一月二十七日には我らの慈父ワイコフ氏が永眠された。(前者は 頁後者は 参照)

三 変 易 期

再度の基金募集と普通学部校舎の建設 明治四十三年三月七日の理事会で次の事が決定した。

来る五月初旬エヂンバラに開催せらるべき宣教師大会に井深総理が出席さるるに就いては、帰途米国を経由し学院の為に建築基金の募集をなすよう委任すること。

此の募金は未曾有の成功であつた。井深氏はエヂンバラの帰途米国に渡りニューヨーク、のロバート・スピーア氏の親切な紹介で各方面からの寄附金約三万弗を集める事が出来之内地の募金一万三百円を合して約七万円が学院拡張のために用意された。此の基金の中四万円建てられたのが普通学部校舎と幹事邸(現在の高等学校長住宅)で明治四十四年十一月三日天長の佳節に落成式を行つた。

ヘボン館、ハリス館の焼失とヘボン氏の永眠 旧ヘボン館の出火はこの新校舎落成式間近の同年九月二十一日早朝の出来事であつた。幸い新校舎は危く類焼を免れたがハリス館

は惜しくもヘボン館と共に灰燼に帰し之と殆んど時を同じうして学院の創始者なるヘボン博士が米国で永眠された（三十八頁参照）

間もなく学院は新ヘボン館の建築に着手し翌四十五年の七月落成、二学期から普通学部
の寄宿生を收容した。坪数百七十四坪、（他に食堂五十六坪）舎監は富尾留雄、中原剛三
三浦太郎、上田兵吉の諸氏が歴任した。

高等学部バプテスト・ミッションと合同 明治四十四年に普通学部校舎が完成して、そ
れまでサンダム館にいた普通学部生徒がそこに移されてからかなり広いサンダム館が殆ん
ど空家となつた。学院は之を利用してかねて念願の大学部設立を劃策しバプテスト教会と
協力に決定、同派の東京学院高等部が学院の高等部に加わる事となつた。このため優秀な
外人教授の外に石原謙氏、大島広氏、山谷省吾氏等一流の日本人教授が参加して学生は大
いに有意義な授業を受け得たが、不幸にもその本拠なるサンダム館が大正三年出火焼失し
たため蹉跎を来し、加うるに資金の調達も思うに任せず遂に大正五年バプテスト教会教育
部の方から協調継続不可能の申出があり、大学設立の希望は遂に立ち消えの状態となつた。
サンダム館の出火で神学部校舎は危く類焼しかけたが幸い塔が焼け落ちたのみで防火に成
功した。

講堂及び高等学部校舎の建築 サンダム館の焼失は学院の宗教教育にとつて大きな打撃

であつた。明治三十八年及び四十二年の強震によつて、ミラー氏の礼拝堂が破損し、それ以来全校生徒の唯一の集会所となつていたサンダム館二階の講堂を失つたからである。このため講堂及び高等学部校舎の建築が焦眉の急務となつた。大正四年春から夏にかけて井深インブリー両氏は八方に奔走して資金の調達に努め両ミッシェンの援助とサンダム館の火災保険金一万円、セブレンス氏の子息の寄附七千五百弗其他をこれに充てる事とし、ヴォーリス建築会社の設計で、建築費講堂一万五千円、サンダム館一万八千円の予定で同年九月から基礎工事が始められた。時恰も第一次世界大戦中で鉄材が騰貴し、ために予定のスチーム暖房は取止めとなつたが翌大正五年三月落成した。講堂百十三坪余(現在の講堂)新サンダム館七十五坪(現在の中学化学館)

定礎式 この両館の建設について忘れる事の出来ないのは、丁度基礎工事を終えて本建築にとり掛つた時分、大正四年秋未だ早い十月二十九日に恰かも申合せた様に北米プレスビテリアンボードの外国伝道局主事ロバートスピア氏とダッチリフォームボードの外国伝道局主事チエムバレン氏とが学院を訪ねて来た。学院ではそれを好機として定礎式を行つた。スピア氏は講堂のため、チエムバレン氏はサンダム館のため、各々隅の首石を据

える事になった。スピーア氏の据えた首石は、今でも講堂の北面記念樹の木陰に、花崗岩に大正四年十月二十九日と刻まれたまま残っている。その当時のスピーア氏は気品のある面長な顔附で、何処かに青年らしい雰囲気を漂わせていた。巨大な体軀に鼠色のオーバーコートを着たままその首石を据えたが後で一場の暗示深い演説をした。「私は此の石を單にこのチャペルの建築のために据えるのではない神の国建設という永遠の事業のために据えるのである。」と結んだその言葉は何時迄も忘れられない。

服部綾雄氏の永眠 大正三年四月二日、サンフランシスコのイムピリアルホテルの第五十一号室で学院の功勞者服部綾雄氏が突如永眠された。氏はその前年五月、加州排日問題に関し国民党から派遣されて日本移民の權利擁護と移民慰問のため滯米中であつた。寢食を忘れて東奔西走、その日も要路の人々との談合に一日を費し夜一時頃ホテルに歸つて寢についたのであるが果して何時頃亡くなられたかは知る由もない。宿の者が翌朝扉を開いて見ると何の苦痛も無い状で安らかに眠れるが如く寢台の上に横わつて居られた。氏は沼津藩の名門に生れ父君は江川太郎左衛門の塾頭たりし人。幼にして漢学を、十才にしてヘボン塾に英学を学び、十三四才の頃ルーミス氏から洗礼を受けた。石本三十郎氏とは同門の親友で後には義兄弟となつた。

シヤトル市に於ける決死の腐婦運動 「君が古屋商店に聘せられてシヤトル市に在る

頃である。在留人は君の人格と威望とを尊重し君を日本人会長に選挙した。君は在留同胞の現状を視察し之が品位を高むるには一に彼等を誘惑する一大勢力を打破するに在ると信じ、一日演説会を開き、青年を墮落せしむる当市の一青楼を攻撃して完膚なからしめた。之が為に青年の品行頗に改まりて見るべきもの甚だ多かつたが、俠客を以て名高くあつた其の楼主は大いに怒つて君を殺さねば止まぬと怒号して君に面会を申込んだ。

古屋商会では之を聞いて大いに君の為に憂慮し、必らずかかる悪漢には面会し給うなと勧告して外出するを戒めた。君思えらく彼れ決して我を殺し得なからう。若し殺し得たならば予の死は在米同胞の品格を高むる犠牲となるのであつて、決して徒死にはならない。何ぞ死を恐るべきであらうと、竊かに出でて楼主の指定した某所に赴かれた。某は既に席に在つて君を待つていたが君の入り来るを見て突然ピストルを以て君を脅迫した。君悠然自ら両腕を以つて胸を開いて「さあ予を殺せ」と大声叱呼した。某は君の威光に恐れ其の人格に打たれて銃を投げ棄てて大いに其の疎忽を謝したが、爾来某は深く君の人格に感じて君の為には斯て水火をも辞せざるに至つた。

窪地のセベレンス館 学院が中等学校の資格を回収してから在學生は著しく増加したので、明治三十八年三月神学部の寄宿舎となつていたハリス館の二階を普通学部五年の教室にし、神学部學生のために新たに寄宿舎を建設する計劃を立てた。明治四十年の春ニューヨークの実業家でプレスビテリアン系のセベレンス氏が日本へ觀光に來た際、この寄宿舎の建設費を寄附する約束をされたので、校地の西北隅坂下の幽邃な地に水道瓦斯、その他完全な設備のある立派な寄宿舎を新築した。木造二階建、百二十三坪、経費約一万三千元であつた。大正八年に此の建物を白金三光町へ移すまでの十一年間に此のセベレンス館はずいぶん色々な人を社会に送り出した。純福音の情熱的伝道者から一転してニヒリスティックな社会思想家となり、悲劇的な一生を終つた加藤一夫氏、日本随一のダンテ研究者だつた中山昌樹氏、政界に進出して戦時中南方の長官となつた大迫元繁氏、白金教会の牧師で登山家の郷司造司氏（彼は同窓七八名をひきいて鎗ヶ嶽の頂上をきわめた。）

平均点九十九点を得た秀才八田舟三氏（彼はその才と情熱を持てあまし、名をなさずして早世した）前学院長村田四郎氏、長原教会を創設して奮闘しつつある山本喜蔵氏、幼児教育の権威高崎能樹氏、本学院教授瀬川四郎氏、同現教授英義雄氏、小樽教会牧師たりし村岸清彦氏、賀川豊彦氏の共労者吉田源次郎氏、紀州新宮教会を中心に活躍する河村斎美

氏、神学大学校長文学博士桑田秀延氏、室蘭工大教授鷲山弟三郎氏、鎌倉雪ノ下教会牧師松尾造酒蔵氏、朝鮮木浦で伝道した高尾益太郎氏。新聞聯盟の染矢為助氏雪ヶ谷教会牧師山本弥一郎氏、沃折の伝道者渡辺重右衛門氏、プリンストンを卒業して間もなく客死した藤沢貞雄氏、故瀬川四郎教授を親切に看病した台湾の郭馬西氏など、是等は皆窪地のセベレンス館時代の産である、場所が窪地で人目につかぬと云う好条件に恵まれ随分思い切つた自由生活が営まれ学生は皆よく騒ぎよく論じよく歌い誠に賑やかであつた。しかし朝夕の礼拝時間には全舎が静まり返り、感謝の祈が捧げられ、胸奥の深い悩みが訴えられ、又美しい讚美歌が合唱された。誠にセベレンス館は学生達の自由の樂園であると同時に清き信仰の道場でもあつた。

大正七年に瀬川教授がセベレンス館で患つて後、学生をもつと健康に適した高地に移す必要を感じ隣接の富豪久原氏にセベレンス館の敷地四百坪を買収して貰い、その代価四万円を以て白金三光町に土地を求め、セベレンス館を少しく改修して此処に移し別に階上食堂、階下賄室の一棟を建て、大正八年四月工事を終り学生を其処に移した。総坪数二百十八坪余。

第五章 膨 張 期

一 創立四十週年記念式

大正六年十一月三日学院は丁度創立四十週年に相当したので基督教界、教育界の名士、同窓生を招いて新装成つた大講堂で午前九時から井深総理司式の下に記念式を挙行した。式に続いて十五年以上勤続の左の諸教授にオルトマンズ理事長から記念品を贈呈し表彰と感謝の意を現わした。

ジョン・バラ氏（三十七年） 井深氏（三十五年） インブリー氏（四十年） ランデス氏（二十一年） 能野氏（二十四年） 河西銀之助氏（十六年） 岡見正氏（十六年） 宮地謙吉氏（十五年）

午後は校庭で運動会が開かれ、夜は芝三緑亭に同窓八十名が集つて祝宴を張つた。

二 功勞ある二氏の永眠

ジョン・バラ氏の永眠 大正九年十一月十四日ジョン・バラ氏は鎌倉で永眠された。ヘボン塾から築地大学校、一致英和学校、明治学院と（途中帰国した事もあつたが）実に長い間学院と関係が深かつた。築地大学校々長の頃が氏の全盛時代で、服部石本両氏は氏の秘蔵弟子であつた。ジェームス・バラ氏の令弟である。

能野雄七氏の晩年と永眠 大正七年五月十八日学院の講堂で能野氏の勤続二十五年の祝賀会が盛大に挙行されたが、その後間もなく氏は健康が衰え翌八年三月三十一日かぎり職を退いた。理事会は規定による恩給の外に生涯毎月金五十円を贈呈することを可決して長年の勞を謝し、同窓会は募金して葉山、堀の内なる景勝の地に二十一坪の住宅を新築して氏に贈つた。氏はこの家にあること二ケ年、大正十年五月十日極めて平和に永眠され、井深氏への遺言により十二日学院講堂で葬儀を執行遺骨は青山に葬られた、享年七十才。氏は肥前大村の藩士で嘉永五年二月の誕生。慶応四年六月大村藩は錦旗をかざして奥州征伐に参加し、会津落城の折氏は後年の親友井深氏の立籠る鶴ヶ城を小田山から砲撃する官軍の中にあつた。当時井深氏十四才、能野氏十七才、後横浜に移転、ジェームス・バラ氏か

ら受洗・明治六年植村、押川氏等と共にブラウン塾に移り此処で井深氏と水魚の交りを結び、後年共にその生涯を学院の経営に捧げる事となつた。氏が井深氏の懇請で学院の幹事に就任したのは明治二十六年で、恰も反欧化思想が一世を風靡し、為に二十八年は学院の衰微其の極に達し校庭に学生の影も見えぬ非運に陥り、右すべきか左すべきかの岐路に立つて苦悩したが、氏は井深氏と共に最後まで基督教主義を死守してゆずらなかつた。苦心経営した学院が日に日に隆盛に赴く姿をその晩年に見られたのは誠に幸いであつた。

三 中学部の膨脹

大正四年二月に普通部を中学と改称したが、その頃から生徒の数は年々増加の一途を辿つた、中学部ではこのためジェームス基金（ジェームス夫人なる人が大正二年一万ドルを寄附された）を以つて雨天体操場（現在の体育館）を新築した。大正八年七月竣成、二期から之を使用した。

大正元年の同盟休校 大正元年幹事制が廃止され三学部に部長を置くこととなつて神学部長は井深氏、中学部長と高等学部長は熊野氏が兼ねて居たが、大正八年三月熊野氏が辞職し、その後をうけて新進気鋭三十六才の村田四郎氏が中学部長の要職に就いた。氏は学

出身の新帰朝者で、大正七年四月に、基督教々育徹底の目的で創設された明治学院教会の牧師として聘せられて居たのであつた。当時中学部は何となく規律が乱れ、毎朝毎昼生徒が校舎に入る時、或は体操の時間等に教師の命令がよく行われず礼拝の席に於てすら静肅を欠き甚だ憂うべき状態にあつた。新部長は之を矯正し且つ基督教々育の徹底を計らんと大いに努力し、一時は相当の効果を挙げたが、不幸にも翌九年二月下旬、三日に亘つて学院創立以来曾て無き同盟休校が行われた。幾多の経緯はあつたが結局村田氏は引責辭職し井深総理が一時部長を兼ねる事になつた。五月に至り水蘆高等学部長が中学部長心得となり非常な覚悟と誠意を以つて事に當つた。

翌十年三月水蘆氏は中学部長に就任鋭意規律の改善に努め宗像亀雄氏を生徒監に任じた、宗像氏は嚴罰主義を以つて生徒にのぞみ大いに効果を挙げたが表面の校規肅正に拘らず、生徒は次第に陰忍に疲れ、心ある者はこの方針が自由を尊ぶ学院の精神に反するおそれなきかを憂うるに至り、当局者も之に氣付き徐々に緩和策を試みつつあつた。此の間に学院は大正十年三月井深氏の總理辭任、十正九月ランデス氏の永眠、十二年二月明治学院教会の解散、十二年九月関東大震災、十三年神学部の新橋角への移転等があつて多事多端であつた。

大正十三年の同盟休校 大正十三年十月三十日、長い緊肅教育の反動が勃然として起り

中学部は五年にして再び同盟休校に突入した。喧騒を極めた先の場合に反し、此の度は三年生以上が講堂に集り静肅に礼拝を行い、父兄の説得にも従わず頑強に結束を固めていた。その主張は「学院の教育は宗教的でない、須らく部長に其の責任を問うべし」と云うにあつた。十一年四月からオルトマンズ氏の後を受けて理事長として学院管理の任に當つていた田川大吉郎氏は教員会議の信任を得て生徒委員の意見を徴し、人事に関する件を除き、他は大体学院の方針に添うものと認めて之を容れ、休校十日に亘る難事件は漸く解決した。

翌十四年宮地氏は宿痼の為、又十五年六月に水蘆氏、次いで八月には河西氏が辞職し、九月、臨時教務主任として関西学院出身の衛藤幹太郎氏が来任、昭和二年四月中学部長に就任した。

軍事教官派遣さる こうした動揺の中に、大正十四年九月から、第一師団第二聯隊から軍事教官として現役陸軍大尉台田伍一氏が派遣された。この軍事教官の派遣問題に就いては、独り明治学院のみならず、一般教育界に於てもその是非に關しては可成に問題になつていた。ことに基督敎学校に於ては博愛主義と軍国主義が衝突するの惧れなきかが氣遣わ

れていた。基督教学校の当事者は寄り寄りその採否について考えたものである。然し軍事教育を実施すれば、卒業生が徴兵に応じた場合、現役服務の期間が四ヶ月短縮されるという大きな特典は何れの学校に於ても大いに考慮すべき事であつた。のみならず既に実施している公立学校に於ける其の結果は良好なものようであつた。そこで学院中学部に於ては大正十四年第一学期中に教官派遣を申請し、九月から台田大尉が赴任することとなつたのである。台田大尉の人格は謹厳卒直、寡言にして而も抱負計画あり、軍人として典型的なものであつた。学院当局は大いに安堵し学生もまた氏を敬慕した。体操教練に於て規律のますます整頓した事は歴然たるもので、第一回査閲の折などには大いに査閲官の称讃をうけ、学院は面目を施した。昭和二年の夏台田大尉は拔擢されて、第一聯隊第一中隊長として帰隊し、後任として平田大尉が見えた。

高等学部に於ける**軍事教育問題** 軍事教育の採否は文部、陸軍兩当局から自由を許されていた為、中学部では前述の通り採用したが、高等学部では当時の田川高等学部長の方寸から、その採否を学生議会の議決に委せることとした。可成激しい賛否兩論の応酬があつたが反対派が多数で、軍事教育は当分採用しないこととなつた。

因に此の問題は昭和三年五月に至り軍事教官が派遣されて結末がついた。

四 関 東 大 震 災

大正十二年九月一日、やがて始まる第二学期の準備のために神学部都留仙次氏、高等学部の中山昌樹氏、中学部の河西銀之助氏等が出勤して各々其の事務をすませ、やおら帰ろうとする午前十一時五十八分、突如として全関東は驚天動地の大地震災に見舞われたのであつた。忽ち神学部二階の煉瓦の大煙突が屋内に倒れ、凄まじい音響と共に大卓子と多くの書架、天井と床の一部を粉碎した。又新築間も無い高等学部校舎の煉瓦の壁は方々に大亀裂を生じた。

しかし何よりも大きな事件は、中学部裏の化学室の出火であつた。大久保用務員の知らせで三氏が駆け附けて見ると室内はすでに白煙濛々であつた。黄燐の棒数本が瓶から転げ出して床に燃え移り毒ガスが室に充満し消火は思うに委せず一時はもはやこれまでかと思われたが、三氏を始め大久保君、大工の佐藤君、葺の白石君等の必死の消火で漸く大事に至らず消し止める事が出来た。大久保君は有毒な黄燐で火傷を負い一時は仲々の重体で憂慮されたが幸にして回復した。この人々の手柄は誠に大きかつた。若し大事に至つたならば独り学院のみなつずこの附近一帯がどうなつたかわからないのであつた。鎮火後高輪警

察から鄭重な礼を云われたそうである。

又この震災の最中、不安動揺から疑心暗鬼を生じた日本人は残念乍ら一つの大きな過失を犯した。都留仙次氏は危険に曝された二人の鮮人学生を某所にかくまつたが、之を嗅ぎ附けた学院関係の一軍人が都留氏を訪れ、軍刀を抜きかけて氏を嚇やかし、二学生の所在を追及した。都留氏は決死の覚悟を面に表わして「自分は神の心に適うと信ずる所に従つて行動して居る。君の行動は神のみ心に反するものである。」と頑として突つばね、遂に二人の学生を護り通したのであつた。

罹災状態 学院の教員で火災にかかりし者五、家屋倒壊せる者一、生徒の火災にかかりし者二〇五、家屋倒壊六五、死亡九、負傷一八、学院では各級担任者に死亡者負傷者の家庭を見舞わせ、又東京府からの配給品を罹災学生 of 家庭に贈つたり、罹災学生 of 第二学期校納金の支給を講ずるなどした。一般に対しても救護班を組織して芝、日比谷両公園に出動して尋ね人の世話をしたり避難者に学院の雨天体操場を提供して高輪警察署からの配給品で養うなどの奉仕をした。

五 井深総理の辞任

大正九年三月の同盟休校が漸く落着いて間も無い五月始め突如として井深総理は理事会に辞表を提出した。理事会では慎重な態度で之を受理したが何分三十年の功労者の進退に關する事であるので、長尾半平、笹倉弥吉、松井安三郎、オルトマンズ、モーレイの諸氏を委員に挙げて深甚の考慮を払う事になった。

大正九年十一月四日の理事会の席上で特別委員長長尾半平氏は詳細の研究を報告したが結局左の条件を以て井深総理の辞表は理事会に受理される事となった。

井深博士の明治学院総理の辞表を受容れ、之を来る大正十年三月三十一日より効力を生ぜしむ。右指定日後は総理エメリタスとなす。同時に理事会は特別起草委員を挙げて長年の勤勞に対する感謝状を作製して之を井深氏に贈つた。その後は神学部長及び教授として止ることとなり、オルトマンズ氏が総理事務取扱となった。同時に中学部長心得となつていた水声氏は兼任の高等学部長をやめて正式に中学部長となり、高等学部長には都留仙次氏が就任した。

井深氏は同年六月、学院が新築した白金三光町セベレンス館構内の新居に移転したが、大正十三年三月神学部長並に教授の職を辞任の旨申出でられ理事会は之を受理して感謝決議文を井深氏に呈し又恩給の外に学院から毎年金一千五百円を支給する事に決定した。

明治十四年東京一致神学校に助教授として赴任して以来四十三年間精励不息学院のために奉仕した博士は茲に齡七十を以て教鞭を措くこととなつた。尙井深氏の後任として神学部教授都留仙次氏が神学部長事務取扱となつた。

六 ランデス教授の永眠

大正十年九月九日学院の講堂でランデス教授の葬儀がしめやかに執り行われた。氏の晩年は周囲から、特に白人の教授達からあまり顧られなかつた。頭腦明晰な若き哲学者として特に選ばれて学院に派遣された氏であつたが、不幸にもミラー氏記念礼拝堂建築の際見廻り中に屋根の棟から堂内に転落して大打撲傷を負い、海外に二年静養したが快癒に至らず、爾來講義は組織に欠くる所があるようになった。しかし氏の心の純真さと門下に対する愛情は少しも変わらず且つ記憶力は昔のままだに旺んであつた。柔和聰明で、ドイツ語、フランス語に堪能な夫人の親切さと相俟つて、氏の家庭は向学青年達の慕い寄る場所となり、その師弟の親しみは又なく美しいものであつた。氏の逝去を心から惜しみ悲しんだのは是等の学生達であつた。

氏は大正八年帰米して二度目の静養をした上九年にまた日本へ戻つたが依然として恢復

せず十年九月七日輕井沢の別荘で永眠された。夫人はその後も学院に止り独仏語を教えて居たが、米国にある令息の是非にとの呼び寄せに接し十四年五月愛弟子なる田島、都留、松尾、友野、郷司氏等に手厚く送られ学院に心を残して帰米された。

次の一文は「明治学院生活」所載、鷲山氏の追憶文の一節である。

先生は四十年以上の奉仕ののち、学院にちかい瑞聖寺の墓地に眠つて居る。この先生とともに忘れえぬのはランドス夫人である。ドイツに生れ育ち、結婚されたのもドイツであつたと聞いている。素晴らしいお子さんを挙げられて、現にその一人ジェームス・ランドスはハーバード大学の法学部長で、前々大統領ルーズベルトのニューデイルの頃は、側近のブレイントラストの一人として活躍したものである。夫人は先生亡きあとも始終学院に歸つて来られては吾々ふるい弟子たちに逢うのを楽しみにされていたが、いつも良き母の典型を思わしめられた。昭和五年の春、久々で上海経由で見えられた時、私どもはささやかな歓迎の宴を設けたが、よもやま話の間に“*My heart is always remaining in Meiji Gakuin*”といわれた。その後二年ばかりして夫人は小さな筐に骨灰となつて歸られた。私どもは懐かしい思いの中に、チャペルで葬儀をおこない、瑞聖寺の、夫君と同じおくつきに葬つたものです。

七 高等学部の拡張

大正五年十二月学院では高等学部の大更新を計つて三ヶ年の英語専門学校の制度を改め予科一年、本科三年の文芸科、商業科及び英語師範科の三科を設置するに決し、文部大臣に認可を出願、翌六年七月認可となり、七年四月に最初の学生募集を行つた。しかしこの制度は大正九年五月再び三ヶ年制にかへつた。

高等学部の基礎は大正十年四月都留氏が部長となつてから十四年三月辞任するまでに固められたと云えるであろう。氏は商業科主任の新鋭石橋近三氏、高等学部出講の中山昌樹氏と協力して陣容の完成に努力した。大正十四年都留氏が神学部長事務取扱に転じてから田川総理が同学部長を兼任した。

井深ホール 学生は年々増加して収容し切れなくなつたが幸い震災の後一千石の木材が東京府から配給されたので之を以つて大正十三年秋正門左手の高台に新校舎（現在の高等学校）の建設を始めた。その費用は大正十年及十三年の二回に行われた東京市に対する土地移譲の代価と移転費の合計、約十万円が充てられた。

翌十四年五月竣工、四本の大コラムが聳えた立派な校舎で井深ホールと命名された。

總坪數三百六十坪。

諸資格の認可と指定 大正十四年四月七日高等学部商業科卒業生は商業及び簿記の二科について中等教員無試験検定の取扱を受けることとなり、又同年八月高等学部は文部省令高等試験令により高等学校高等科若しくは大学予科と同等以上と認定された。

高商部の満洲見学旅行 大正十五年七月十日から石橋科長は商業科学生二十名を率いて中国・満洲、朝鮮の見学旅行を敢行各地で同窓諸氏の熱心な歓迎ともしを受け大いに見聞を拡張、中国に対する研究と理解を深めた。この満洲旅行はその後更に三回行われた。

大正十四年高等学部の文芸科英語師範科の二科を合併して英文科と改称し修業年限を四ヶ年とした。之は中等教員の無試験検定を獲得せんが為の準備であつた。同時に英文科と商業科の主任中山石橋両氏は科長と称ばれることになった。

インブリー博士の引退 大正十年三月を以て神学部教授インブリー博士は名誉教授となられ、事実上学院の教職から隠退されることになった。齡正に七十五才二ヶ月、此の世の生涯の全部は文字通り明治学院のために捧げ尽されたものである。

学院の濫觴たる築地時代から幾十年を経て大正十年という歳を迎えるまで、隠然としてこの歴史を構成する根幹の一つは確かに此のインブリー博士であつた。列記してみるなら

博士は千八百四十五年一月北米合衆国ニュージャージーに生れた。祖先は英國人で代々牧師であり博士はその十代目に相当していた。プリンストン大学及び神学校で最初は史学及びヘブライ語を研究し、後は新約に関する諸科を研鑽した。千八百七十年二十五才にして卒業後五ケ年間、牧会に従事していたが、千八百七十六年（明治九年）プレスビテリアン外国伝道局よりの派遣によつて日本に渡來し、大いに公会及び長老教会の合同運動に奔走するところがあつた。明治四十二年勲四等に叙せられ、余生はますます静幽な境に身を処されていたが前述の如く大正十年に名誉教授となられ、翌十一年の秋、故国なる令息の許に歸られた。《氏は一九二八年（昭和三年）八月四日逝去された。》

オルトマンズ博士の引退 大正十五年三月神学部卒業生のために記念晩餐会を司られたのを最後としてオルトマンズ博士は学院神学部永年の教授職を辞任引退せられることとなつた。博士は井深総理辞任以後一ケ年間の総理事務取扱として学院最高の職権を握られたことのある功勞者である。博士の功績の重なるものは蘊蓄の豊富なヘブライ語ギリシヤ語並びに旧約聖書に関する知識を以てよく学生を指導せられたことに存するが、又一方学院の理事また理事長として経営に当られたこともありその貢献は大きい。（氏は一九三九年《昭和十四年》十一月東京で永眠され学院葬を以て瑞聖寺に葬られた。）

田川総理の就任

大正九年三月の理事会で井深氏が辞意を表明してから理事会は慎重に後任の詮衡を進め多田素氏、長尾半平氏等が候補に挙げられたが不調に終り大正十年も暮れてオルトマンズ氏の総理事務取扱の任期も満了となつた。そこで自然に当事の理事長田川氏の双肩に学院管理の實際上の責任がかかる事となり、理事会も正式に之を依頼した。この間に大正十一年の第二次土地移譲十二年の大震災、十三年の第二回同盟休校、高等学校々舎（井深ホール）建築問題等が起り氏の身边は多端であつた。一方後任総理詮衡は依然として解決せず遂に理事会は田川氏に対し更に一層の奮起を願つて正式の総理就任を要請するに至り田川氏は之を承諾して十四年五月二十日大講堂に於て就任式が行われた。

八 学院創立五十年記念式

諸計画

昭和二年十一月三日は学院創立五十年に当るので、その記念諸計画が、新総理田川氏を中心に慎重な準備の下に行われ次の二つが可決された。

一つは明治学院五十年史を英邦兩文で編述発刊する事、今一つは学院の記念拡張に関する調査をなす事であつた。この歴史編述の中、邦文は鷺山弟三郎氏、英文はオルトマンズ氏が執筆の任に当る事となつた。

五十年記念会 祝賀の催しは十一月二日より五日まで引続き行われた。二日の夕は文芸会で、講堂に於て演説、演劇、英語劇があり、三日午前八時より校庭で行われた陸上運動会は、非常な人出で盛んな賑いであつた。同夜は六時より講堂で記念講演会があり、井深名誉総理は「創立時代の回顧」オルトマンス博士は「学院とミツシヨンの関係」高師教授文学士石川林四郎氏は「回顧と希望」東京中央職業紹介事務局長遊佐敏彦氏は「新時代の職業意識」理事長多田牧師は「人生の展望」著作家沖野岩三郎氏は「五十銭銀貨の行方」と題して、夫々有益な講演があり、四日は午前八時より二回に別ちて職員生徒の記念式があつた。

尙神学部に於ては、特に記念神学講演会を公開し、左の時日場所に於て八名の講師が、各々有益なる講演を行つた。

十一月十二日（土）十三日（日）午後二時より角筈神学部に於て、講演者ライシヤワ
ー、郷司慥爾、栗原久雄、都留仙次の四氏。

十九日（土）二十日（日）午後七時より、芝教会に於て、講演者、川添万寿得、中山昌
樹、村田四郎、桑田秀延の四氏。

この他武道、運動の競技会、映画音楽、同窓会の記念晚餐会、全国学生雄弁大会等があ

り夫々に仲々の盛会であつた。

神学部分離 大正十三年四月学院神学部は淀橋角筈の東京女子大学跡に移転したが昭和五年、日本神学校の設立に伴い我が学院から分離した。これは田川総理時代に於ける一つの大きな出来事であつた。移転の計画は、白金の地が他の学部拡張によつて漸く狭隘を告ぐるに至つたためと、当時頻りに問題とせられつつあつた学院神学部と東京神学社との合併を容易ならしめん為の意図によつて進められたものであつたがこの計画の途中で合併問題は一時中止の状態になり、理由の一つは消滅して居た。その後東京神学社との合併の話が軌道に乗り昭和五年三月、遂に二校合流して日本神学校を設立する事となつたものである。校長川添万寿得氏。

九 高等学部の進展

諸資格の獲得 田川氏が総理に就任した直後の大正十四年四月、「高等学部商業科卒業生は商業及び簿記の二科目につき中等教員無試験検定の取扱を受く」る事となり、同年八月には「高等学部は文部省令高等試験令に依り高等学校高等科もしくは大学予科と同等以上と認定」された。この事は既に述べた所であるが更に昭和二年九月には「高等商業科は

計理士法により大正十二年以後の卒業生につき無試験計理士登録の資格を認められる」ことになり、昭和五年四月には「高等学部英文科卒業生は英語中等教員無試験検定の取扱を受く」る資格が与えられた。

教員検定試験は教育界に於ける一つの登竜門で、之を突破するは容易ならざる難事である。この為相當の学力を持ちながら、数度の試験に失敗して遂には勤め先なる学校に対して面目を失し折角興味を持つて励げんで来た教育界を退かねばならぬ羽目に陥り、或は終生無資格たる境遇に甘んじなければならぬ不遇な者も少くない。されば無試験検定の有無は学校の内容を示す一つの目安で有り、大正十四年英文科の修業年限を一年延長して四年としたのは之に備えるためであつた。数年ならずしてその目的を達したのは真に慶賀すべき一大発展であつた。

高等商業部の独立と石橋部長 石橋近三氏は高等学部に商業科が新設された大正七年の十月から同科に教鞭をとり大正八年主任に就任、高等学部長の都留氏に協力して同科のために尽瘁しその発展は氏に負う所大であつた。昭和三年商業科が高等商業部と改称して独立することとなつたが之も氏の熱心な努力の結果で、氏は引続き部長の地位にあり益々從横の活躍をつづけた。

昭和六年同部及び高等学部に一ヶ年の研究科が設けられ、昭和十年四月には同部に二部（夜間）が新設された。青年の向学心は年と共に高まりつつあつて、夜間を勉学に充てんとする勤勞青年にとつてこの施設は誠に有意義なものであつた。

高等商業部同窓会 高等商業部の隆盛に伴い石橋氏を中心に高等商業部のみの同窓会が、全明治学院同窓会以外に催され、次第に高等商業部卒業生は全学院同窓会から遠ざかり、高商部の同窓会は益々盛となつて遂には独自の存在たらしめるかの如く見らるるに至つた。

同窓会は事態を憂慮し、又高商部出身者の中からも諸先輩の指導連絡を自ら断ち切るが如き独自の同窓会を作らんと企てる等は、以つての外の愚挙であるとの意見が現われ、果は石橋氏の責任を云々する者も出るに至つた。その後穩便派の説に従い、同窓会は元の姿を取り戻したが、昭和七年十月以来永年に亘つてその経営に身も心も捧げつくして奮闘した石橋氏は昭和十五年九月遂に同部を退くこととなつた。

社会事業科の設置 昭和三年高等学部に社会科が設けられ、同九年に至り社会事業科と改称された。学院の心臓とも云うべき神学部が、発展の爲とは云え昭和五年学院から分離したことはある意味では残念な事に違いない。この社会事業科は学院の基督教精神を継承

する所の隣人愛実践の闘士養成を目的とするもので、神学部無き後は、基督敎学校たる学院の面目と本領を發揮する最も特色ある科となつた。

十 田川總理（学院長）の退陣

祖師谷移転問題 田川大吉郎氏が總理の職に在つたのは大正十四年一月から昭和十年十二月までの滿十一年でこの間高等学部中学部共に一路發展の途上にあり、敷地、校舎、禮拜堂共に狹隘を告げ、予て学院がその買収を熱心に希望していた隣接の海軍墓地も交渉の余地なき有様で、最早やこのままでは如何にしても白金に安閑として止まるわけに行かぬことは誰しも考える所であつた。さればと云つて此の由緒ある白金を直に他に替えようとは之また決心のつき兼ねる事で、ただに感情の上からのみならず、都心を遠く離れて果して入学者を現在の如く集め得るや否や、之は経営上の由々しき問題でもあるので怪々に取扱わるべき事ではなかつた。

田川氏は種々考慮の末、移転の不可避なるを信じ、大決心を以て殆んど独断で祖師ヶ谷に三万坪の候補地を見出し、之こそ我が学院發展の地と大いに自信を得、土地の人々にも交渉して大体承諾の見通しの下に理事会に諮つた。理事会は前述のような理由で難色を示

し、且つ白金の地価も田川氏が希望する百万円は困難であろうとの予想が、之を躊躇せしめる大きな理由となつた。理事会の賛成を確信して既に相当話を進めて居た田川氏は、意外なる挫折に大いに驚き且つ失望して遂には辞意を洩らすに至つた。その後祖師ヶ谷の土地仲介人達は田川氏の約束不履行を責めて損害賠償を要求し、氏を困惑せしめつつあるとの噂があつた。

当時学院中学部では五十五才停年の問題で都留部長と教員の間に感情の齟齬を来して居たが之が生徒に反映したものであろうか、或は他の理由によるものか生徒の間に動揺が起り同盟休校にまで発展した。しかし此の事件は田川氏の尽力で大事に至らず間もなく解決した。都留部長と教員間の問題は田川氏の提案で六名よりなる教務委員会が中学部の事務を取り扱うことになつたが、暫くにして教務委員会も解散し、新たに、渡辺教務、大西庶務、唐沢訓育の三主任が任命され、都留氏は田川氏の後をうけた矢野学院長就任後まもない昭和十四年九月七日部長を辞した。

第六章 戦時下の学院

一 六十年記念式

田川氏辞職の後は神学博士ウイリス・デー・ホキエ氏が学院長事務取扱に就任した。昭和六年の満州事変以来日支間の雲行はいよいよ慌しくこの頃は非常時とよばれ昭和十二年四月文部省は「国体の本義」を全国の学校に配布した。七月には蘆溝橋に於いて日華両軍が衝突して日華事変が勃発、早期終熄を望む国民の悲願に拘りなく戦況は拡大の一途を辿った。

十一月日独伊防共協定調印

十二月十三日南京陥落、十五日には全国に祝賀の催しがあり昼は旗行列、夜は提灯行列で日本中がわき立ち学院も之に参加したが東京では死傷者を出すほどの騒ぎであつた。

事変下の式典

昭和十二年十一月三日、我学院は創立六十周年を迎え時局下簡素ながら厳粛且つ親しみのある祝賀式典を挙行した。時恰も日華時変直後で、式典の数日後には日独伊防共協定が結ばれると言うあわただしい時であつたが、其日の式典の模様は誠に和やかで当時の記録掛の諸氏によつて目に見えるように美しく描かれて居る。茲に抜萃再録する。

創立六十周年記念式及び校歌碑除幕式

昭和十二年十一月三日、明治節の奉賀式に続き午前九時三十分大講堂に於て、わが明治学院創立六十周年記念式が院長事務取扱ウイリス・ヂー・ホキエ博士司式の下に厳粛且つ盛大に挙行せられた。此日講壇には高く大国旗が交叉せられ、両側に置かれた棕桐竹の葉の緑も色濃く、また今を盛りと咲き誇る白菊も一入の趣を添えていた。

壇上には名誉総理井深梶之助博士を中央に理事長多田素氏、理事富田満氏、同鈴木春氏、校歌碑建設委員長植木万里氏、司式者ホキエ博士着席

講壇に向つて左側には、この佳き日に十五年以上勤続表彰の榮譽を担う教職員十五名（二名欠席）胸に赤色のマークをつけて居並び、右側には来賓及び教職員列席、而して階下には高等学部生及び高等商業部生、階上には中学部生が堂に満ちて列席した。

式後、校歌碑除幕式が引続き講堂で行われ、更に校庭に於て除幕があつた。この時幸にも雨も霽れ、校歌碑建設委員、来賓並びに学院理事者、教職員生徒一同校歌碑の前に並ぶ、作詞者島崎藤村氏に依つて除幕が行われる筈であつたが、同氏微恙の爲め令息翁助氏及び戸川秋骨氏によつて除幕された。

二 時局への協力

昭和十三年、戦争時いよいよ濃厚となり、三月には国家総動員法案が成立した。

兵器献納 昭和十四年三月、学院はかねて払下げを受けて居た兵器を軍へ献納した。

献納した兵器 高等学部、銃三五丁（三〇丁）銃剣三五本（五本）

中学部、銃一一〇丁（一〇三）銃剣一二五本（八八本）（）内は学院に残した数、

同年五月二十二日、天皇陛下は、宮城外苑に於て全国学生々徒代表及び教職員三万五千の分列行進を御親閲になり、その直後文部大臣を宮中に召され「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」を御下賜になり、事変下に於ける青少年学徒の覚悟と本分を示された。全国各学校は之を奉戴、全力を上げて之に副わんことを期した。

富田新理事長就任 昭和十三年三月多田理事長の後を受けて理事の富田満氏が理事長に

就任した。氏は明治四十年学院神学部卒業、芝教会の牧師として令名あり、長く学院の理事であつたが多田素氏の後を受けて難局に当る事となつた。

矢野氏就任 昭和十四年九月理事会は前彦根高等商業学校長正四位勲二等矢野貫城氏を第四代学院院长として迎えた。時恰も第二次世界大戦勃発直後で日本は国力逼迫の時代であり、又帝国主義的色彩の濃厚な時期でもあつた。かかる風潮は自由主義、平等主義に立つ基督教諸学校にとつては決して順風とは云えないのであるが時局への協力は避け得ない所であつた。

官学は学問の自由を叫びつつ進んで来てはいるが大体に於て国家と直結し、其の運営には何らの支障もなく繁栄を続けたが、基督教学校にとつてはこの形勢は容易ならぬもので、恰も急流に竿さして峡谷を下るに似るものがあつた。絶壁に当つて碎けてちつてはならず、押し流す波には乗らねばならず、当事者に於て並々ならぬ苦心があつたことを思わなければならない。

三 憲法及び職制の改正

矢野氏が就任して間もない、翌昭和十五年四月、明治学院憲法及び職制が改正され、新

たに明治学院学制及び職制が定めれた。

明治学院学制及び職制

第一章 組織

第一条 本学院に総務部並に高等学部、高等商業部及び中学部の三部を置く。

第二条 総務部は学院全般に亘り其の事務を総轄す。

第三条 高等学部は之を英文科、社会事業科及び東亜科の三部に分ち高等商業部に第二部を置く。

各部の学則は別に之を定む。

第二章 職員及び其の職務

第四条 本学院は左の職員を置く

一、学院長

二、幹事

三、部長

四、教員

五、書記

第五條 学院長は学院を統轄す。

第六條 学院長一時不在のとき又は病氣其の他の事情により其の職務を行うことを得ざる場合は部長中の一名をして学院長事務を代理せしむ。

第七條 幹事は学院長を補佐して第二条の事務を掌る。

第八條 部長は学院長の統轄のもとにありて当該部に於ける教育の責に任ず。

第九條 生徒の処分は学院長の裁決によるものとす。

第十條 教員は高等学部及び高等商業部に在りては教授及び助教授とし、中学部に在りては教諭とす。

各部には其の必要に応じ講師を置くことを得。

第十一條 教授、助教授及び教諭は各担任学科目の教授をなすの外、学院の教育方針に従い生徒訓育の責に任じ、其の生活指導に関し特に留意すべきものとす。

第十二條 講師は囑託せられたる学科目の教授をなす外生徒訓育に助力すべきものとす。書記は各所屬の事務を担当す。

第三章 教員会

第十三條 教員会は学院長又は部長の諮問機関として之を全学院教員会及び各部教員会の

二種に分つ。

第十四条 全学院教員会は学院長、部長、教授、助教授、教諭に会計、理事及び幹事を加えて之を構成し必要に応じて学院長之を召集す。

第十五条 各部教員会は高等学部及び高等商業部に在りては部長、教授及び助教授を以つて之を構成す。学院長及び幹事は職務上各職員会に出席す。

第十六条 各部教員会は学院長の承認を経て部長之を召集す。

附 則 本学制及び職制の改正は理事会の決議に依つて之をなすものとし昭和十五年四月一日より之を施行す。

因にこの制度は昭和十九年明治学院専門学校が設立された時一部変更された。即ち、

第三条は「専門学校ハ之ヲ経済科、経営科及東亜科ノ三科ニ分チ経済科ニ第二部ヲ置ク。専門学校及中学部ノ学則ハ別ニ之を定ム」と変更

「総務部」を「本部」に「高等学部、高等商業部」を「専門学校」に、又「昭和十五年四月一日より」を「昭和十九年六月三日より」と改められた。

幹事の制度 この制度は松村介石氏が築地大学校時代に幹事たりしに始まり、服部綾雄、杉森此馬、熊野雄七の諸氏が継承した。大正元年熊野幹事が並通学部長と高等学部長

を兼任し井深総理が神学部長を兼任した時から廢されて居たが、昭和十三年復活し加藤七郎氏が就任。昭和十七年から杉本民三郎氏が之に代つたが昭和二十八年六月杉本氏は同窓会主事に転出、松本享氏が総主事に就任して幹事の職及び学院長秘書としてミツシヨン関係の仕事に携わる事となつた。松本氏は戦争中米国にあり日本人收容者のために米当局との間に立つてよく活動し、米国宣教師間にも多くの友人を得たが戦後母校である学院に來任、現在大学の發展に縦横の活躍を續けて居る。NHK英会話担当者でもある。

四 基督教諸学校の戦時色

昭和十五年四月、高等学部東亜科が新設され、十七年三月には高等学部社会事業科を厚生科と更めた。之等は皆学院の時局に適應せんとする一連の改革であつたと想像される。独り我が学院のみならず日本に於ける殆んどすべての基督教学校が祖国の難に当り悲愴なる覺悟を以て国家の方針に協力せんと決心していたことは次の一事にもよく現われている。

昭和十五年九月六日青山学院會議室に於て基督教学校の動向について次のような懇談会が行われた。集つたのは全国六十余のキリスト教々育同盟会加盟学校の校長で「新体制下

のキリスト教関係諸学校は如何に進むべきか」について審議を重ね、わが国キリスト教主義学校の校長、学部長、科長には全部日本人をあてること、学校経営主体は財団法人であること、財団法人理事長は日本人で、理事の過半数も日本人であること、各学校は外国教会より経済の独立を期すること等を始め新体制に即応し青少年学徒の教育、殊に精神教育に努力する積極方策を講ずること、並びに興亜教育に適當な具体的方策を樹立すること等を申合せた。」

当時はすでに文部省の通達に反く学校は閉鎖を命ぜられるほどに自由をうばわれ、思想言論の取締りが強化されていた時代である。個人の意志に関りなく、やがて軍隊に入り戦場に送らるべき運命の下にある多くの青少年を預かる基督教諸学校が、是等の青少年を恐るべき軍部の偏見から守る義務と責任を負っていた事は論をまたない。自由主義者として軍部の注目を浴びていた田川氏の後を受けたわが学院が基督教学校としての最後の一線を堅持しつつも、国家の方針に忠実ならんと努力した苦心は十分に察せられる。

全国基督教信徒大会 十月十七日神嘗祭を期して青山学院に於て紀元二六〇〇年奉祝全国キリスト教信徒大会が催され、この大会で聖公会以外のプロテスタント派は「合同の完成を期す」との宣言を発表した。これが今日の日本キリスト教団の発足である。わが学院

の富田理事長は終始重要な役割を果し、同団の代表となつた。

二六〇〇年記念式典 十一月十日、宮城外苑に於て、皇紀二六〇〇年記念式典が行われその壮嚴な有様が全国に放送され、国民は「み民われ」の感激を新たにした。学院では二六〇〇年記念事業として、かねて一部買収していた海軍墓地に大弓場と狭窄射撃場を新設した。

漆山新中学部長 昭和十六年七月都留氏が辞職した後しばらく中学部長は矢野氏が兼ねていたが、昭和十六年七月に至り理事会は前熊本県社会教育課長漆山清二氏を新部長として迎えた。

同氏は矢野氏の知己でその信任は非常に厚かつた。氏はなかなかの実行家で、生徒の健康に留意し毎朝々礼後生徒に乾布摩擦を行わしめ寒中も之を続行した。戦局が進むにつれて動員される生徒の世話監督にも手ぬかりなく、誠に時局にふさわしい指導者であつたが、其後氏が出動していた鉄工場の精神的指導者として其処に止まることとなり、終戦直前の昭和二十年五月十四日部長を辞したが、戦後幾何もなく地方で淋しく永眠された。

新部長高橋源次氏 漆山氏の辞職後同年六月二十五日新中学部長として高橋源次氏が来任した。矢野氏の前任校彦根高商の教授で、矢野氏とは深交ある間柄であつた。当時は既

に戦争の末期で東京は連日連夜米機の来襲になやまれ東京の全滅も目前に迫っていると
思われた時であつたから、氏の来任は余程決心のいることであつたと察せられる。

明治学院専門学校（昭和十九年二月臨時理事会の記録）

昨年十二月閣議決定トナレル「教育に関する戦時非常措置方策」に基き明治学院青山学
院、関東学院三校の当事者間に於いて監督官庁の了解のもとに左記の方法により統合を
行うことに意見の一致を見た。

一、青山学院高等商業部、同文学部並びに関東学院高等商業部を明治学院に統合す。

二、統合後の学科組織は経済科、経営科及び東亜科とす。而して三校高等商業学部及経
済科（青山夜間）は経済科に、厚生科は経営科に、東亜科及英文科並に文学部（青山）
は東亜科に統合す。但し現在英文科、英語科（青山）に在学する学生は東亜科に統合
せず卒業迄英文科として在学せしむ。

三、統合の時期は昭和十九年四月一日よりとす。但し現在の第二学年及第三学年（青山）
は九月卒業又は仮卒業するをもつて現在々学する学校に於て卒業せしむ。

其筋の指令と三学院の話し合いに依り以上の決議通り実行されたが此の時高等学部長中山
昌樹氏は病床にあり高等学部統合と殆んど時を同じゆうして逝去、専門学校長には高等商

業部長兼任の矢野氏が就任した。

しかし之は一時的のもので終戦と共に有名無実となつたが此のため現在の三神、笹尾、小田の三教授（青山）は其のまま学院に残ることとなつた。

五 戦況の推移

矢野氏が就任したのは昭和十四年九月であるがその直前の八月にはヨーロッパに於て第二次世界大戦が勃発している。

昭和十五年九月、日独伊三国同盟成立、十月大政翼賛会結成、十一月紀元二六〇〇年式典挙行。

昭和十六年四月、言論出版等臨時取締令公布、十二月八日には遂に太平洋戦が勃発した。この朝早く国民はラジオの臨時ニュースに夢を破られた。

「帝国海軍は今八日未明西太平洋に於て米英軍と戦闘状態に入れり」

軍艦マーチの雄壮な調べを伴奏に放送されるハワイ真珠湾の大戦果は素晴しかった。海軍航空隊の活躍はいよいよ目覚しくフリッツピン空襲、マレー沖海戦と次々に大戦果が発表され国民を感激せしめた。

昭和十九年七月サイパン島が陥落し全員玉碎が発表された。之により東京の空襲は必至となつたので家屋の密集せる地域に強制疎開の命が下り同時に学童集団疎開実施要綱が発表された。十一月二十四日正午を少し過ぐる頃サイパン陥落後最初の東京空襲があり七十の敵機により都内各所に焼夷弾が投下された。十二月に入り空襲は益々はげしく連日夜となく昼となく警報が発令され人々は安き心もなかつた。このころは学生々徒のみならず学院の教員の中からも多くの疎開者を出し教室も職員室も櫛の歯の欠けたようになわびしさが感じられた。

昭和二十年 いよいよ敗戦の年である。空襲は日本全土に亘つて隅なく行われ、銃後は今や全く戦場と化した。三月十日下午町方面に大空襲があり、大火災が起り夥しい死傷者を出した。

この頃学院は生徒及び教職員にて学徒隊を組織した。

其の後も連日米機の編隊に見舞われたが此のころはもはや之にいとむ我が飛行機の影響も見えず只敵機の乱舞にまかせるのみであつた。

五月二十五日の空襲は全くすさまじく、学院も危険にさらされたが宿直の防護団一同防火につとめ事無きを得た。しかし教員や学生の中からは多くの罹災者を出した。

七月十日の空襲は開戦以来最大のもので残存せる軍事施設が殆んど壊滅に帰した。同月二十六日、敵は空から降伏勧告のびらを撒きちらしたが政府は之を拒否した。

原子爆弾投下 記憶すべき八月六日、一個の高性能爆弾は広島市に投下され一瞬にして死者七万、傷者十三万と言う世紀の惨劇を展開した。つづいて九日には同じ災禍が長崎市に繰返され死者二万傷者五万を数えた。之が恐るべき新兵器原子爆弾の出現であつた。

八月十五日正午、天皇陛下は御自ら詔書を朗読遊ばされ大東亜戦争の終了を仰せ出だされた。今次戦争に原子爆弾は使用されまいと言うのが日本側の観測だつたそうであるが、意外に早かつた其の出現は遂に日本に止めをさし、日本はポツダム宣言を受諾し無条件降服をしたのであつた。(ドイツは之より先五月七日無条件降服)

六 学院の勤労働員

昭和十七年七月明治学院特設防護団が組織され、同十一月には明治学院国民貯蓄組合規約が定められ、それぞれ、戦時下に於ける役割の達成に励んでいたが、十八年六月に至り学徒動員が確立し、文部省、都を通じてなされる軍の命令によつて動員される事になつた。

明治学院専門学校学徒出勤人員

出勤人員 経済科三年 一〇九、二年 一六二、経営科三年 六、二年

四、東亜科三年 一六、二年 六九、

明治学院専門学校勤労奉仕関係

(加藤七郎氏提供に依る)

一、前期(勤労奉仕の時期)

(イ)出勤先 日本通運株式会社 短期間通勤、仕事の種類(品川駅関係の積荷作業)

(ロ)出勤先 栃木県大谷町 短期間宿泊、仕事の種類、大谷石の運搬作業

二、中期(強化された勤労奉仕の時期)

(イ)出勤先 東京シャーリング株式会社、通勤約一ヶ月

他事の種類 主として旋盤作業

(ロ)出勤先 月本特殊鋼材 通勤約一ヶ月

仕事の種類 主として赤熱した鋼材を扱う煉鉄作業

(ハ)出勤先 千葉県 成田及佐倉方面、農家に分宿

仕事の種類 食糧増産の為一二月の寒い季節であつたが水中に脚を没して水田用の暗渠

工作（全学生半数交替にて各一ヶ月で完成、水田を掘り、土管を埋る工事で、甚々しき寒冷作業であつたが食料の豊富なのが何よりであつた。

三、後期（学徒動員の時期）

全学徒参加で此時期にはもう授業が出来なくなつた。学生の一部は防空要員として学内に残る。教師も全員交替にて宿泊参加をしたり防空上の要務についた。

出動先

(イ)三菱重工業株式会社（通称横浜ドック）会社の寮に宿泊、此処より徒歩約四十分の現場に通う、最初は受け入れの態勢が不十分で交渉のため教師も学生も共に苦勞する、実に困難を極めた。

仕事の種類、庶務、旋盤、弾痕のある船が修理の為ドックに入っている姿も見受けられたり。場所柄、空襲退避をすることも屢々であつた。

(ロ)出動先 陸軍糧秣廠

最初は芝浦や、群馬県館林に遣派されたがやがて埼玉県の児玉、飯能、浦和の三ヶ所に限定された。

仕事の種類 資材運搬、梱包、輸送等。

中学の勤労働員の模様 大略左表の通りである。

宇都宮製作所	五年生	牟田鑄工所品川工場	四年生と二年生
荏原製作所	五年生と三年生	日本通運汐留駅	四年生
東京ラジエター	四年生と二年生	不二越製作所	三年生
牟田鑄工所蒲田工場	四年生	宮田製作所	三年生と二年生
中学部関係勤労作業メモの一部			

(矢作氏提供による)

昭和十八年

一、臨時に蒲田方面疎開工事手伝に出動。

一、丸通・荏原製作所、宮田製作所に生徒動員される。

昭和十九年

一、青物横町のラジエター製作所に生徒動員される。

昭和二十年

一、三月徹夜作業中大空襲で蒲田全焼宮田だけは損害軽微、生徒も小数いたが無事。

一、三年生、空襲で焼失した銀座三越支店、松坂屋の焼跡清掃に動員される。

一、宮田に動員されていた生徒が引き上げ蒲田の日立航空機工場へ改めて動員される。(八月二日入所式)

一、八月十一日、日立出動生徒太浜雄君、津田沼への帰途空襲にあい電車内にて負傷死亡。

一、八月十五日正午詔書放送、午後二時で仕事を打切り工場内清掃

一、八月二十二日(水)太浜君の告別式あり、部長並びに矢作氏、生徒二名出席

学院校舎の一部転用 昭和十九年十月学院は中学部校舎の一部を中央無線電信講習所の使用に供した。

又同年同月専門学校の一号館を旭部隊石田隊の使用に供したが、終戦と共に解約、双方共愴惶として引上げた。

七 今次戦争の応召者其の他

応召(入営、応徴)せる教職員

伊藤 博氏(戦死)(専門)

石堀 哲夫氏(中学)

相沢 徳治氏（戦死）（専門）

永井 武氏（中学）

赤沼 文雄氏（中学）

伊沢 善作氏（中学）

森野 静一氏（中学）

黒木 彰一氏（戦死）（中学）

関根文之助氏（中学）

大山正春氏（専門）

田代 栄二氏（事務）

飯田 岡治氏（本部事務）

久保内元之助氏（中学）

関口 近二氏（中学）

吉田 喜一氏（中学）

矢作弥寿久氏（中学）

安藤達四郎（中学戦死）

学院関係戦災者（届出のありしもの）

教職員

二五名、死亡一名

専門学校生

二二二名、死亡四名、四回罹災一名、二回罹災

一四名

中学部生徒

二七八名、死亡一名、

同窓の戦（病）死者、（分明せるもの）

吉田 長俊氏

昭九高商卒

杉田 光雄氏

昭十三中卒

綾部 智信氏	昭八中卒	江沢 勇吉氏	昭十三中卒
宮坂 定雄氏	昭九中卒	小尾 一氏	昭十四中卒
渋谷 慎三氏	昭八中卒	只野 信茂氏	昭十二中卒
木下 諭氏	昭十中卒	松岡 正久氏	昭八中卒
堀内 弘氏	昭十四高商	山口 文人氏	昭十三高商卒
河村宏之助氏	昭十五高商卒	松原喜久雄氏	昭十七中卒
長島 一雄氏	昭六高商卒	久保 徳也氏	昭十五高商卒
篠崎 務氏	昭十五高等卒	及川健次郎氏	昭十五高商卒
楠 正満氏	昭九中卒	小島 太郎氏	昭十五高商卒
諸熊 子芳氏	昭十一高商卒	熊谷 健吉氏	昭十六高商卒
岡部加寿恵氏	昭十三中卒	須永益太郎氏	昭十六高商卒
深田 正男氏	昭十五高商卒	村越 昇氏	昭十六高商卒
中村 豊氏	昭十高等卒	坂井 一郎氏	昭十六高商等卒
中島 嘉登氏	昭十一高等卒	栗原 広作氏	昭十六高卒
鈴木 義男氏	昭八高等卒	野村 一夫氏	昭十六高商卒

今井良三郎氏 昭八高等卒 平岩 栄一氏 昭二中卒
森下 保氏 昭八高商卒 宮野 正治氏 昭五中卒
藤井 俊雄氏 昭七高商卒 岩井 実氏 昭七中卒
深谷 博雄氏 昭九高商卒 佐野 進氏 昭七中卒
戦死者戦災死者の確実な数を得る事は困難であるが分明せる人々のみでも五十名を数えて居る。

ここに連なる戦死者諸氏の名をを読んだだけでも在学当時の元氣な姿が思い出されて涙を禁じ得ないものがある。まして之等の人々を子とし父とし夫とし兄弟として持つ人々の哀惜の念は如何ばかりであろうか。

茲に謹んで深く哀悼の意を表すると共に共に残された方々の上に神の恵みの豊ならんことを祈つて止まない。

八 学院功労者の永眠（事変以降）

井深梶之助氏 昭和十五年六月二十四日、明治学院第二代総理、井深梶之助氏は白金三光町の自宅に於て八十七才の高令を以て永眠された。葬儀は二十六日学院大学大講堂に於

て学院葬を以て盛大に執行せられた。

この目歌われた讃美歌の一つ「わづらわしき世を」は、氏の恩師ブラウン博士母堂の作詞で、氏が生前最も愛踊されたものであつた。

大正十三年三月、氏が学院の教職を辞せられた時、理事会は鄭重な感謝決議文を氏に贈つた。氏の生前の功勞を偲ぶよすがとして茲に全文を掲載する。

井深博士ニ送ル感謝決議文

神学博士井深梶之助氏ハ西暦千八百九十一年明治学院総理トナラレタガ其以前ニ副総理
タラレシコト已ニ五年、西暦千九百三十一年三月ニ至リ総理ヲ辞セラルル迄能ク精勵セラ
レタリ。博士ハ当初ヨリ神学ヲ教授シ神学部長ノ位地ヲ兼掌セラレタルノミナラズ更ニ設
立者トシテモ学院ヲ代表セラレタリ。惟フニ博士ノ声名ハ永ク学院ニ不朽ナルベシ。西暦
千九百二十四年三月博士ガ神学部長並ニ教授トシテノ辞表ヲ提出セラルルヤ、理事会ハ之
ヲ受容スルト同時ニ現ニ名誉総理タルニ加フルニ名誉教授ノ称号ヲ以テシ、学院トノ干係
ヲ持続セラレン事ヲ希望スルニ決シタリ。

蓋シ博士ハ崇高ナル品性ト該博ナル学識ヲ以テ多年変遷アリタル職務ノ間ニ、忠誠ニシ
テ渝ル事ナク能ク才幹ヲ發揮セラレ、学院ヲ愛スル家ノ如ク、ソノ愛情ト思想ヲ傾倒セラ

レ、且ツ日本基督教青年会ニ、日曜学校協会ニ対スル顯著ナル奉仕ニヨリ学院ニモ光彩ヲ添エラレ加之日本基督教会ノ進歩發展ニ対シテモ貢獻セラレタル所殊ニ尠シトセズ、理事会ハ之等ノ事跡ヲ併セ録シ以テ厚ク博士ヲ讃エント欲スルモノナリ。

井深博士ノ明治学院ニ於ケルガ如ク、一ノ学園ノ創始ヨリ、發展ニ到ルマデ一身ヲ以テ終始セラレタル者ハ真ニ無雙ナルバシ。理事会ハ博士ガ今回学院ノ責務ヲ離レラレタル後モ長寿ヲ全フシ学院ガ弥々盛ンニ發展シ行ク将来ヲ樂マルル機会ノ久シカラシム事ヲ切望ス。

西暦千九百二十四年三月五日 明治学院理事会

多田素氏の永眠 昭和十六年四月十日前明治学院理事長多田素氏が永眠された。氏は学院神学部明治二十四年の卒業生で、日本基督教会では植村正久氏の牧せられた富士見町教会に次ぐ高知教会を育て上げた大先輩である。井深氏辞職の後明治学院の総理に擬せられたが氏は之を受けなかつた。生涯独身でひたすら高知教会の為に尽瘁されたことは有名である。

笹尾糸太郎氏の永眠 元学院高等学部長笹尾糸太郎氏は昭和十六年一月二十九日永眠された。氏は学院普通学部を明治二十五年非常な好成绩で卒業、その後北米オーバン神学校

に遊學、更に紐育、伯林、ハレ、ボン等の學校に学び明治三十六年ボン大學で哲學博士の稱号を得て歸朝。仙台東北學院教授を経て昭和二年學院高等學部長に就任、同九年十月まで其の職にあり角筈の神學部に於ても獨逸語を講じ學院のために尽瘁された。氏はまた明治二十二年、三年頃學院に存在した清教徒的硬骨黨の代表者の一人でもあつた。

中山昌樹氏 高等學部長、中山昌樹氏は昭和十九年四月二日永眠され、盛大な校葬が営まれた。氏は學院神學部明治四十三年の卒業生で、大正八年春學院に招かれ、村田四郎氏が明治學院牧師から熊野氏の後を受けて中學部長に轉じた時、代つて學院教會の牧師となつた。その後種々の困難が生じ、大正十二年二月の總會に於て協議の結果遂に解散と決定學院教會は五年の歴史を残して止むこととなつたが、此の氣勢の上らぬ教會を四年間も牧した氏の勞は誠に多とすべきであつた。十三年四月高等學部文藝科の主任となり、昭和
年高等學部長に就任同學部のために非常な努力をして居られた。

氏は昭和十九年一月から病氣療養中であつたが當時は戦況いよいよ利あらず我が方の敗色覆い難く、國民は勤勞に勵り立てられ乍ら不安焦燥の中に日を過していた時で、氏の欠勤を知る者もその病床を見舞うは容易でなかつた。氏は高等學部長の要職にあり戦事下その事務は煩雜を極め、純粹な學者肌のしかも幾分蒲柳の質であつた氏は此の環境の中にあ

つていたく心身を害われていた。友人達は之を憂えその負担の軽減せられん事を希つていたが、未だ具体策が講ぜられぬ中に早くも病にたおれ遂に起たなかつた。享年五十七才。氏はダンテの研究家として天下に知られ「新生」から「神曲」「帝政論」「俗語篇」「饗宴」までを完訳。次にカルビンの研究に及んで「基督教綱要」(四百字詰原稿用紙五千枚)の、ラテン語からの訳を完了、更にアウグスチヌスの大著「神の国」(原稿用紙四千枚)を完訳した。

非常な読書家でその蔵書は氏の逝去後学院の図書館が譲り受けた。学院戦後の発展を見るにつけても氏の早世は限りなく惜しまれる。

幕末の頃朝廷と幕府の争いに英仏が介入し事態が紛糾せんとした時、アメリカの斡旋によつて事なきを得た話は歴史に明らかな所であるが、英公使パークス氏と親交のあつたヘボン博士の陰の力が大いに興つて居たことについては知る人が少い。

明治三十七年日露の開戦に際しインブリー氏が、日本の真意を海外に訴えんとする桂首相を援けて、その目的を達せしめた話と共に記憶さるべき功績である。

第七章 戦後の躍進

一 戦後十二年間の変遷概観

昭和三十年 八月十五日終戦の日を迎えてから現在までは僅か十二年間に過ぎないが、この間日本に於ては急激な変化と改革が行われ政治的にも経済的にも民主主義の方向に向つて大きな転換をなしつつある。

日本の動き 先ずこの十二年間の日本及び日本に関係深い海外の出来事を列挙する。

二十年九月二日横浜沖米艦ミゾリー号上で降伏の調印が行われた。

十月、兵役法廃止 十二月、男女共学制決定

昭和二十一年 二月公職追放令公布

七月教員適格審査が始まり学院からは軍人を含めて四人の追放者を出した。十一月、日本国憲法公布、実施は翌二十二年五月五日

十二月、六三三制新教育体制決定

昭和二十二年一月一日天皇陛下は神格否定宣言を発せられた。天皇現人神の問題では基督教徒は常に苦杯をなめて来た。日本人の迷濛の一つは之によつて明快に啓かれた。

同年三月教育基本法、学校教育法公布

昭和十二年二月、大学受験者に進学適性検査を課する制度が定められた。

五月夏時間が採用された。

昭和二十四年、二月十一日紀元節が廃止された。十一月湯川博士ノーベル賞受賞。

昭和二十五年、二月私立学校法、国会を通過、二月大学進学適性検査を施行、六月朝鮮動乱起る。十一月教育委員選舉行わる。

昭和二十六年、五月児童憲章制定、五月貞明皇太后逝去、九月対日講和条約、日米安全保障条約調印

昭和二十八年、九月現代語訳聖書刊行、都留学院長はその委員長であつた。九月アイゼンハワー大統領就任、七月朝鮮休戦協定調印

昭和二十九年三月、ビキニ水爆被災、六月自衛隊発足

昭和三十二年、八月茨城県東海村の原子炉完成、十月ソ連人工衛星打揚に成功、同月地

球測年参加の宗谷本観測に出航

二 戦後の変遷と矢野氏の辞任

戦後初の授業、昭和二十年九月、戦後初の授業は其の筋の達しにより修身、地理、歴史の授業は停止され戦前の教科書は用いぬ事となつたので手帳、文具等の欠乏と相俟つて不自由な授業が行はれた。服装も貧弱不揃い、校舎も荒れ果て誠に気の毒であつたが戦争の終つた気安さはある疎開して居た人々も除々に復帰した。

昭和二十一年四月新学期 中学校に対し戦災を受けぬ学校は出来れば受験者全部を收容するようにとの指令があり入学試験はごく簡単に行つた。入学者三百三名。

専門学校の改組と発展 二十年十二月経済科卒業者に対し中学校並びに高等女学校実業科のうち商業、東亜科南方分科（英語を第一外国語とするもの）卒業者に対し外国語のうち英語科教員無試験検定取扱継続の件が承認された。

翌二十一年四月、東亜科を文科と改称して南方分科を英文科、大陸分科を華文科、経営科を社会科、経済科第二部を商経科と改称し新たに夜間に英語科を置いた。英語科は英語につき無試験検定の取扱を継承する事となつた。

五月華文科に対し外国語科の中支那語につき、昭和二十年度九月以後の卒業者に限り中学校、高等女学校教員検定規定第七条第二号の取扱をなすの件が許可された。

昭和二十二年四月の新学期 いよいよこの年から、六三三制の新教育制度が布かれた。

旧制の公立中学校や高等女学校は新制高等学校となるため新入生を収容しなかつた上に公立中学校の新設は未だ捗らず有資格教員の補充も急には間に合わなかつた。私立はたいいてい中学、高等学校併設で教員の補充も心配なく一時両者の間に大きな差が生じた。このため入学志願者は私立に集り学院に於ても多数の入学志願者があり優秀な生徒の入学を見た。

この情勢は三年位続いたが公立中学が漸時設立されやがて旧に復した。男女共学については当事者、教員、及び父兄が協議した結果、時期尙早の意見が多かつた為不採用と決定した。

又学院は中、高分離の準備が整はず、この新学期は中学部を中学校と改称したのみであつた。

英語学校新設 戦後急激に英語熱が盛になり各所に英語学校が簇出したが学院に於ては二十二年六月男女共学の「明治学院英語学校」を開設、校長には高橋源次氏が就任し学院

各部の教師が授業に當つた。相当盛んであつたが、主に經濟的理由から二十六年三月閉鎖された。

矢野氏の辭任 昭和二十二年八月矢野氏は学院長の職を辭し、富田満氏が院長事務取扱に就任した。矢野氏の就任は昭和十四年九月で、日本が一路戦争に向つて突進していた時であつた。氏が在任した八年間の中半分の四年は大平洋戦争のさ中であり、日本中の学校が「青少年学徒に賜りたる勅語」を奉戴して戦争に協力した事は言うまでもない。敗戦によつて民主々義の世になり全体主義時代の指導者が公職を追放される時代となつた今日、旧体制の下に於て最もよき学院長たりし氏がそのまま長く止まるには不適當な情勢となつて行つたのは止むを得ないことであつた。

三 創立七十年記念式

昭和二十二年十一月三日は学院創立七十年に當るのでかねて矢野院長を中心に多彩な催しが企てられて居たが、同年八年矢野氏が学院を去つたので、理事長の富田氏が矢野氏に代つて中央委員長となり、高橋源次、斉藤茂両中央委員と共に各部の委員と相呼応して準備は着々進められ一日から十日間盛んな祝賀が催された。

この記念週間中の最大の催物は、十一月三日正午から日比谷公会堂で行われた学院主催、文部省、ローマ字ひろめ会及び同胞援護会後援のヘボン博士記念会で、第一部の記念式に引続いて第二部、ラヂオドラマ学院演劇研究部員出演の「ヘボン先生」第三部音楽会があり仲々の盛会であつた。この記念会の諸準備には園部不二夫氏が骨を折られた。

この外学院構内各館で史料展、科学展、美術展、写真展、演劇、講演会、雄弁大会、校庭では体育大会、庭球大会、同窓会主催の東文楽人形浄溜璃其の他の催しがあり、三日には恩師達の眠る青山及び端聖寺に数十名の代表が墓参をした。

田川大吉郎氏永眠 元学院長田川大吉郎氏は昭和二十三年十月九日逝去された。

「元本学院々々長田川大吉郎翁は今春来健康を害し、牛込国立病院に入院加療中の処十月九日午前七時、肝臓硬変のため死去された。七十九才、告別式は十月十三日午後一時より信濃町教会に於いて執行され片山首相、森戸文相、尾崎行雄翁等の弔辞があり朝野の各界知名の人士多数参列盛儀であつた。

○…翁は長崎県の出身、明治以来代議士に当選すること七回、政界の古強者として知られ大隈内閣の司法参与官、尾崎東京市長の下に第一助役などに挙げられた。最近近衛内閣の対華政策批判のため禁固四年の刑に処せられ又軍部官憲の圧迫を辯じて中国に戦

時中を過し、終戦と共に帰国、衆議院議員に復活した。（明治学院新聞所載）

四 六・三・三制発足

村田新学院院长 昭和二十三年四月学院理事会は日本基督教教会教学部長村田四郎氏を矢野氏の後任として学院に迎えた。

氏は学院神学部を明治四十四年卒業、オーバーン神学校に研学帰朝後、大阪神学院教授、明治学院中学部長、日本神学校校長等を経て十九年九月日本基督教教会教学部長に就任。学院長になった後も教学部長を兼任する事になった。

新制中学校、高等学校の分離 新制中学校は昭和二十二年度発足したが、その年は学院では中学部を明治学院中学校と改称しただけであつた。二十三年四月は高等学校設置の年であつたがこの時も未だ準備の都合で中、高分離の運びに至らず、高橋源次氏が戦前からそのまま引き続き校長の地位にあつた。二十五年に至り、聖書担当の大川正氏が中学部長に決定し、高橋氏は大学へ転出した。昭和二十六年四月は、村田学院長の提唱による理想教育計画の第一年目として、中学は一学年をひと組四十人と言う少数の生徒にして三学級編成とし、専任教諭は中、高何れかの所属となし、その所属校で教える事になった。

第七章 戦後の躍進

分離後の生徒数

高等学校

昭和	一年	二年	三年	計
27年	273	271	264	808
28 //	277	268	258	793
29 //	267	263	272	802
30 //	314	236	252	802
31 //	341	297	228	877
32 //	378	314	287	979

中学校

昭和	一年	二年	三年	計
27年	183	170	152	505
28 //	184	171	132	481
29 //	180	184	168	532
30 //	174	184	179	537
31 //	173	172	181	526
32 //	194	176	179	549

而して教務庶務指導の三課が夫々不完全乍ら分離する事が出来た。その後も高等学校校長の人選が遅れ憂慮されて居たが、二十七年に至り日下一氏が校長に決定、中学部の校舎を二分して完全に分離し、四月から新発足の運びとなつた。

日下氏は大正十五年神学部卒業生でこの時宗教部長であつた。昭和二十八年山中湖畔に建てられ、学生のみならず学院関係者家族にも利用されて居る湖北寮は、氏の肝入りでシェフアー博士、PTA会長藤田日吉氏同副会長服部潔氏現同窓会長井上武衛門氏其他PTA有志の方々の熱心な努力に依り出来上つたものである。

高等学校

年度	授業料	生徒会費
昭23	220, —	15, —
24	650, —	40, —
25	650, —	40, —
26	800, —	100, —
27	800, —	100, —
28	1,100, —	100, —
29	1,200, —	100, —
30	1,200, —	100, —
31	1,200, —	100, —
32	1年 1,300, — 2,3年 1,200, —	100, —

中学校

年度	授業料	生徒会費
昭21	74, —	10, —
22	4~8月 70, — 9~3 140, —	10, —
23	4~8 200, — 9~3 400, —	15, —
24	650, —	30, —
25	650, —	40, —
26	4~8 650, — 9~3 800, —	40, —
27	800, —	100, —
28	1,100, —	100, —
29	1,200, —	100, —
30	1,200, —	100, —
31	1,200, —	100, —
32	1年 1,300, — 2,3年 1,200, —	100, —

戦後の物資欠乏は恐るべきインフレーションを招き社会の不安動揺は甚しかつたが年を追うて値上げとなつた学院の授業料はこの間の消息を如実に示して居る。

五 新制大学発足

昭和二十四年は我が学院に大学設立の認可が下りた記念すべき躍進の年であつた。創立以来幾度か企てられ乍ら座折した大学設立の宿願が遂に此の年実現の運びとなつたのである。

戦後は六・三・三・四の新学制が布かれ、各高等学校、専門学校は夫々新制大学を目ざして進む情勢となつた。学院に於てはすでに終戦後もない昭和二十一年四月専門学校の組織を改善して将来の発展に備え、二十二年には教職員、父兄、同窓より成る明治学院後援会が結成された。

二十三年一月には理事及び教授より成る「明治学院大学設立委員会」が設けられ其事務局長として若林竜夫氏がこれに当り後援会と協力、大学設立の大事業に乗り出すことになつた。先づ頻繁な委員の会合によつて基督教大学としての構想が次第に明瞭な形を取つて行つたが、之を実現する方策として四つの重要な準備が必要であつた。即ち教授陣の強化、図書館の整備、科学館の建設及び教室の増設であつた。(一四〇ページ参照)

教授陣の強化 之については村田新学院長の苦心により、経済学博士服部文四郎、文学

博士落合太郎の二氏が学院に迎えられ、中学部長の高橋源次氏（氏は間もなく文学博士の学位を授けられた）が大学へ転出した。

図書館 同館は明治二十三年神学部校舎兼図書館として建てられたもので、藤村島崎春樹氏、賀川豊彦氏等をはじめその昔学院に学んだ向学の青年達に親しまれた学院初期の記念の建物である。其れ丈に老朽の度も甚しいので之を念入りに改装して相当立派なものにした。現在この建物は同窓会館として使用され大学図書館が新たに北側の新校地に建てられた。現在の図書数は約七万冊で半数以上が洋書である。最近米国から送られた多くの図書や故中山教授の中山文庫、賀川文庫、山内文庫、川崎文庫、菊田文庫、マクネア文庫、沖野文庫、遊佐文庫、文庫、等がこの中に含まれて居る。

科学館、新制大学に於ては最初の二年間は一般教養科目を学ぶ事になつて居る為、自然科学、人文科学、社会科学の三系列の条件を具備する必要から建てられたもので、物理学教室、同実験室と機械室及び準備室。化学教室、同実験室と薬品室及び準備室。教課の補助機関として視聴覚教育の大きな役割を果す映写設備を持つた二つの階段教室、生物学教室とその研究室、二つの大教室と二つの普通教室等から成つてゐる。之等の設備は近代サイエンス・ホールとしての凡ゆる機能を完備すべく設計された。総坪数四百坪。

明治学院大学設置認可 明治学院大学設置願は昭昭二十三年七月左の如く提出された。

大学設置認可申請書

此の度学校教育法第四条によつて明治学院大学を設置致したいと思ひますから御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします。

昭和二十三年七月三十一日

設置者 財団法人明治学院理事長 富田 満

文部大臣 森戸辰男殿

添付された書類目次

- 一、明治学院大学設置要項
- 二、学 則
- 三、校地（図面添付）
- 四、校舎等建物（図面添付）
- 五、図書標本機械器具等施設

六、学部及び学科別学科目又は講座

七、履修方法及び学位授與

八、学部及び学科別学生収容定員

九、教員組織

一〇、設置者に関する調

一一、資産

一二、維持經營の方法

一三、現在經營している学校の現況

一四、将来の計画

明治学院大学設置要項抜萃

一、目的及び使命

本学は基督教による人格教育を基礎として広く教養を培うとともに深く専門の学芸を教授研究し知的及び応用的能力を発揮させることを目的とし、学問の自由を愛し人格の尊厳を重んじ自主的精神を養い以て世界文化の創造と人類福祉の増進に寄與せんとするものである。

第七章 戦後の躍進

二、名称

明治学院大学

三、位置

東京都港区芝白金今里町四二番地

四、校地

総坪数一二、〇六五坪一四、他に二、四〇〇坪拡張の予定

五、校舎等建物

総坪数二、〇八〇坪四五 他に校舎四二四坪新築の予定

六、図書、標本、機械器具等施設概要

図書

内国書 一三、九二二冊

外国書 一〇、二三七冊

計 二四、一五九冊

標本 九四九点

機械器具 一、七五一点

一〇、職員組織概要

学長	一	書記	一六
教授	二四	司書	八
助教授	二三	雇員	一四
主事	二	傭員	四
助手	二三	学校医	一
講師	五〇		
合計	一六六		

一一、学部学科別学生定員

文經学部第一部

毎年入学者定員 三三〇名

総学生定員 一、二八〇名

学科目別定員	
英文学科	三三〇名
社会学科	三三〇名
経済学科	六四〇名

文経学部第二部

第一部と同じ

総計

二、五六〇名

一二、設置者

財団法人 明治学院

一三、維持経営の方法概要

基本財産の果実、授業料、寄附金その他の収入によつて維持経営する。

一四、大学開設の時期

昭昭二十四年四月一日

其の後係官の実施調査を経て大学設置の認可が下りたのは翌昭和二十四年二月二十一日であつた。

直ちに各科各八〇名の男女学生の募集がはじめられ同年四月一日最初の入学式を挙行、茲に明治学院大学はその巨歩を踏み出すこととなつたのである。

専門学校の發展的解消 此処で専門学校の結末について簡単にのべる事にしよう。

昭昭二十四年三月、専門学校社会科は国民科の中修身につき、又英語科は外国語科の中

英語科につき、教員無試験検定の取扱いを受けた。

二十六年三月には最後の卒業生を送り出して廃止認可となり、明治二十七年二ヶ年制の高等学部が新設されて以来五十九年の歴史を持つ明治学院専門学校はその務めを果して発展的解消を遂げることとなった。次に学院専門学校の前身なる高商部について書かれた現大学経済学部長齊藤茂夫氏の一文（抜萃）を掲げる。

高商部設置の目的と其の後の伸展について

本来伝道者の養成と文学方面に特色を持つて居たわが学院が大正七年高等商業部を設置したのは、基督教的信念ある真執な実業家を養成するのが目的で従つて單に商業に関する知識を授けるのみを以つて満足せず、将来わが国実業界をこの基督教的精神を以て指導する商士の育成を以つてその根本方針としたものであり、他校の主旨とはおのずから異つた遠大な理想があつた。

当初は学生数も少なく大正十年三月の第一回卒業生は僅かに十三名に過ぎなかつたが、その独自の校風は年と共に社会の認めるところとなり、昭和三年四月には定員を四五〇名に増加し、組織もまた改めて商業科を高等商業部として高等学部から分離独立せしめ、事実上一実業専門学校となつた。

昭和八年には創立十五周年記念計画として、昼間勤勞に服し、夜間修業を志す青年のために第二部を設置したが、これは基督教主義専門学校としては最初の試みであつた。毎夜授業の間に行われる礼拝時の祈禱と讃美の歌とは、夜の静寂の樹々に響かい、敬虔なる境地に学徒の想を誘うた。

昭和十九年四月明治学院は青山学院の文学部と高商部及び、関東学院の高等商業部と従来自ら有した高等商業部、高等学部とを統合し、関東地方唯一の基督教主義文化系専門学校として残ることとなつた。校長は当時学院長であり、高等商業部長を兼任していた矢野貫城氏であつた。学徒の大部分が勤勞作業に動員せられ、屢々戦火の危険に襲われる戦時下の厳しい圧迫のなかにあつても、学校に残る少数の学徒と授業を継続し、礼拝を守り終えたことを顧みてわれらは心から感謝するものである。その祈りの声はやがて平和の歌声とかわり、新しい時代が苦悩の中から息吹きをあげた。

昭和二十年八月、敗戦とともにわが国は再び自由主義と民主化の時代に入つた。しかもこれは単に嘗てありし旧きものの復活ではなく、新しい生命をもつものであつた。

六・三・三・四制度の実施に伴い、明治学院大学は村田四郎博士を学長として昭和二十四年四月発足した。

日本商大併合 昭和二十五年六月、学院は川崎市溝ノ口の日本商科大学を合併し、一万七千坪の校地と千八百八十二坪の校舎を継承し九十五名の学生の転校を受け容れた。

学校法人に変更 学院は明治二十八年三月九日文部大臣から財団法人の認可を受けていたが昭和二十六年三月五日学校法人に変更する認可を受けた。

昭昭二十二年六月改選された法人の役員は左の諸氏である。任期は三十五年六月までの三年間、()内は選出母体である。

理事長	富田満(日基教団)	理事	J・O・デマーク(宜教師団)
理事	P・V・オルトマンズ(宜教師団)	理事	津田正則(評議員)
理事	伊藤毅(同窓会)	理事	野島進(同窓会)
理事	大川正(校長)	理事	都留仙次(学院長)
理事	坂庭吉雄(評議員)	理事	桑田秀延(日基教団)
理事	北村徳太郎(理事会)	理事	田上穰治(理事会)
理事	斉藤茂夫(理事会)	監事	工藤正平
監事	B・C・モアー		

六 大学其後の発展

学制の変更 昭和二十七年四月 文経学部第一部及び同第二部の名称を変更して文学部（英文学科社会科学科）及び同第二部（同前）とし、別に経済学科を独立せしめて、経済学科及び同第二部とし、経済科の外新たに商学科を開設、文学部事務取扱に村田四郎氏、経済学部長事務取扱いに服部文四郎氏が就任した。

変更の目的 学院基督教による人格陶冶は基礎をおく一般教育並に専門学芸の教授研究を目的とし昭和二十四年まず文経学部（英文学科社会科学経済学科）の一学部として開設されたがその当初よりすでに施設及び教員組織の充実を見た上は経済学科を分離独立させ文学部及び経済学部の二学部となしたき計画であつた。けだし民主的平和日本の建設に当つては日本経済の自立がその最重要の条件の一つであり、そのためには経済学及び商学の教授研究並に国際的視野に立つ指導的経済人の育成が緊要の要務であるからである。

昭和二十九年四月明治学院大学長に神学博士村田四郎氏就任文学部長に文学博士高橋源次氏、経済学部長に経済学博士服部文四郎氏が就任した。

又同年同月 明治学院大学第一部及び第二部の教育職員免許課程についてそれぞれ中学

校教諭一級普通免許ならびに高等学校教諭二級の普通免許授与の認定を受ける事となつた。

昭和三十年二月 経済学部長服部文四郎氏が逝去、学長村田四郎氏が経済学部長事務取扱い兼任となつた。

修士課程設置 同年四月明治学院大学大学院文学研究科英文学専攻（修士課程）が設置され翌三十一年四月教育職員免許課程について高等学校教諭一級（英語）普通免許授与の認定を受けた。

修士課程の学生は現在十数名、責任者は高橋源次氏である。

村田学院長の辞任 昭昭三十一年九月村田学院長は突如外出先で狭心症の発作におそわれ爾来静養の域を脱せず、学院長、教学部長、牧会等兼任の劇務に耐えられぬため遂に三十二年三月学院長の職を辞し専ら横浜指路教会を牧する事になった。

昭昭二十九年七月には遠くアメリカへ渡り世界宣教大会、同基督教々会々議に出席、アルマー大学より神学博士の位を贈られ、又学院大学建設資金のために活動老齢にも拘らず非常な元気で飛行機の往復にも何ら故障がなかつたのに俄に病の冒す所となつたのは、誠に残念であつた。

都留新学院長就任 昭和三十二年四月神学博士都留仙次氏が学院長に就任した。

都留氏は明治四十年学院神学部卒業、オーバーン神学校、エジンバラ大学等に留学、帰朝後は学院の神学部高等学部及び中学部に夫々部長及び教授として長年に亘り学院の為に尽瘁した。

昭和十五年から二十六年までフェリス女学校々長の職にあり、昭和十七年聖書現代語訳の事業が開始されるや、氏は同委員及び中央委員となり後旧約現代語訳委員長に挙げられ、この事業のために大いに貢献した。

由来わが学院は、聖書翻訳に関係深く明治初年に於ける最初の聖書翻訳に於てはブラウン氏が新約聖書翻訳の委員長、ヘボン氏が旧約聖書翻訳の委員長であつたが、今また旧約現代語訳委員長たる氏を白金に迎えたのは奇しき因縁と云うべきか。

大 学 の 現 況

文学部 (第一部)	部長 若林竜夫氏		教 員 数					
		学生数	専任教授	専任 助教授	専任講師	計	兼任教員	兼担教員
	英文学科	675	5		2	7	15	16
	社会学科	370	2	3	1	6	26	12
	計	1,045	7	3	3	13	41	28

経済学部 (第一部)	部長 齊藤茂夫氏		教 員 数					
		学生数	専任教授	専任 助教授	専任講師	計	兼任教員	兼担教員
	経済学科	738	3	5	1	9	16	17
	商 学 科	603	3	2	1	6	17	21
	合 計	1,341	6	7	2	15	33	38

第七章 戦後の躍進

文学部 (第二部)	部長 若林氏兼任		教 員 数					
		学生数	専任 教授	専 任 助教授	専任 講師	計	兼任 教員	兼担 教員
	英文学科	210	2		1	3	9	20
	社会学科	137		2	1	3	21	15
	計	347	2	2	2	6	30	35

線 済 学 部 (第二部)	部長 斎藤氏兼任		教 員 数					
		学生数	専任 教授	専 任 助教授	専任 講師	計	兼任 教員	兼担 教員
	経済学科	254	2	1		3	9	21
	商 学 科	175	1	1	1	3	11	23
	計	429	3	2	1	6	20	44

七 同 窓 会

明治学院同窓会長一色虎児氏の名はずい分古くから聞きなれた親しみ深いものであつたが昭和二十九年十月惜しくも永眠された。昭和三十一年三月十五日発行の明治学院学生新聞に左の記事が載せられて居る。

「同窓会々長として十九年間学院の發展に尽粋した一色虎児氏の遺族より、故人の一周年に記念として金拾万円を同窓会杉本主事に寄託された。一色氏は一昨年十月、夫人に後れること僅か三ヶ月で召天されたが一色家では昨年六月夫人の一周忌に当り故虎児氏夫妻の記念追悼会が催された。一粒種の義子さんは父君死去の一週間前に馬杉氏と結婚したが若夫婦は揃つて昨年のフルブライト留学生試験に合格し昨年八月相携えて渡米した。夫君馬杉氏はマサチューセツ工科大学院に義子さんはボストンのエマソン大学に留学中」

氏は学院同窓会初代の会長でこの記事にもある如く十九年の長きに亘り誠によき会長として学院の發展に力を尽された。氏の逝去は同窓会にとつて大きな損失であつた。

氏が病氣静養のため同窓会々長を辞した後は川崎已太郎氏が三年、都留氏が四年、堀氏

が二年会長をつとめられたが川崎氏と堀氏は既に永眠され、都留氏は学院長として就任された。昭和二十年以後は山梨県大月市長井上武右衛門氏が会長をして居られる。

明治十年築地に設立された東京一致神学校が第一回の卒業生として井深梶之助、植村正久、松村介石、瀬川浅の四氏を世に送つて以来八十年の長い間に、二万近い卒業生を出して居るが永眠を除き一万五千前後の在籍者がある。

この中には昭和八年廃校になつたため学院が引き受けた長崎東山学院の同窓生千五百名が含まれて居る。

これら同窓の多くが宗教界、教育界に活躍して居るのは云うまでもないが、芸術方面に多くの人材を出して居るのは注目に値する。軍人は非常に少なく井深健次氏の軍医中將位で今次戦争の推進力となつたような人物は一人も見当らない。

毎年五月に老若の同窓生、それに昭和二十八年からは女子も加わつて盛な同窓会総会が開かれる。今後は益々女子学士が数を増して錦上花を添える事とならう。

都下各大学には、白金会なるものが結成されて居るが地方でも横浜、阪神、名古屋、群馬、福島、岩手、札幌、函館、広島、静岡等其他総数三十以上の同窓会支部があり夫々よき交りを保ち学院の発展に寄与して居る。

特に戦後は大学設立につき活発な働きをしている。

八 校地の変遷について（昭和二年より二十八年まで）

杉 本 民 三 郎 氏

協同館とセレンス館

大正から昭和初期へかけての卒業生達にとつて、最も思い出深い場所は校舎よりも協同館とセレンス館であらう。

協同館は現在の中学校北側の低地にあつたヘボン館（最初のヘボン館でない）と称した寄宿舎の食堂で、階上はタイプライター教室をかねていた。昭和二年旧高等商業部の前庭の一隅に移築され協同館と称した。延一・二三坪の木造二階建てで今日もその場所に立つてはいるが、変り行く学院の姿を見守りつつ老の身を静かに横たえているといった恰好である。ここでは、その名の示すように協同組合により売店や食堂が営まれていた。階上二室、階下一室が食堂で、その他の小室には理髪店や学用品を売る店などが並んでいた。階上の食堂は喫茶と洋食で、階下の食堂には和食があり、味噌汁の付く朝食の仕度もできて自炊や外食学生などには便利であつた。

教職員や学生達の会合は、よく階上の食堂で行われ、クリスマスの頃にはツリーが美し

かつた。

学生達は休講の時などよくここに集つて五銭のコーヒーを飲んで雑談に時を過した。先生方もここで食事をする人もあり、当時の田川総理などはよくここに現われ、学生達と卓を共にして十銭のライスカレーを食べながら時事問題を論じていたものである。こういう時の先生と学生の親しみや、先生方の得意な話などは教室の講義よりも遙かに印象に残っている。食堂は教室以上の教場であると言うことができる。

協同組合は数年続いたが遂に失敗に終つた。その後高等学部教室の不足のため、教室として使用せられ、東亜科、経営科などの看板が掛つていた時期もあつた。戦後は一時学生の寮となつたこともあるが、学生達の課外活動の部室として用いられている。然し今日では大学の学生ホールとはお世辞にもいられない小さな存在となつてしまつた。近く改装の上高校生の部室として暫くは二度の勤めをすることになるであらう。

セベレンス館は、故井深総理が渡米の際、米人セベレンス氏の好意による資金で建てられたのでこの名がある。白金三光町に八四六坪の平坦ではないが極めて閑静な土地を求め、ここに大正七年十月、木造二階建、延二二八坪余の寄宿舎が建てられた。収容人員は四十余名で寄宿舎としては大きいものではなかつたが、大正七年から昭和十九年閉鎖する

までの二十六年間にここに起居した学生の数はいくつかない。又その隣接地の一隅には二階建延四六坪（後約七坪建増）住宅が建てられ井深総理は隠退後も逝去されるまでここに住われた。このようにセベレンス館は井深氏と深い関係があつたので先生の死後、外国名の嫌われた頃は先生の雅号をとつて湧泉寮と呼ばれていた。

昭和十九年、戦争も四年目を迎え、空襲は烈しくなつてきた。湧泉寮も漸く破損がひどくなり、その修繕費や舎監の俸給などが学院の負担となつてきた。偶々恩給基金が涸渇し、恩給制度の存続は将来学院の財政を危くするよう思われた。矢野院長は湧泉寮の土地建物を処分し、それを以つて恩給制度の廃止を企図した。理事会では賀川理事が土地を処分することに強く反対したため替地を他に求めることとして処分案は可決された。昭和十九年三月末日十九万三千円を以つて牟田鋳工所に譲渡せられ、大正七年以来の由緒あるセベレンス館は閉鎖された。この報に人知れず心を傷めたのは当時逗子に在つた井深未亡人であつたというのも無理からぬことである。当時セベレンス館構内の住家には高等学部長中山昌樹氏が住んでいたが、先生は予ねて病氣のため入院中の処、閉鎖の二日後四月二日召天された。何もかも暗い不安な時であつた。

翌二十年三月十日の空襲により三光町一帯は焼失したが不思議にもセベレンス館は火災

を免れた。その年の八月戦争は終結した。日を経るにつれて住宅の不足は深刻となつた。今となつてみればセベレンス館が惜まれる。昭和二十四年ミッシェンよりの住宅援助金を以て買戻の交渉をしたが、四十世帯の立退きは不可能であつたため断念し、赤坂寮を買うことになつた。然しその後先方よりの申出により由緒ある住宅と敷地七一坪を昭和二十六年の春七十万円を以て買戻し、幾分セベレンス井深両氏へのゆかりを繋ぎ戻すことができた。次いで昭和二十八年の春、旧セベレンス館とその敷地を六七〇万円を以て買戻すことができた。実に閉鎖後九年を経てセベレンス館は再び学院のものとなつた。相当荒れ果てていたが修繕した上、大学女子学生の寄宿舎として学院のため余生を捧げている。住宅は校宅として大川中学校長と三吉助教授が住っている。

総合改築計画

学院の総合改築計画は、昭和の初め田川総理の時代からの問題で旧中学部校舎のある所に鉄筋三階建の校舎を建てる計画があり既に設計もできて大いに期待を持たれたが沙汰止みとなり、田川氏の移転計画も理事会の反対に遇つて立消えとなつた。このため田川氏は昭和十年辞任し、ウィリス・シー・ホキエ氏が院長事務取扱となつた。理事会に改築委員会が組織せられ総合改築計画が樹てられることとなつた。淀橋角筈にあつた神学部土地、

建物処分による分け前と新たに三十万円の寄附募集によりこの計画を進めることとなつた。

昭和十三年六月、同窓会、父兄会が中心となつて改築後援会が組織せられ、同窓会長一色虎児氏が会長に選ばれ、同窓生伊藤毅氏（現学院理事）が主事に任ぜられた。募集期間は三ケ年であつたが、伊藤氏是不眠不休の活動をつづけ、二カ年半ではぼその目標に達し昭和十五年末に退職した。その間にホキエ博士は退職帰国し、矢野貫城氏が学院長に聘せられた。新建築は先づ旧中学部北側のバレーコートをつぶし、第一期工事として中学部の六教室、延二一〇坪の二階建校舎一棟が昭和十六年九月に竣工した。次いで海軍墓地沿いに在つたヘボン館（最初のヘボン館でない）と称した旧寄宿舎で当時中学部教室に使用されていた一棟を取壊わし、第二期工事として延二五〇坪、二階建、六教室の中学部校舎一棟が昭和十七年の春新築された。この二棟は目下中学校校舎として使用されているものである。

時は戦争第二年目で、建築物に対する防火規制が喧ましくなつてきた。学院は政府の命令と補助金によつて、旧中学部、及高等商業部の校舎を外側と床をモルタル塗とし、天井と壁には防火剤を塗付して火災に備えた。

戦争も半年を経過して耐となり物資は次第に不足し、建築資材の制限は酷しくなつてきた、恰も当時ミッシン援助金を断つて専門部の学生数を増加したため教室の不足を来した。そこで改築第三期工事として旧高商部現高等学校裏に在つた宣教師館第一号を取壊し、その跡に二階建、講堂一、教室五、延二二八坪の建築にかかり、昭和十七年十一月完工した。当時は開戦以来正に一年で資材の値上り人手不足のため時間も金も当初の計算より多くかつた筈であるが、四万九千円で完工している。これは恐らく当時としては新築の最後であつたであらう。その後は民間の建物では資材の配給は受けられなかつた。

戦争も一年を経過し日一日と苛烈さを加え防火訓練と勤労働員に明け暮れるようになり新築どころではなかつた。この三期に亘る改築工事は山根可式氏の設計監督により山中工務店の施工によつて行われたが、資金の面では伊藤毅氏に負い、工事推進には当時の理事磯部房信氏に特に負う処が大きかつた。

新制度のための増新築

敗戦のため我が国の教育制度は根本的に変革せられ六・三・三・四の制度が確立せられた。その結果専門学校は廃止せられ、中学部は高等学校、中学校に区分せられ、新制大学が発足することとなつた。文科系の大学も一般教育としてサイエンスをやらなければなら

ない。理化学の教室や設備がなければ大学として認められない。そこで旧高等学部脇のテナスコート二面をつぶして理科教室を建てることになった。敷地は地下に戦時中、駐屯部隊によつて掘られた防空隧道があり、又将来道路拡張計画に触れる場合のことなども一応調査せられたが他に適当な場所とてなくこの土地が選ばれた。

この時も後援会が父兄、同窓生を中心として組織せられ同窓生浜田正氏を会長に推し、大学設置委員会事務局長若林竜夫教授が中心となつて、一千万円の募金運動を開始した。一方工事は株式会社曙組によつて昭和二十四年九月着工せられ、教室五、準備室四、実験室二を有する延四〇〇坪、モルタル塗二階建の堂々たる建物が翌二十四年九月に竣工した。当時はすべてがまだ戦争の疲弊より回復せず、建築資材も不足かつ貧弱であつたから、今日から見れば立派な建物とは言えないが、戦後始めて建てられた建物で、戦中、戦後の暗い十年間を、食う物、着る物さえ無く過して来た学院の人々にとつては当時の力量に余る大事業であつた。工費は約八六四万五千円を要したが、前記後援会の募金の外に、米国両ミッシヨンの復興資金より一四四〇万円の援助があつたことは感謝に堪えない。この建物は大学設立の要件を満したに止まらず、その建築の槌音は復興への一步を告げる響として人々に明るい希望を呼び覚ましたことに於いて記念せらるべき建物である。

大学の発足に伴い男女共学制となり、募集定員は昼間、夜間共に三二〇名となり、更に年限は専門学校よりも一カ年延長となつたため学生数は急に増加し始め普通教室の不足を来たした。そこで戦後の第二期計画として、戦時中の改築計画第四次に予定して遂に着工できなかった。第四号館に接続する一棟が旧高商部（現高等学校）裏北側崖沿いに建てられた。最初の第四号館北の部分の建増の他延一七二坪、六教室を有する二階建モルタル塗の大学校舎が建てられ、学院としては始めての女子便所、女子控室をも備え、膨張する大学に幾分の息抜きとなつた。工事は前記科学館同様暁組によつて行われ、昭和二十五年に完成した。これは戦後第二番目の建物で、この建物も前記のミッション復興資金と寄附金に負うものであつて、学院は常に必要な時に与えられて来たことを痛感させられる。

多摩川運動場

昭和九年十一月中学部は東京府の好意により、大田区調布嶺町の多摩川堤下の河川敷三千坪を無償借入した。府立第六、麻布、正則等の公私立中学校の借地も並んでいた。当時は運動の施設もなく一面の草原であつたが、当時の都留中学部長（現学院長）は、毎週生徒を交代に、或る時は全校一斉に、この多摩川原につれて行き、体操や遊戯をやらせて浩

然の氣を養つた。電車も目蒲線との特約で五割引であつた。その後、中学生の正科となつた作業科の実習地としてこの場所が使用されることになつた。昭和十六年四月、そこから三丁ほど距つた調布嶺町二ノ六三に一二〇坪の宅地を借り、此処に木造平家建五七坪の作業科教室と管理人住宅及び物置を建設した。(更に終戦の直前、昭和二十年八月に接続の畑地一二五坪を借入れたが、これは昭和二十八年返還した。)生徒は毎週交替に先生に引率されて作業場に行き、農耕作業や授業をやつた。約一町歩の畑には、色々の野菜が栽培せられ、時々教職員にも即売された。食糧不足につれて甘藷、馬鈴薯類が多くなり、小麦や陸稻まで作るようになった。戦中戦後の食糧難の頃は、この土地から上る芋類や小麦などの配給が、どんなに皆に喜ばれたことか。終戦の年の秋には、学院の全教職員を作業教室の前庭に集めて『芋祭り』をやり、教職員は家族連れで腹一杯さつま芋を食べさせて貰つたことなどは忘れられない思い出である。

食糧難の緩和と共に農場を廃し運動場として整地し、作業場は、川崎市長坂に移つたが過去二十年間に多摩川作業場の果した役割は忘れてはならない。

この作業場の番人中村氏は、戦時中、作業教室が何度か焼夷弾を見舞われ、発火の危険に遇つた際、勇敢にもこれを消し止めた功により矢野院長から表彰されたこともある。奇

特な人物で、食糧難時代には、夜盗の撃退や冠水から畑を守るためには家族をあげて、昼夜挺身これに当つてくれたが、今は既に亡い。

赤坂寮と白金寮

空襲で家を焼失した人、その他住居をなくした人々は次々と学院内の宣教師館その他に移つて来た。その数は十世帯に及んだ。構内の宣教師館は五棟あつて、一、三、五の奇数番号はプレスビテリアン、偶数はリフォームドのものであつた。一号館は前述の改築計画で戦時中取壊し残る四棟の中二号館階下は本部事務所となり、四号館に矢野院長、五号館二階には杉本幹事が住んでいたため。その他の場所に十二世帯三十余人が入つてきた。従つて構内隣組の配給の仕事なども一苦労であつた。

戦争が終つてミセス・オルトマンズ、ハナフォード博士夫妻などが、歸つて来るとの報があつたが、宣教師館は前述のような状態で住居はなかつた。然し宣教師館はもともと宣教師の住宅として指定された建物であるから、どうしても空けなければならなかつた。

終戦間もなく四人の米国教会代表者が総司令部の招きで飛来した中にリフォームド教会の代表シェーファー博士があつた。当時学院の会計理事鈴木氏が博士に会つた際、「リフォームド教会では明治学院の創立者達のために特別に献金した金が七千弗ほどある」と洩ら

したという話を思い出した。前述の如き宣教師館の実状を訴えて、その資金を避難者達の住宅建設のために欲しいとシェーファー博士に申送った。一方プレスビテリアン教会でも後にこの事を知り、ハナフォード夫人の尽力でリフォームドと同額の資金を送ってくれることになって、合計約四〇〇万円が住宅のために用意された。

金はできても焼跡に売家は無かつた。殊に十世帯以上を収容できるアパート式の家を探すことは絶対不可能とされていた。ハナフォード博士夫妻は昭和二十二年の春に帰つてきたが、住居がなかつたため矢野院長の居た四号館の二階に移つて貰つた。矢野院長はその年の夏退任されたが、新住居ができるまで宣教師館に留ることになった。翌二十三年村田四郎氏が学院長に就任されたが、当時村田氏は経堂の借家に親戚と同居していた。院長公宅は急務となつた。矢野院長が何れは引越される時が来るとしても、宣教師館である以上、再びこれをふさぐことはできない。どうしても院長公宅を設けなければならない。而も学院の近所に。このような切迫した事態の下に、夏季休暇中各方面に手配して懸命の努力をつづけた甲斐あつて、全く運よく今里町九六番地、学院から徒歩五分の閑静な場所に、土地約一五〇坪、建物六五坪、附属建物を合せると延八三坪の売家があり、接渉の末建物は五五万円を以て昭和二十三年九月二日に調印し、村田院長は直ちにここに移つて来

た。又その附屬の建物には、焼出されて学院構内宣教師館に居た二世帯を移し、階上を会議室とし、全体を白金寮と名付け学校附屬建物として申請した。

尙構内に残っていた十世帯の行先については全然見当がつかなかった。その中にミセスオルトマンズが帰つて来られ、二号館二階を空けることになり構内避難者の居る所は狭められた。夏休中、家探しに奔走したが空しかった。八月の末、偶々三井信託を訪ねた処、偶然にも信託されたばかりのアパートがあるのことに直ちに現場に行き、検分が終るや否や信託に対して韓旋方を依頼した。場所は赤坂表町二ノ一五、青山御所に近く、旧赤坂区役所の隣で敷地一九五坪、二階建延一〇〇坪、杉皮葺ではあつたが、建てたばかりの木の香も新しい新築で、階上階下共に各十室ある。或る会社が社員の家として建て七月末にできたもので当時としては、こんな売物は全く思いがけないものであつた。昭和二十三年の九月、白金寮を手に入れてから一週間後にこの建物を契約し、屋根を瓦に葺替え、当時表向には引けなかつたガス、水道を入れ、ここに学院構内に残っていた十世帯と他に二世帯を収容した。このようにして、戦後の住宅問題は一応解決をみた。

それから既に九年、ここで多くの子供達は育ち又生れた。先に移つた人々は新しい家を建てて次々に出て行つた。そして今尙満員である。仮りに戦後この二つの建物がなかつた

ら、われわれはどんなに惨めであつたであらう。日米関係が極度に悪るかつた時、米国の教会は学院のことを覚え、その創立者達の苦心を記念して献金していた。そして終戦後それがそつくり学院のために捧げられ、それによつてこの二つの寮はできた。われわれは軍事に於いてのみならず、米国に在る友人達のキリストにある寛容と友情の前にも降伏の外はない。

学生寮と馬絹分校

戦後学制の改革により、従来の専門学校は廃止せられ新制大学となつた。新制大学は、文科系でも一般教養としての理科の設備を必要としたので特に戦災を受けた学校にあつては大変な事であつた。

日本商科大学は戦前新宿区淀橋にあつて善隣高等商業、後に善隣専門学校と称する専門学校であつた。支那大陸や滿蒙方面に進出する者を養成することを特色として名があつた。淀橋で戦災に遇つて校舎を失い、戦後川崎市長坂にあつた旧東部第六二部隊の兵舎であつた建物を政府から借入してここに移り、日本商科大学として発足したが、間もなく経営難に陥り閉校の運命に立到つた。当時新制大学廃止第一号として社会からも注目された。

昭和二十四年、学院に合併の申出があり、村田院長等が土地建物等を検分し、学院の拡張委員会に諮つたが、距離が遠いから利用できないとの理由で、話は一旦立消えとなつた。然し先方では百数十名の在学生の措置に窮し、仲に文部省も介在して、学長より全学生の引取方申出があつた。学院では幾分収容の余地があつたので全学生を転入学の形で受入れ、大学、専門学校の方々の科に入学させた。昭和二十五年の六月の事であつた。

日本商科大学の寮には尙ほ学生が残つていた。セベレンス館を失つて寮舎のなかつた学院では学生募集のためにもぜひ大学の寮舎を必要とした。そこで日本商科大学が土地、建物を返還すると同時にこれが借用を大蔵省に申請した。政府は借用でなく払下の申請を要求した。然し当時これを払下げる資金もなく且つ拡張委員会は遠距離を理由に反対であつた経緯もあつたのでこの要求には応ぜられなかつた。当時そこを買収しようとする私鉄会社などの競争相手も現われ、遷延を許さない事態となつたので、己むなく将来払下申請をするとの一札を入れて借入の契約を結んだ。それは学生の転入より二カ月遅れて昭和二十五年八月のことであつた。土地一七・一八八坪余、建物は木造二階建の校舎二棟と他に附属の建物を合せて延一、八八二坪余、貸付料年二万六千円であつた。日本商科大学に対しては、投資した設備費の一部補償として、五十万円を支払つたが、この金額は同大学から

転入した学生の授業料の何分の一でしかなかった。謂わば全く人の禪で相撲を取つたわけである。

敷地は平坦でなく中に大きな窪地があり、窪地を挟んで両側の丘に旧兵舎の建物を中心に附属建物が並んでいた。北側の校舎となつていた方を大学学生寮とし、南側の寮舎であつた方を中学校の職業家庭科分教場として使用することにした。

この土地は水の便が極めて悪く、窪地の下方にある小さな谷清水をモーターで引上げる設備をし、浴場、食堂、室の間仕切、舎監住宅等を急造して大学の開設に間に合わせた。その後鉄製ベッド百台を入れるなどの設備をして学生百二十名が収容されていた。

一方南側の旧寮舎を中心に、中学校の職業科教室を設け、馬絹分校と称した。窪地を耕作場とし、チューリップなどの花卉栽培も行われた。又山羊、家兎、鶏、などを飼育し、色々の研究や実験も行われ、管理者、教師の宿舍も附属館に設けた。生徒達は毎週先生の引率でここに行き、半日を都塵を逃れて自然に親しむことを楽しんだ。

偶々政府のすすめで昭和三十年、この地の替地として東村山を購入したのでここは閉鎖し、男子学生の一部は戸塚の北明寮に移り、中学校、職業家庭科は白金の本校に還ることになった。

学生寮にいた学生や中学生は、目蒲線で大井線溝ノ口で乗下車し、バス又は徒歩によつて往復したが、これらの学生には思い出多い『溝の口時代』となつてゐる。

白金海軍墓地

今日大学のある所は、四年前までは白金海軍墓地と称せられた場所であつた。中央に高い山があり昼なお暗い鬱蒼とした杜は禁を犯した学生達に好適の逍遙の場所であり、夜は梟が啼き、時には刑事犯人の逃込む場所でもあつた。往時を知る者には、今日モダンな高層ビルの内に、煌々と電灯の点つた夜景を観ては殆んど己が眼を疑うほどの変り様である。今われわれの足が立つてゐる場所が、どんな処であつたかを知ること無意味ではないであらう。

古い記録によれば、白金海軍墓地は、明治六年一月に設定せられたもので、旧幕時代には松平丹波守の邸第があつた。松平丹波守とは、領高六万石、信州松本藩主戸田氏のこと、明治維新以後戸田姓を名乗つた。設定当時は六〇七〇坪であつたがその後道路その他に分割して約二四〇〇坪となつてゐた。墓地内には、祭場、休憩所があり、葬儀師その他の係官が配属されてゐた。祭場等は、大正十二年の大震災で破損して取壊し、その後は番舎のみを存置してあつた。この墓地には、明治六年より大正十二年に到る五十余年間に、海

軍將校五一名、同候補生、下士官一〇三名、水兵四三八名、雇傭人三名、合計五九五名の海軍関係者の外に、昭和四年埋葬せられた伊太利海軍士官を加えて五九六体の遺骸が葬られていた。六百に近い大小の墓碑の外に遭難記念碑や、西郷隆盛の献燈、勝安房の筆になる墓誌などの碑類もあつた。

墓地の管理は旧海軍省の所管であつたが、終戦後、軍の解体と共に国有財産として大蔵省に移管され、大蔵省は昭和二十二年東京都庁へ無償無期限でこれが管理を委託した。又五百八十余の無縁者を代表して、復員庁第二復員局海軍残務整理部がこれに干与し、祭祀は靖国神社に委託され、清掃、番人等の経費も同神社の負担となつていた。

学院と海軍墓地の関係

明治学院が築地から当時の荏原郡白金村であつた現在の土地に移つたのは、明治二十年で海軍墓地の設定に遅れること十五年である。爾来、学院では同じ高台にあるこの土地の分譲を希望していたが、大正六年海軍省が分譲申請に応じない方針を決定して以来その望みは絶たれていた。

偶々昭和八年、長崎市にあつたリフォーム系の東山学院が閉校せられ、その財産処分による資金（五万円）が明治学院に寄附せられた。当時の総理田川大吉郎氏は、その資金

を以て昭和九年、海軍墓地内に、久原邸境に沿う一九三坪と道路側に沿う六九五坪合計八八八坪の買収に成功した。しかし前者は利用できない場所であり、後者は高低二カ所に分れていた。ここは作業場、弓場、射的場、バレーコート等に用いられたが、何故か其処に到る通路がなかつたため、道路より其処に通ずる幅九尺の道路を政府より借用し、一年毎に契約を更新して来た。

田川総理は、将来海軍墓地を買収する意図を以て前記二筆の土地を墓地内に買ったものと思われるが、翌十年には現在の敷地を売却して小田急沿線に広大な土地を求め、そこに鉄筋による本建築の学院建設を計画した。然し理事会の賛同を得ず、田川氏は辞職してこの夢は実現されなかつた。

敷地拡張計画

明治二十年、学院が白金に移った当時は、敷地八、七〇〇坪で、生徒数は二八〇名であつた。大正十年道路拡張のため南側一九二坪、大正十三年には市電五反田線のため東側六八五坪合計八七七坪を東京市に分割したため、校地は段々狭くなつたが、これに反して生徒数は次第に増加し、昭和二十五年には三八〇〇名を算え、移転当時の十四倍に達した。従つてそれを收容する建物は増築され、運動場は益々狭隘となつた。往時人々を惹きつけ

た美しく設計せられた校庭のローンは剥ぎ取られ砂利で固められた。偶々軍国主義の波が押し寄せ遂に軍事教練が始まり、狭い校庭は軍靴の砂塵に汚れ、記念樹は次々に立枯れて行つた。

昭和二十年、平和は蘇つたが、それはただ疲労と混乱の極であつた。この混乱に乗じて軍事施設を獲得しようと官民の各種団体は、懸命の争奪戦を展開した。学院は幸に戦火を免れたものの上述のような事情にあつたことと、今一つはジットしては損をするというような焦燥の心理もあつて、矢野院長等は海軍経理局長であつた武井大助中將を案内役として久里浜、横須賀、横浜などの海軍施設、或は中央線沿線の軍需工場などを物色して歩き廻つたり、又ミッシェンの人々の案内で横須賀の海軍施設を觀て大いに食指を動かしたこともある。又米国の第八軍を通じて上大崎にある海軍大学校の払下を運動したり、運動場獲得のため大蔵省を通じて海軍工廠跡を交渉するなど好機逸すべからずと敷地拡張運動に狂奔したが何れも不調に終つた。偶々理事山本忠興博士などは、広い遠隔の土地よりは、狭い近隣の土地がよいとの意見で、藤山工業図書館や、久原邸なども話題となつた。戦争が終つて米国より四人の宣教師が飛来した。その中にリフオームド教会の代表シェーファ博士があつた。博士は学院に立寄つた際、海軍墓地のことを訊ねた郊外発展の計画

が不調に終つた時、山本博士等の意見とシェーファ博士の質問とは、海軍墓地へ眼を向ける契機となつた。

交渉経過八ケ年

敗戦によつて帝國海軍は消滅したがその巨大な残骸の処理をするために復員庁が設けられ、未曾有の復員業務と残務整理が行われることになつた。国民は空襲の恐怖から脱したが、数年間の栄養失調と深刻な食糧難のため飢餓線上にあつた。加之パージの旋風は官民を問わず人々の心胆を寒からしめ役人や軍人達は全く落着を失つていた。従つて大蔵省も復員庁も海軍墓地のことなど全然考える暇はなかつたのか再三の交渉にも何の反応も示さなかつた。その中昭和二十二年大蔵省は『海軍墓地は東京都へ無償貸付けたから払下には応ぜられない』旨回答してきたので、その後は東京都建設局公園緑地部靈園課に交渉を始めたが、元々墓地を護り、墓地を建設することを任務とするこの役所の責任者が墓地廃止に同意する筈はなかつた。而も無償無期限であれば尙更のことである。遺族団は勿論反対であり、遺族及び旧海軍を代表する第二復員局にしても、これらの団体より非難を蒙るような計画に賛成する筈はない。更に靖国神社にしても、氏子たる遺族の怨を買つてまで墓地廃止に同意する筈がない。このように関係諸団体は、墓地存続が何等の負担にならない

こと、廃止によつて大蔵省の外は何人も利益をうけないのみか遺族や旧海軍関係者より非難をうけるなどの理由から積極的に賛意を表するものはなかつた。その間、墓地内の空地を児童遊園地とするの案が地元議員から都議会に提出せられ、既に予算も計上せられたとの報が伝わり、学院では益々焦燥を感じ始めた。そこで再び交渉を大蔵省に戻し、内交渉をすすめた結果、関係者の間に完全な同意があれば払下げてもよいとの意向を確かめた。

関係者とは東京都・復興庁、靖国神社及び遺族団であつて学院は関係者ではない。従つて学院はこの問題を発議することはできない立場にあつた。関係者は前述の如くこの問題に係ることを好まなかつた。況んや僧まれ役を買つて発議する者はなかつた。然し発議に最も適当且つ有力な立場は現在の使用者なる東京都であるとの判断による学院神学部出身で元東京都経済局長であり、当時全国知事会事務局長であつた大迫元繁氏に相談し同氏を通じて東京都霊園課長（当時係長）三木氏にこの問題の斡旋方を依頼したが三木氏が病氣のため進捗しなかつた。昭和二十五年八月、三木氏が始めて関係者を招集して問題を発議しその意見を徴した。時を同じくして学院は大蔵省に対し再度払下の申請書と陳情書を提出した。三木氏は再び発病し交渉は再び停滞した。翌昭和二十六年二月、三木氏は病を押して関係者を靖国神社に集め、海軍墓地廃止の具体案を示して関係者の諒解を得た。それ

第七章 戦後の躍進

は(一)墓地内の一隅に百二十坪の記念霊域を設け無縁者を合葬する。(二)有縁者は夫々の希望に応じて改葬する。(三)右に要する経費は明治学院に於いて負担する。などの条件であった。三木氏はこの日の無理がたたつたのか、それから丁度二ヵ月後の四月六日に死去された。

その年の七月に入つて前年八月に提出した申請に対する大蔵省の回答があつた。それは『関係者間の完全な諒解を条件として払下げる』との大蔵省の正式の意志表示であつた。その後三木氏の後任靈園課長となつた井上氏を中心に関係者間に於いて協議に協議を重ね十二月末に到つて漸く覚書を交換して完全な諒解に達した。翌二十七年一月、更めて協議経過と諒解成立証拠書類を添えて再度大蔵省宛払下申請を提出した。その後測量などの实地検証、価格査定などを経て同年三月二十四日即ち占領から独立する一ヵ月前に国との間に売買契約が成立した。新たに学院の所有となつた場所は左の通りであつた。

所在地 港区芝白金今里町三九番地

面積 二、一九九、一九坪

立木 一五二本

建物 一七、七五坪

支払つた代金は一、九一〇、一〇〇円で一坪当り八六八円であつた。

改葬と整地工事

アメリカと関係深い明治学院に墓地を売るとは遺族や軍人にとつては快い事ではなかつたであらう。又キリスト教に英霊の取扱をさせることには不安があつたであらう。改葬と整地工事、霊域建設は東京都霊園課の指揮監督の下に一切の補償と経費は学院の負担に於いて行われることとなつた。

廃墓地の公告は規定により有力新聞（朝日、毎日）全国版に夫々三回に亘つて掲載し、伊太利人の墓に関しては、外務省、伊太利大使館を通じて伊太利本国に照会するなどの手配をした。その結果、最初八名であつた遺族関係は縁故者を含めて四十余名となつた。これら有縁者には、それぞれ希望により替墓地を選定し、或は自家墓地に移転することとした。一方霊域の設定、納骨堂の建設、墓石、記念碑類の処理、都衛生局の管掌にある遺体の処理及び番人の解雇、番舎の移転、霊域建設後の維持、管理、祭祀等の問題などのため協議に協議を重ねて一年半を費した。工事は木田建業株式会社に請負わしめることとなり、昭和二十八年十月一日着工し翌年三月末日に完了した。

墓は海軍軍人であるため水葬にせられて遺骸はないとの推測は全然外れて、二、三墓の

外は全部遺骸であつた。深さは何れも一丈或はそれ以上で、将校の墓に至つては約二間の地下に分厚い二重棺に収められ、内部の棺はまだ腐敗していなかつたが、遺骸は風化されてキルクの小片のようになり、ボタンや軍服の布片を残すのみであつた。約五百体の水兵の遺骸は瓶に入れられ石板の蓋で封ぜられていたが内部には、人体から出たものか、外部より入つたものか水が溜り、そのためバクテリア菌の発生を防いだものか、遺骨は人体そのまま組立てられていた。中には肉片を付けたものさえあつて、工事場は妖気に包まれていた。遺骨の小片は予ねて用意した故人の氏名、年令、階級、死亡年月日を焼き付けた特製の小壺に収め、墓地内に仕つらえた仮小屋に靈として安置し、残骸は別棟の仮小屋に収容した。墓石は遺族関係を除き悉くこれを粉碎したが将校の墓は今日の大將、元帥にも比すべき大ききで、運搬にも粉碎にも容易ならぬ手間を要した。

その中に一二〇坪の記念靈域が建設せられ、納骨堂が竣工し、記念碑類の移転が終り、五百九十五柱の骨壺は堂内に納められ、五百余体の残骸は堂内の地下に埋葬された。その間有縁者の改葬も運び、整地工事も進み、昭和二十九年三月末日を以て工事を完了したが、この工事の責任者であつた木田組の池田氏は工事終了後間もなく他界された。轟の三木氏につづく二人目の犠牲であつた。

工費は改葬、整地、納骨堂建設、霊域設定その他の附帯設備一切を含めて三、二五八、〇〇〇円であつた。この費用は坪当り一、〇八六円で、曩の土地払下代価坪当り八六八円を加えても一坪二千円足らずであつた。工事は終つたが、霊域にある納骨堂その他の地上物件の帰属について問題が起つた。協議の末、関係団体では『国のものである』として大蔵省に受取方を申請したが、大蔵省としては『国有財産と認められない』としてこれを拒んだ。土壇場となつて問題は振出に戻り、払下許可取消にまで溯及するの形勢となつた。当時学院では既に新図書館の起工式が行われていた。最早、後退を許されぬ事態となつたので、関係者と共に大蔵省に対し、執拗に請願をつづけた結果、特例を以て漸く申請は受理せられ、満八カ年に亘る交渉は落着した。

抑々墓地払下の交渉は昭和二十一年に始められたが、何ら資金のアテがあつたわけでもなく、又交渉が成功する見通しもなかつた。若し交渉がスラスラ進んだなら、この土地は学院の手に入らなかつたであらう。

昭和二十五年の夏、当時日本に帰つていた松本亨教授が、休暇で米国に帰られるのを機会に、図面や説明書を託して両ミッシェンボードへ対し、このため二千弗の援助を依頼して貰つた。同氏の尽力により、その年の十一月、リフォードボードより千弗の援助があ

つた。翌二十六年にはプレスビテリアンボードより同じく千弗の援助が得られた。その後シェーファ博士が顧問として来任せられ、大学新建築の構想をもつて、この隣接地の買収に力を入れ、又ハナフォード博士夫妻の協力により、昭和二十七年から八年にかけて、ミッシオン両ボードから各一万弗ずつの援助金が寄せられ、幸じて買収と整地工事に間に合せることができた。

九 学院の建築計画

松本 亨氏

学院の数多い建物は一つ一つが歴史的存在であつて見ただけで如何にも古く伝統がしみ込んだ観を与える。誠に奥ゆかしい姿である。しかし一旦これを内部から専門家が調べるとどれもこれも寿命のきているものばかりである。全部新しく建て直さなければ危険であるという結論は充分以前から出ていた。問題はいつ実行にとりかかれるかであつた。

村田院長の提案で学院に「理想教育」の方針が建てられたらその推進を側面から援助するために、態々リホームド・ミッシオン・ボードの主席主事という要職を捨てて戦前フェリス女学院の院長をつとめたことのあるL・J・シェーファ博士が院長顧問として就任したのは昭和二十七年の十一月であつた。博士は着任早々学院の建物の老朽した有様をみ

で近江八幡の一柳（ヴォリス）氏を招き学院再建築の案を作成せしめた。又学内建築準備委員会を組織し自から委員長となつて計画をすすめた。運よくプレスビテリアン・ミッションのJ・C・スミス博士も来朝し村田院長と三人で理想教育と併せて建築計画の話が進められ今度は明治学院の番であるという了解が出来、一躍にして計画は具体化した。しかしボードの都合で突然シェファー氏は帰国する事になり村田院長実行委員長となり松本総主事が常務主事となつて計画がすすめられた。

昭和二十九年三月五日に第一期（五カ年）のプランが承認されて愈々建築事業が開始された。その第一歩は大学図書館で旧海軍墓地の敷地の西側中央に鉄筋コンクリート二階建（一部三階）全四百六十坪の最新式のものを建てる事になり志村太七氏の設計、大成建設の施工が決定した。同時に体育館の修理、礼拝堂の修理も承認されて建築計画は快調の亡り出しであつた。

一方資金の方はプレスビテリアン・ミッションから一億八百万円、リホームド・ミッションから七千二百万円、国内で、約九千万円の計画で、父兄、学生、同窓生、教職員、校友すべてから寄附を仰ぐ事にし募金委員会が組織され関根正治氏がその主事となつた。

大学図書館は一年足らずで完成し、直ちに大学本館の設計と施工に移つた。総坪数千八

第七章 戦後の躍進

百坪鉄筋コンクリート地下一階、地上五階、塔二階、エレベーター付きの近代的校舎で三年間に完成の予定で今日建設中である。又この間に大学はこの新築校舎のうち使用可能の部分で授業を開始し昭和三十二年四月からは殆んど全部がここに移転した。そして旧大学校舎は新装されて高等学校が使用している。

建築委員会は更に東村山に総合運動場を購入した。旧陸軍少年電信学校あとの敷地約三万坪と校舎、講堂等で、地理的にはやや遠いうらみはあるが将来発展性のあるところである。ここに野球場をはじめあらゆる運動の設備が着々と出来つつあり、学生が羽をのばして運動している様子は今迄の学院にみられない壮快なものである。

建築委員会に残された将来の大きな仕事は中学校の増築と改築。体育館の新築、大学々生ホール、音楽教室、講堂などであるが、海外からの寄附が予定より五分の一減少した事、毎年希望が増えるため建築計画が常に変更して行く事、学内の人事にも移動があつたりして、今建築事業全般が難行しつつある。

これからこの事業がどうなつて行くか、それは学院自体の将来と共に内外の校友の等しく深い関心を持つて見守つているところである。

十 募 金 活 動

昭和二十八年三月建築委員会が組織され学院の施設拡充を目ざす建築計画が軌道にのり始めるや、同委員会の下部組織として昭和二十八年八月学内教職員よりなる募金委員会が構成された。

委員会は昭和二十八年九月先ず教職員募金、続いて在校生、新入生、取引先等より募金活動を開始した。

これより前ミッション援助については専ら松本総主事によつて諸般の手配が進められた。昭和二十九年七月学院長村田四郎氏、昭和三十年八月総主事松本亨氏はそれぞれ渡米して各地に援助方を懇請した。一方米国より来日された。プレビテリアン・ボード総主事 J・C スミス博士等の各氏にはその都度現況を説明し、協力援助方を願つた。

同窓会募金については昭和二十八年十月十日同窓会役員会に於いて計画を説明し協力をお願いしたが強力に母校の発展に尽力する方針が確立され同窓会役員は全部募金委員となつた。同窓会募金の組織は順次発展している。

同窓会募金常任委員会

第七章 戦後の躍進

委員長 戒田 欽次氏

副委員長 横田 二郎氏

委員 伊藤 毅氏外二五名

同窓生募金委員会

理事、評議員等役員全員

職域別委員（主として職域支部長に依嘱）

地方別委員（主として支部長に依嘱）

クラス別委員

右合計二七〇名

発足当時の同窓会長は堀洋三氏、現在井上武右衛門氏、これに同窓会主事杉本民三郎氏はいつもこの活動の中心として建築委員会事務局と緊密なる連絡のもとに困難なる事業を推進している。

一方学院関係者以外の篤志家より協力を求めるために昭和二十九年二月資金募集実行委員会が発足した。

委員長 北村徳太郎氏

委員 藤原義江 郷司浩平 秦庄吉 日高第四郎 掘洋三 井深健次 一色虎児 池部良 磯部房信 伊藤毅 賀川豊彦 戒田欽二 加藤高藏 霧島昇 耕治人 小出正吾 小林辰四郎 桑田秀延 三宅克巳 牧田弥太郎 宮地通彦 武藤健 中上川鉄四郎 中島久万吉 内藤隆 野島進 落合太郎 冲野岩三郎 大迫元繁 佐々木邦 関川重義 杉山茂 鈴木春 田原春次 高橋権六 高橋清治郎 高垣松二郎 田中久兵衛 武石雄三 十和田操 津田正夫 都留仙次 鶴原文夫 和田英作 王文成の諸氏。

この委員会は主として銀行、会社等に働きかけている。

(一) 募 金 状 況

「当初よりの累計（昭和三十二年八月迄）」

募金目標額……………二五八、三〇〇、〇〇〇円に対し
 申込額……………一七〇、七九四、八六三円（対目標額 六六％）
 入金額……………一六六、七五八、七五五円円（対目標額 六五％）

内 訳

母 体 別	目 標 額	入 金 額
ミッシヨン	一八〇、〇〇〇、〇〇〇円	一〇三、四九一、一九八円
		五七％

第七章 戦後の躍進

同窓生	一五、〇〇〇、〇〇〇円	三、九二四、五六二円	二六%
在校生	八、九〇〇、〇〇〇円	六、四四七、二三〇円	七二%
新入生	四五、五〇〇、〇〇〇円	四七、七四五、一五〇円	一〇四%
教職員	二、七〇〇、〇〇〇円	二、四七四、二八三円	九二%
海外校友、宣教師、教員、理事、役員、校友	六、二〇〇、〇〇〇円	二、六七六、三三二円	四三%

更に新入生の拡充費寄附の増額と取扱方の改善、長期計画として寄附保険等についても研究中である。ミッシェンの援助については現在約束されているもの以外は一休みの状況であるが、これに関して松本総主事の渡米が期待されている。

建築計画は峠を越した感があるが資金面に於ては最も困難な時期に遭遇しているので学院一致、祈りを以てこの難局打開に当り、更に内外の学院関係者の協力援助を確保して計画完成を期したいと考えている。（関根正治氏提供の資料より抜粋）

十一、八十年記念式典計画

昭和三十三年十一月の学院創立八十年記念日を迎うるに当り、左の委員会が組織されそ

れぞれの仕事に当る事となつた。

八十周年記念実行委員会

都留 仙次 松本 亨 斎藤 茂夫 平林 武雄 竹中 治郎 大川 正

日下 一 若林 竜夫 杉本民三郎 徳永 清 新谷 正宏(学生委員長)

遠藤 誠(第二部学生委員長)

記念式典小委員会

都留 仙次 斉藤 茂夫 若林 竜夫 竹中 治郎 平林 武雄 松本 亨

宮崎 栄 矢作弥寿久 北村 仁 黒田 正明

八十年史編纂委員会

都留 仙次 松本 亨 杉本民三郎 平林 武雄 斉藤 国治 渡辺 勇助

顧問

富田 満 伊藤 毅 高谷 道雄 オルトマン ヴァン・ワイク

和田 豊彦 佐々 木邦 鷺山弟三郎 以上の諸氏

執筆者

英文、ヴァン・ワイク 邦文、渡辺 勇助 の二氏

第七章 戦後の躍進

明治学院八十周年記念祭行事予定表

月日 / 摘要		大	学	高		中	学	校
十月三十一日(木)	午後四時	前後四時	前夜祭 於校庭 ファイヤープレイ					
十一月一日(金)	午前十時半 午後一時 午後三時半 午後六時	午前十時半 午後一時 午後三時半 午後六時	記念式典 於チャペル 映画祭 於黒川公会堂 コーラス 演奏会 シンフォニーコン サート //	午前九時半	記念式典 於チャペル 展覧会(日時未定)	午前八時半	記念式典 於チャペル 運動会(日時未定)	
十一月二日(土)	午前十時	午前十時	体育祭 於東村山				展覧会	
十一月四日(月)	午後一時	午後一時	講演会 於チャペル				//	
十一月五日(火)	午前八時	午前八時	アイス・スケート 於後樂園					
十一月八日(金)	午後五時	午後五時	演劇公演 於品川公会堂					
十一月九日(土)	午後五時	午後五時	// //					

第八章 将来の学院

まえがき

今回八十周年史が編纂されるに当り過去の歴史のみならず、将来の学院のあるべき姿に就いても記載さるべきであるとの議があり、ここに歴史の若干頁がそれに割当てられる事となつた。この事は重要でもあり又極めて有意義なことでもあるだけに仲々六ヶしい問題で果して論ずる所が正鵠を得るや否や疑問であるが少しく之を試みようと思う。

この章の為に現在学院の第一線に活躍しつつある方々に腹藏なき御話を願ひ、その時の御話を含めて、数ヶ条に亘り記述することにした。

一 学院の自由教育

学院の教育は極めて自由であつた。人は神の前にあつて一視同仁、各人は全世界にも代

え難き価値を有する人格、人と人との間には国境もなく、階級的差別もなく、上下の區別もなく、権力的差別もなかつた。視野は常に世界大であつた。斯くの如き明朗潤達な大神を受けついで学生を薰陶した第二代目の井深総理も人の事には一切立入らない主義であつた。しかも自らは極めて謹厳且つ几帳面な方であつた。これを当時の封建思想と比べるならば実に天地雲泥の差で、このような校風の下に学生は各自がその天分を十分に伸展せしめることが出来たのである。学院の教育は人を型にはめこむ事を決してしなかつた。神学を学ぶ者の中からも宗教家の外に画家、音楽家、文士、社会改良家、或はダンスの指導者等各方面に思い思いに「己がじし道」を開いて行つたので、随分型破り、あるいは風変わりなものをも出している。この自由の精神の為か固い権力の枠の中に生きる軍人や官吏の世界には学院出身者は極めて少ない。我学院の中心生命はこの自由を離れることは出来ないように思われる。過去に於てそうであつた如く将来も永くこの伝統は守られて行くであらう。

二 思想あり信仰ある学府

世には理論家であるが故に信仰を嘲笑し、信仰家であるが故に理論を輕蔑すると云う例

が少くない。或る時代には神学校経営者が伝道は余り高き学識を必要としないのみか、高い学問を身につける事は實際の伝道から離れる誘惑の源であると考え、伝道者養成には聖書の通俗的な知識で十分であるとし高級の学究を毛嫌した傾向があつた。この考え方は決して当を得たものとは云えない。勿論實際問題として聖書や神学の研究に、より多くの魅力を感じ実地伝道から離れたと云うような例もないではない。しかしこれは人間的弱点から生ずることで学究と信仰とは相反するものではない、勿論かかる人間的弱点から来る事態にも留意する必要があるとは云えないが、神学の研究から高級の知識や、深い専門的な学究を遠ざけることは間違いである。学院の神学部（嘗つての）は最高の標準に依り、ギリシヤ語やヘブル語を教えて聖書の原典を研究せしめ又神学の教科書は全部原書を用いるなど凡て高級の学力を標準とし程度を常に高く保つて居た。我学院の神学部から多くの權威ある神学者が輩出されているのはそのためと考えられる。将来の姿としての学院も、基督教の信仰に立つ学力高き学府でなければならない。

英文学、商業学、経済学、社会学等の部門に於いて職業的教育が充分行われることは勿論であるが只単に英文学が講ぜられ、経済学元論が講ぜられ、社会学の学説が講ぜられる外にその基督教的立場が明示或は暗示されることに勉めなければならぬと考える。其外に

時間の許す限り新約、或は旧約其他の基督教が授けられ、故中山氏のカルヴィンの研究が生かされて、学院は隠然カルヴィニズムの本山と目せらるることを目指すも結構であろうし或は創始者の面目を大いに生かしてピューリタニズムの学院となすもよいのではあるまいか。

三 大学南校と学院の成立

ヴァーベック博士は明治二年、政府に招かれて維新の大業に参画すると共に、旧幕府の洋学所を改めて大学南校となし、後の帝国大学の基を作つたが明治四年から七年まで大学南校の教頭として教鞭をとつた。しかし約束の期限が切れるのを待つて直ちに辞表を出し、九州、四国、中国地方の伝道を開始した。又博士は学院の教育にもヘボン、ブラウン氏と協力し、これに参画し、理事長をも務めたのである。いわば学院と大学南校とは乳兄弟であつたともいえるのである。

博士が政府の懇請にも拘らず大学南校を退いたのは何故であつたろうか、それは政府が全く基督教の価値を認めようとしなかつた為と思われる。維新政府はすべての事に大改革を行つたが、切支丹禁制については幕府の方針を踏襲し明治元年三月十六日の日附を以て

新たに禁制の高札を全国津々浦々の辻々に掲示した。

ヴァベック氏を招いて大学設立の計画を依頼したとは云つても、之は只氏の学識と才幹を用いて欧米先進国の大学の形骸を移植しようとしたに過ぎず、その精神となつて居る基督教に對する認識は全くなかつたのである。

日本の知識階級の多くが宗教に無関心であるのは當時も今も変わらないように見える。彼等は宗教即ち迷信、理性ある者は宗教の要なしと考へて居るのである。かかる人々によつて運営される大学にあつたヴァベック氏が一日も早く己が使命である伝道に専念したいと願つたのは当然の事であつた。

茲に少しく一般の学校、特に官学と基督教学校について其の行き方の相違を考へて見たい。

官学の大をなした原因は政府の経済力を以て完全な設備をなし内外人の教授を思うがままに招き得た所にある。天下の謂所秀才は雲の如くに集まり、その多くは立身出世を第一の念願として勉学にいそしんだのであるから、明治、大正、昭和三代を通じてこの官学出の秀才が日本の指導力となつたのは、誠に故あることで、経済力に乏しい私立学校の遠く及ばぬ所である。

もしこの社会に何らの欠陥も問題も無いとするならば、我々は何も云う所はないのであるが、何人といえども現在の社会が由々しき欠陥を露呈しつつあることを認めない者はない。まい。

現代生活は物質的には未曾有の進歩発展を遂げて居るにも拘らず精神的、道徳的には大いなる不安定と破綻を示して居る。

此の破綻と不安定がどの程度にまで進展するかは尙将来の問題に属するが、現に露われて居る著しい兆候として知識階級或は社会の上層に属する者の犯罪の多いことが挙げられる。而して之等不純な大人の世界に対して不信を抱く一部の青少年が両親や教師に対する信頼をも失い、その教うる所に何らの權威をも認めようとせず、流れの低きにつくが如く悪の道に押流されつつあるのは誠に悲しむべき事実である。犯罪者の数は、更に犯罪の一步手前にある者がその幾倍もある事を示すものであり近頃多いと言われる青少年の自殺者に於ても同様の事が云えるのである。

これらの事実は現代人の精神的破産と見るべき由々しき現象と思わなければならない。而してその原因は現代の文明と思想が不健全である事を示すものであり、その不健全は過去一世紀に亘る唯物思想と、精神教育を疎かにした知育偏重の結果と見なければならな

い。

今もし世間を物質力を信ずる陣営と精神力を信ずる陣営とに分つとしたら、我が基督敎学校は確かに精神力陣営に立つて来た者と云い得るであろう。官学は果して何れに立つて来たであろうか、科学と、科学の営む現社会に徹頭徹尾直結して来た官学は物質力陣営に属して居ると見て間違ひあるまい。人或いは云うであろう、官学にも哲学科あり倫理道德を研究する人々がいると。しかしそのパーセンテージは見るに足るものがない。官学生の主力は八、九分まで物質力陣営にあると云わねばならない。

われわれは決して科学敎育を輕視するものではない、否大いにその必要を認めて居る。しかし之までの世間一般の敎育が、精神面にあまりにも消極的であり否定的であり、政府そのものは基督敎々育に対しては圧迫的でさえあつたことを声を大にして警告したのである。

基督敎に立つ者より見る時、思想戦は正に現代の十字軍である。其の戦局は決して樂觀を許さぬ段階にある。

官学は現代社会より生まれ、現代社会を生みその循環を繰返している。従つて現代社会の持つ誤りから抜け切る事は困難である。現代社会の精神面に現われたる由々しき欠陥は

精神界に目をそむけているものの救い得る所ではない。勿論東大其の他にクリスチヤンの教授、学長等がおりその感化はありとするも、唯物的傾向が全体として断然強いことは否めない。

茲に永遠的見地に生きること第一義としこれを校是として堅持し、これがために棘の道を踏み来りし学院の、現代に果すべき重且つ大なる任務がある。

四 礼拝の問題

学院は基督教に依つて人格的教育を施すことを目的として学則に唱つているのであるから学院にある者は凡て礼拝を守るべきであることは当然である。しかし大学に於いては、その年齢層の精神的影響から考えて学生の自由に委してある、これは学院のみならず、他の基督教学校に於いても同様である。但しその自由に委してある理由は、礼拝を軽視する意味では断じてない。これは当人の厳肅なる自由意志の選択に依らなければその意義を失う故に、又却つて悪影響を及ぼすことを考えての措置である事を忘れてはならない。学院に於ける礼拝の重要性から云えば学院の生命を決する中心問題であり、過去に於いても、現在に於いても学院の存亡を賭して戦い来たつた問題である、故にこれは礼拝を守る側に

於いても真剣さと熱誠を以つて守るべきであり、又守らぬ者も基督教主義の学院にありながらこの厳肅なる学院の要請を拒否する理由をよくよく己が心に確かむべきである。礼拝に関する限り守るも守らぬも共に厳肅でなければならぬ。これを軽々に扱うことは学院生活の冒瀆と云わねばならぬ。

三十一年十月の学院学生新聞のアンケートに依る調で見ると、礼拝に出席せぬ者二六%、たまに出席するもの五二%、大低出席するもの一六%、毎日出席する者五%となつてゐる。他のクリスチャン大学の例を見てもA大学が五%、R大学は八%の礼拝出席者となつてゐる。われわれはこの数字に依つて一喜一憂する必要はないが、兎も角無関心な者の多いことは明かである。唯この無関心な者に対する取扱いについては慎重な措置を必要とする。礼拝の時間を怠惰ならしめることは問題である。礼拝の時間は普通の授業時間より猶一層緊張すべき貴重な時間なのであるから、それにふさわしい措置が必要と考えられる。

学校側に於いても雑務に妨げられて礼拝を軽んずるような事があつてはならない。

其昔ローマに於いて基督教に対する迫害の烈しかった頃、信徒は生命の危険を冒してカタコム（地下の洞窟の墓地）で礼拝を行つたと聞く。又かのピリグリムス・フアザースが万難を排してメーフラワー号で新大陸に渡つて行つたのも自ら信ずる神を礼拝する自由を

得んが為であつた。学院はそのピューリタンの直系の子孫たる人々を創始者としてゐるのである。その創始者の意図は神を礼拝しつつ学ぶ学院を建設するにあつたのである。

神の前に衿を正す聖なる時を軽んじてはならない。信仰と学問のならば行わるる所こそ真に人間を完成し、現代文明の不安を是正する所の牙城たることを確信するものである。

五 理想教育

理想教育案は村田前院長の提案として相当声を大にして海外にも呼び掛けた大きな問題である。しかしこれは決して新しい問題ではなく、漠然としてはいたが永年の懸案であつた。要するに最近の通弊であるマスプロダクションとしての教育を排して、少数の学生を相手に手の行届いた教育をし度いとの理想なのである。

総て理想には現実の困難が伴うものであるが、わざわざこの理想案実施のためのアドヴァイザーとしてシェファード博士が米国のプレスビテアン及びリフォームドの両ミッシオンを代表して来朝したのであるがこの案の完全なる解決を見ぬうちに病のため帰米したのは如何にも残念なことである。

しかし兎も角この理想案は一部分ではあるが中学校に於いて実施されつつある。此案が

全学院に有力に実施されるまでにはまだまだ多くの問題があり研究が必要である。これは対象たる生徒数と、教うる側の教師の数とから来る経済問題であるからなかなか意の如くならない。或る観点からするならば学院の創始者達は皆理想教育者であつたといひ得ると思う。

かの有名な札幌のクラーク博士は学生に接すること僅か八ヶ月であつたと聞くがその間に驚くべき大いなる感化を残したことはそこに内面的な力のあつたことを物語るものである。我々はこの理想教育の実現に客観的な条件の興えられることを祈ると共に内面的条件については更に真剣でなければならない。

最後に賀川、佐々木、都留三氏の言葉を以てこの項を終ろうと思う。共に学院の将来に對する希望を含んだものである。

六 自由と敬虔が永遠に

賀川 豊彦氏

若し明治学院にあの当時あの様な立派な図書館が無かつたならば、私は明治学院を早く棄てていたかも知れない。

実は私は一生を支配する程の智的満足を明治学院の図書室から獲得し得たのであつた。

第八章 将来の学院

あの当時私の組は六七人の極少さい組であつたが、私は実に贅沢な善い学校だと思つた。……其の頃の白金は今よりも少し美しかつた。春には桜が校門の傍に咲き乱れ、ハリス館の二階からお隣の大きな広い庭が、自分の庭の様に見えた。校庭から石器時代の土器が出るので、雨降りの揚句はよくその土器を探し廻つた。ヘボン館の第五階はいつも我々の祈禱会の催される所であつた。其処から品川湾は一瞬の下に収められていた。何とも云えない眺めを恣にすることが出来た。時々校庭に蜚氣楼が立つので腹這いしてよく逆倒に映る美しいミレージを眺めた、徳富蘆花の「自然と人生」の中に書いてある雑木林の美しさに誘惑せられて、目黒の方面に毎日必ず散歩に出掛けた。

その頃の目黒はまだ野趣に溢れて居て何とも云えない程の美しさが残つていた。よく中山と二人で池上の本門寺辺り迄歩いたことがあつた。その当時神学予科でキリスト伝を教授せられた松永文雄先生が目黒に住んで居られたから、私はよく其処へ通うて行つた。そしていつも先生の住んで居られた藁小屋が美しいと思つて帰つて来た。然しもう今日ではあの辺りは全く大きな町になつて仕舞つて、見る影もない有様になつた。そして明治学院も昔の様な詩的な処が無くなつた。昔の建築は随分堂々たるものであつたが、今（大正末期を指す）はヘボン館の火事やサダムホルの火事や、校門の傍にあつたチャペルの無

くなつた為に、私の居つた頃の建物は今総理の居られる図書館のあるホール（今は同窓会本部のある建物）だけになつて仕舞つた。

然し建築場等は考えように依つてどうでもよいものである。どうぞ希くば白金に神に付ける自由と敬虔が永遠に続く様に祈りたいものである。

（五十年史より再録）

七 明治学院大学の特色

佐々木 邦氏

学問が先きか人格が先きかと問うたならば、読者諸君は人格が大切だといわれるに相違ない。どんなに頭がよくて学問が出来てもその人格が低劣なら、その学問は自他を誤る禍の本であり、どんなに軍事科学が発達しても平和は来らず、却つて人類の破滅となることは世界の現実が示すところである。ところが旧制大学令はその第一条に「大学は国家に須要なる學術の理論及応用を教授し並びにその蘊奥を攻究するを以つて目的とし兼て人格の陶冶及国家思想の涵養に留意すべきものとす」とあつて人格の陶冶は「兼て留意する」程度であり、その根本の眼目は「……學術の……教授並にその蘊奥を攻究する」にあつたのである。これは欧米先進国の知識の吸収に性急であつた余りとはいへ、片寄つた一面的な人間を作り出すことになつてしまつたことは争えない。

第八章 将来の学院

次に学間に国境があるというならばこれ又物笑ひであるにちがいない。けれども、旧制大学は国家に須要なる學術を研究教授する機関であると定義され国家主義という鉄の枠をはめられていた。真理は真理のために求められず人類文化の創造とその福祉増進のための自由なる学問研究は阻止されがちであつたのである。明治学院はこうした明治以後の狭隘な国家主義的功利主義的立身出世教育の根本的修正を叫びつつ今日に至つたのであつた。新制大学の理想を掲げた学校教育法第五十二条には「大学は學術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の學芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とあるが、その根底は人格の完成という理念であり、この人格完成の理念は基督教に依る教育でなければ実現し得ないという確信が明治学院の歴史であつたのである。八十年の荊棘の道は長かつたが明治学院の根本主張の上に日本の教育の進路が定められようとしているのである。

明治学院はその創立の初から内外の同信の友の美わしい協力によつて建てられた学校であり、英語教育の充実は世の人のよく知るところ、来るべき国際時代の指導者はかような学府から生れるであらう。（明治学院生活より再録）

八 学院を恩寵の家に

都 留 仙 次氏

私は今般測らずも母校明治学院々長の職に招かれました。

かかる選任が多数の有為な人材のある中に、つたない、乏しい私の上にくだされたことは身に余る光栄であります。その負荷の大きいこと、責任の重いことを顧みますと、昔の予言者が召された時のように「私は堪えられません」と告白するの外はありません。

わが明治学院はすでに八十年の歴史をもつております。また、その発祥の時を顧みればヘボン塾にさかのぼり、実に九十八年にも及ぶのであります。

しかし学院の真の基礎は遠くイエス・キリストに据えられているのであります。キリストこそ真の基礎であるとパウロはコリントびとへ書き送りました。

世には様々なバベルの塔を築く向があります。しかしわれわれのこの学院はベテル即ち神の家であります。これは天に導入する門であります。またベテスダ即ち恩寵の家であります。

この学院即ち神の家の存立の意義はキリスト教的品性の陶冶にあると思います。それは心の清い人の養成を意味します。

第八章 将来の学院

学院の学徒はダビデの歌にある「エホバの聖き山に登る」ことを約束された人々であります。彼らは自由人であり、また平和人であります。自由とは世の汚れ、形式主義、邪惡からの自由であります。自由のあるところには活動、成長、冒險的進出があります。平和のあるところには思索、研究、協力、一致、同情、喜び、寛容、忠信があります。

この自由と平和とを獲得し、また樹立しますには不断の戦があります。

われわれの戦には時間的なものと永遠的なものとの二方面があります。その時間的な戦には感覺的な世界と機械的な世界があります。

次にわれわれには時限を越え、これを離れた精神界の戦、即ち永遠的な価値の世界の戦があります。これはわれわれが負わされています信仰の世界建設であると思います。これは自由と平和の信念を以て世の病患を癒し痛苦をやわらげる尊貴なる任務であります。

学院には設備や、財政や、校務運営の面において極めて重要な業務をひかえて居ります。しかし学院は種々な外的条件を充実に行くと同時に、更に進んで教育の内的要請に応えて行かねばならぬと信じます。それは学徒各人の人格、品質の涵養であります。学院は絶えず心を砕いて、その教職員や学徒の魂を天の国籍に移す基本的な「いとなみ」が要望されています。

私自身は無能無力であります。私自身の能力や知識などは頼むところではありません。キリストによる人の和と心からの協力に望を置くのであります。これこそは学院の生命の泉、学院の建設、維持、経営の基調であると信じます。

この際私共はただ神をおさるの外、人を恐れず、事業を懼れず、真理を帯として腰に結び、正義を胸当として胸にあて信仰の盾をとつて立ちたいと思います。

私共は祈り、絶えず感謝し、御言を足の灯として日々の歩行を続け、そして主の葡萄園の労役に服したいと思ひます。

私は本日から直ちに兄弟たち、同労者たち、学生たちの足を洗う働に服する覚悟であります。

(学院長就任の辞)

「汝等貞固^{カクツ}して揺かず、恒に勵みて主の工^{ワザ}を務めよ、そはなんぢら主に在りて其行と
ころの勞^{ハタシ}の徒然^{ムナシ}からざるを知らばなり」

(ヘボン氏が我国伝道開始五十年の祝会へ寄せられた聖句)

あとがき

この八十年史が編纂されるについて二つの条件があつた。即ち始めの五十年間の歴史は鷺山第三郎氏の五十年史を要約すること、及び分量はB 6二〇〇頁の本にすることであつた。第一については、五十年史は井深先生御存命中に書かれたもので、大体に於いて正確なものと先生の承認されたものであるという理由により、又第二についてはいづれ百年史が出る事であるから、その中間のつなぎの意味で簡単なものでよからうとの理由によるものであつた。

終戦当時の混乱で資料の散逸、或は焼失せるものがあり、その蒐集が思うにまかせず、編纂委員、顧問の方々に色々御配慮を煩わし、特に高谷道雄氏には重要な御助言を戴いた。

き 又齊藤茂夫、若林竜夫、杉本民三郎、松本亨、加藤七郎、平林武雄、徳永清、竹中治郎、
が 北村仁、由布保、針ヶ谷松太郎、高井貞橘、原田昂、関根正治、高橋泰郎、矢作弥寿久其
と 他の諸氏には貴重な資料を提出して戴いたり御手数を煩したりしたが全部を掲載出来な
あ かつたもの、或は甚だ残念乍ら單に参考として用いるに止めたものもあり、之等の方々に

は深く御礼と御詫びを申し上げます。

杉本氏には同窓会名簿編纂中の特に御多忙の中から正確且つ興味深い記事を寄せて戴き感謝に堪えません。

編纂の企画については和田豊彦氏、写真については平林氏大竹新助氏の並々ならぬ御配慮を煩わし是また深く御礼を申し上げます。

記事の割振りの不手際、杜撰、其の他甚だ不本意な所が多く之については編者の微力の致す所と深く御詫び申上げる次第である。

「尙歴代総理其他」の表は、調べの行き届かない箇所があつたり、紙面が狭ま過ぎたりして意を尽し得なかつたが、記事の不備を補う上に幾分役に立ちませぬかと考えて入れることにした。

やがて正確、完全な百年史の出現を期待して筆を擱く。(一九五七年十月)

昭和三十三年十月二十五日 印刷

昭和三十三年十一月一日 發行

編輯者 渡 辺 勇 助

發行者 都 留 仙 次

印刷所 富士高速印刷株式會社

東京都港区芝白金今里町四二

發行所 明 治 学 院

不 許	復 製
-----	-----

正誤表

資料蒐集に予想以上の時日を要し校正に時間が不足した為誤植其他の手違を生じ誠に遺憾に堪えません。人名、数字其他重要な項につき後々のため正誤することになりました。他は大方の御判読を御願ひ申します。
(執筆者)

頁 行 誤

正

頁 行

誤

正

三六	11	空白	十
三三	3	安藤達四郎	安藤達三郎氏
二三	6	十六年七月	十四年九月
二〇	3	松本享氏	松本亨氏
一五	14	角への	角管へ
一〇	14	現教授	現講師
〇八	11	造司氏	髓爾氏
〇七	2	空白	三〇 四一
〇六	3	前途	前記
〇五	8	ピリンスト	プリンストン
〇四	7	石本水	石本氏
〇三	3	空白	一〇六
〇二	6	昭 and 8 年	昭和3年
〇一	20	就任	辞任
〇〇	16	添山氏	漆山氏
三六	下ヨリ	ギター	キダー
三三	6	会長	学長

三六	3	三十年	二十年
三三	5	昭 and 十二年	昭和二十三年
三〇	12	同年八年	同年八月
二七	13	茂氏	茂夫氏
二四	3	教会教学部	教団教学局長
二一	6	三級級	四級級
一八	11	中学部長	中学校長兼
一五	5	湖北寮	高等學校長
一二	6	武衛門氏	山中寮
〇九	9	文庫	武右衛門氏
〇六	3	二十八年	三十八年
〇三	5	二十二年	三十二年
〇〇	2	昭和二十年	昭和三十一年
三六	4	新谷	新居
三三	12	道雄氏	道男氏
三〇	9	建築場	建築物